ある魔女の受難

高見　梁川

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ある魔女の受難

【Ｎコード】
Ｎ４６８２Ｅ

【作者名】
高見　梁川

【あらすじ】
古代遺跡で発見された亜神エノクの遺物を巡る争いに巻き込まれたオレはイチかバチか遺物を作動させ・・気づいてみれば美少女に変わり果てたオレがいた！。

第一話

　迷宮内に剣戟の音が響いていた。
もう何階層降りてきたか記憶にないが、追撃の手が止む気配はない。
「これでも日頃の行いはいいほうなんだがなあ・・・」
「アホ！暢気なことといってる場合か！」
迷宮のなかでは扱いずらいであろうショートスピアーで神速の突きをくりだしながらツッコミを忘れないこの男の名はレーヴェ。
槍をとっての近接戦闘においては大陸有数の使い手だ。
「炎雷」
ポツリとつぶやくように呪言を紡ぐ美女はセイリア。炎の制御に関しては右にでるものはいない。
なんかオレの上着がこんがり焦げているような気がするのはご愛嬌だ。
気づけばもうオレの傍にいるのはこの2人だけになっていた。
「どこでこんなことになったのかなあ・・・」
　あまりにも想定外の事態だった。オレ、エルロイ・アーケイル・ノルガードの計画にはこんな予定はなかったのだ。

このヴェルミデラ大陸において、冒険者という職業は決して地位が高いものとは言えない。
その一番の理由は冒険者の収入源とも言える古代遺跡の管理が国家に握られていることであろう。一般に要人警護や傭兵じみた任務の多い冒険者だが、それは副業にすぎない。冒険者は傭兵ではないのだ。
また、冒険者は同業者間の連帯がないために報酬を叩かれる傾向にあった。

そこで、オレは一計を案じて、妖魔の勢力内にある遺跡の管理を願い出た。妖魔と国境を接するフリギュア王国は国境の警備の負担が減らせるなら、と、この提案にのってきた。フリギュアは隣国のワルキア公国と軍事的緊張が高まっていたため、渡りに舟と思ったのかもしれない。
この計画に賛同してくれた冒険者は１２６人。
驚いたことに大陸でも名の知れた冒険者であるレーヴェ・ブロンベルグや氷炎の魔女といわれたセイリア・ミトラ・ファルネーゼなど数々の精鋭が集まってくれた。
それでも流石に妖魔を駆逐するのは骨の折れる作業で、仲間にも犠牲者がでるのは避けられなかったが、苦闘のすえに遺跡を確保すると、それから先は早かった。
最小限の手数料でバックアップまで受けられるとあっては冒険者は千客万来である。懸案の街道の安全確保もあっという間に完了してしまった。
さらには冒険者ギルドの立ち上げ、報酬の規格化、冒険者の格付けなど、トントン拍子にことは進みいつの間にかオレは冒険者ギルドの長に収まっていた。

それが何ゆえこんなことになっているかというと・・・
遺物コレクターでギルドの上客でもあるガングール大公が迷宮内探索をしたいと言い出したのが始まりだった。
大公が武装した家臣を引き連れてやってきたことを、誰も不思議に思わなかった。
そして、大公を迎えに出したサリエルほかの仲間たち・・・いや仲間であった者たちと言いなおすべきか、彼らもまた大公の引き連れてきた者が、ただの私兵などではなく、完全武装の王国騎士団であるということを報告しなかった。
あとはまあ・・・地獄だった。冒険者も、そうでないカタギの者も、

皆殺しになった。いかに腕利きの冒険者であっても武装を解いた状態で集団戦に巻き込まれれば為すすべはない。
初撃で戦力の大半を失ったオレは、かろうじて一振りの剣を手に入れると、数えるほどにまで討ち減らされた仲間とともに迷宮のなかへと逃げ込んだわけだ。
だが騎士団の追撃は執拗を極めた。迷宮の隠し通路はあっさりと暴かれ・・・サリエルの助言があったのだろう、逃げ道は全て塞がれた。オレたちに許されたのは危険な妖魔と戦いながら、迷宮の深部へただ降りていくだけ。
いつしか仲間たちは1人減り2人減り・・・現在にいたるというわけだ。
「しつこいな・・・やつ等もそれなりに痛手は受けてるはずなんだが。」
レーヴェに言われて気づいたが、確かにこれは執拗すぎる。王国騎士団のおそらくは精鋭であろうが、その損害は１００人に達するだろう。国境紛争を抱えた中級国家が許容してよい損害ではない。
「損害を無視してよいだけの遺物があるはず。サリエルは遺物の管理官だった。」
なるほど、セイリアの予想とおりなら納得がいく。しかし、神話級の遺物は噂だけは有名でも発見されたためしはない。
いったいどんな確信があってここまでのことに及んだのか。
「サリエルと一緒にいた連中・・・なんと言ったかな。確かフギンとかムギンとか言った・・・・あいつらが探索に入ったのは1週間くらい前の話だろう。
どこまで潜ったか・・しらないか？」
「あなたが知らなければ私たちが知るはずはない。」
「サリエルが素直な報告をあげてるとも思えんしな。」
・・・・ごもっとも。
「遺物ねえ・・・魔力水晶とか魔剣の類は出てたと思ったが・・・
まさか神の鉄槌ってことはないよな。」

古代王国アカーシャを滅亡に追い込んだ魔術兵器、そんなものが埋まっていたらどんな犠牲を払っても手に入れようとするだろうが・・・。

「神の鉄槌はモルディーニ地方で使用されたからそれはありえない。」

冷たい声でセイリアが否定する。

「それに神の鉄槌は自爆兵器だから残骸も残らなかったはずだぜ。」

レーヴェまでつっこんできた。それくらいオレにもわかってるっての。

「じゃあフリギュアに縁の遺物って言えば・・・エノクの魔道具あたりかな。」

「・・・・・・・エルロイ正解。」

こころなしかセイリアの声が震えているような気がしてオレは思わず目を向けた。いついかなる時も沈着冷静なはずのセイリアの目は迷宮の奥のある1点に向けられていた。

世界樹にとまる鴉の紋章。魔術に造詣のある人間なら誰もが知るその紋章は・・・・

「亜神エノク・・・・・」

そう、古代王国の大宰相にして始原の魔術師、有史以来、大英雄ルフェージュとともに、ただ2人だけ人から神にいたったもの。

その紋章がオレたちの眼前で鈍い光を放っていた。

第二話

「亜神エノク・・・・」
それは古代に栄えたアリアントス王国において神話とともに語りつがれる存在だった。
このヴェルミデラ大陸に初めて打ち立てられた統一王朝の立役者。
１０００年の長きにわたって王国の統治を司った不老不死の存在。
先天的な特異体質にしか使えなかった魔術を、初めて体系化し、普及させた始祖の魔術師。
そして、自らの広めた魔術知識を王国が独占したことによる王国支配階層の腐敗に嫌気がさし、王国の滅亡を予言して神の座に登った亜神。
その亜神の紋章が、眼前にある。
「サリエルたちが狙っていたものは・・・・これか。」
「まさか本当にエノクの遺物とはな・・・。」
「まだ、遺物があると決まったわけじゃない。」
セイリアは早くも冷静さを取り戻している。
「確かにな。しかし・・・オレたちのレベルで解呪できる・・・か？」
オレが魔術術式を読み解こうと門鍵に触れたその時、重厚な鉄製の扉は音もなく開きオレたちを室内に招きいれた。
・・・これは信じられないことだ。現にようやく冷静さを取り戻したセイリアも再び呆然としている。エノクほどの大魔術師が迷宮内の工房に呪鍵をしない、ということはありえないのだ。
思いもかけず室内に入れたオレたちだが、中の様子を見渡して息をのんだ。
術式の想像すらできない重層式の魔方陣。見たこともない鉱物で創られた魔術機械。そこに秘められた叡智の深さ、広大さに言葉もない。

「なんというか・・・人間の進歩ってものを嘲笑いたくなるシロモノだな。」
レーヴェが苦笑するのも無理もない。魔術師としても1流のオレだが、欠片も理解できない。超1流のセイリアでも・・・あの放心ぶりからすると期待はできまい。
「マスターの認証を確認。初動操作を開始します。」
「誰だ！？」
不意に聞こえた声にオレたちはあたりを見回す・・・が、誰もいない。幻聴？ありえない！。
「あれ・・・・」
セイリアが指差す先、そこは魔方陣の中心、稼動した術式が渦を巻き、淡い光を放っていた。
手荒く危険な事態だった。遺物探索では侵入者を感知すると自壊呪法が発動するトラップが頻繁にある。対策は・・・
「リードスペル。」
渦を巻く術式に手を伸ばして呪言を紡ぐ。
術式の構成を読み取りその発動を阻害する魔術。剣技も魔術も1流ではあるが超1流とは言いがたいオレだが、この魔術だけは超1流と言える
魔力の高さやセンスではなく、ただ思考の処理スピードが必要とされる魔術だからだ。
だが、これは規格外すぎた。思考が追随できない。構成を読み取るどころかこちらが・・・オレは愕然とした。こいつはオレの思考を読み取ろうとしている！。
そして渦が語りだした。
「オーラパターン解析、二次認証クリア。されど思考混濁により第三法術は起動できず。思考入力から言語入力へ移行します。ご命令を。マスター。」
「マスター・・・まさか・・・オレ・・が？」
「そこまでだ！！！」

未知の遺物に高揚していた心が、どす黒いものに変色していくのが自分でもわかった。
サリエル、そしてガングール大公。
「エルロイ、君を過少評価していたつもりはない、むしろ最大限に評価していたつもりだがそれでも評価はたりなかったようだね。まさかこの工房の魔術防壁を突破するとは。」
騎士団がオレたちを包囲して攻撃の態勢をとる。魔術師はセイリアに備えて防護魔術を展開しているようだ。
勝ち誇ったサリエルの声が続いた。
「返答しだいでは君たちを助命してやってもいいぞ。どうやって防壁を解除した？キーワードか？それとも魔力開放式・・・」
「黙れ！！」
助命する気など欠片もないくせに。おまえの思うとおりにはさせない。ただのひとつもさせるものか！
「立場をわきまえたまえ。」
サリエルは哂った。爬虫類にも似た表情のない哂いだった。
「君たちを殺したあとで調査するのは容易いのだよ？君たちが助かるには私の慈悲にすがるしかないのだ。どうだセイリア、君なら私の助手として飼ってやらんこともないがな？」
「・・・・下衆。」
「・・・レーヴェ、君はどうだ？ワルキア公国騎士団が欲したという槍技、ここで失わせたくはあるまい？」
「そうだな。条件によっては従わなくもないぞ。」
サリエルの表情が輝き、嘲笑を浮かべてオレに視線を送る。
「本来なら条件など言える立場ではないが・・・いいだろう、言ってみたまえ。」
「まあ、それほどたいしたもんじゃないさ。おまえとガングールの命、それだけでいい。」
期待を裏切られてサリエルの顔が憤怒に燃えた。勝手に期待してお

いて無様なものだ。
「・・・どいつもこいつも！そんなにこの男と死にたいのか！いいだろう。皆殺しにしてやる！。エルロイに味方するありとあらゆるものを皆殺しに！・・・もう、この遺跡内で生き残っているのはお前らだけだ。サインもマーテルも残らず死んだ！この場にいないお前の仲間も戻り次第殺してやる。そしてエルロイの名を謀反人として未来永劫に語り継いでやるぞ！」
なるほど、冒険者を扇動してフリギュア王国に討ち入ろうとしたことになってるのか。なんて短絡的な。
サリエルの合図とともに騎士団が1歩歩をすすめる。だが、切り札を持っているのはそちらではない。
「マスターとして命ずる。この者たちがオレたちに危害を加えようとしたならばこの工房を破壊せよ！」
再び渦の中心が答えた。
「工房に破壊操作を行う装置はありません。しかし第三法術の終了後は自壊プログラムにより魔方陣の消去と魔術機械の解体処理が行われる
ことになっていますが、それでも良いでしょうか？」
「ああ、それでもかまわん。」
「まままま・・・待て！待て！」
慌てて叫んだのはガングール大公だった。
「お前たちの命は助けてやる。いや、望むままの地位をくれてやっても良いぞ。だ、だから早まったまねだけは・・・」
「大公殿下！」
「良いか！手出しすることは許さん！」
騎士団の騎士たちは1歩ひいて待機の姿勢をとった。そうそう、犬は主人の命令に忠実にね。
「騎士たちを下げろ。レーヴェとセイリアを通してやれ。」
「バカな！なりませんぞ大公殿下！」
「通してやれ。」

「なっ！」
エノクの不老不死の秘術が手に入るかの知れない、とでもいって大公を引きずり込んだのだろうが・・・その煽られた欲の故に大公はオレの要求に逆らえない。
「レーヴェ、セイリア、シグロムの石だ。安全な場所についたら念話をよこせ。」
「おい、お前はどうすんだよ。」
「・・・・・・。」
「危険回避だよ。いっしょに行くより危険が減るのさ。」
（考えはある。死ぬつもりは毛頭ないから急いで仲間たちに伝えるんだ。この国に近づくなと。）
（考えって何？）
いい加減な返答なら許さない。念話なだけにダイレクトに迫力が伝わってくる。
（第三法術っていうのはな、転送系の魔術なのさ。ここと別の工房に転送されるだけだ。心配するな。）
（なら、いい・・・・）
「さて、退散させていただきますよ。サリエルさん。」
サリエルの歯噛みする様子をひとしきり見物して2人は去っていった。
2人が地上に達するまでにはしばしの時間がある。オレはサリエルに疑問をぶつけてみることにした。
「エノクの遺物を独占するためとはいえ、ここまでことを大きくして大丈夫なのか？それとも、これは国王も承知のことか？」
「亜神エノクの不老不死の秘密が手に入るのだ。あとのことなど、どうにでもなる。」
「不老不死の秘密と何故わかる？エノクの偉大さは不老不死であるだけではないぞ。」
「エノクの不老不死のための工房なのだよ、ここは。わが家に伝わる古文書を解読したのだ。間違いはない。」

「不老不死ねえ・・・別に不老不死になるだけなら無くしたほうが世のためという気もするがねえ。」
「バカなことを！生きながら神の位に登り世のしがらみから解き放たれるのだぞ！そのすばらしさが何故わからん！」
「いや、だってお前程度の2流魔術師、不老不死になったってふんじばって猿轡でも噛ませとけばなんの脅威にもならんし。」
「は？？？」
そんなまぬけな顔すんなよ。お前への怨みが減るだろうが。
「アリアントス年代記読んでるか？エノクが従者をかばって負傷する話があるだろう。つまりケガを再生するにはある程度の時間が必要だってことだ。不老不死なだけのただの人なんて、大国に連れ去られて実験動物にされるのがオチなんじゃないのか？」
サリエルの顔は蒼白だった。古文書を解読したときから不老不死＝神とでも思っていたのだろう。
（ついたぜ。）
レーヴェからの念話が届く。さて、正念場だ。セイリアにはああ言ったが第三法術が転送系っていうのは術式に触れたときのオレの勘でしかない。根拠はそれだけだ。
「さて、あの2人とも地上にでたようだし、今度はあなた方に地上に出ていただきましょうか。」
「なんだと？！」
「偽りは許しませんよ。騎士団全員と遺跡から2キロは離れていただく。そのうえで2時間待機していただければ、この工房はあなた方のものです。」
「ふざけるな！貴様が工房を消し去らない保証がどこにある！」
「今、消し去ってもかまいませんよ。」
「・・・そんなことをすれば・・お前の命はないぞ。」
「まあ、レーヴェとセイリアは逃がせたし・・・仇討ちは2人にまかせますよ。」
「エノクの遺物という世界の至宝を消し去るというのか！？」

「貴重ならいいというものではありませんよ。」
「お、お、お前は何を言っているのだ？」
大公は想像の埒外らしいオレの返答に頭を抱えてしまった。死を容認するとか、遺物を捨て去るとか、彼には考えがいたらないのであろう。

衝撃は突然にやってきた。

ゴポリ

血が口元からあふれ出す。
ゆっくりと胸に目を向ける。魔力を帯びた赤い矢が矢羽のあたりまで突き刺さっていた。
「ケイロンの矢。」
ニタリ、とサリエル哂った。魔術を行使した気配はなかった。ケイロンの矢という古代遺物を使ったようだ。
自らの欲にしがみついて都合の悪いことには目をつぶるつもりらしい。世の中お前の思ったようにはいくものか！、と言おうと思ったが、のどから血が遡ってきて声にならない。
「いまだ！殺れ！」
騎士たちが吶喊してくるのが見える。セイリア、ごめん。ここでお別れだ。

大声である必要はない。

誰に聞いてもらう必要もない。

ただ言葉を紡ぐだけ。

「第三法術を発動しろ。」

「了解しました。マスター。」

次の瞬間見たこともない膨大な魔力が溢れ、目も眩む閃光とともに、世界が白に染まった。

第三話

意識が戻ったときは驚いた。自分でいうのもなんだが、あれは致命傷だったはずだ。
あたりを見回してみるが何も見えない。ただ、せまい空間に寝かされているのはわかる。そう、まるで棺に横たわっているような・・・。
「ってちょっと待て！生きてる！生きてるって！出せ！ここから出せええええ！。」
「やれやれ、主様にしては乱暴ですな・・・。」
「へっ？」
音もなく天井が開くと、温厚そうな紳士がうやうやしくこちらに頭を下げていた。
「２５００年ぶりほどになりましょうかな？主様。」
「いや、人違いじゃないですか？オレはエルロイといいまして、というかここはどこ・・・？」
あれ？なんか違和感が・・・パニックが収まって脳が戻ってきたらしい。しかしこの違和感ありまくりな状況はなんだ？。
何故にオレはこんな鈴が転がるような愛らしい声をしているのだろうか？。
何故にオレはハダカでいるのだろうか？。
何故に男であるはずのオレの胸に釣鐘型の２つの双丘が存在しているのだろうか？。
何故人並みより大きめのサイズが自慢だったオレの男性の象徴は影

も形もなくなっているのだろうか?。

ところで、ハダカのオレを微笑みとともに見つめ続けるこの紳士はいったい誰・・・・ん・ハダ・・カ?

急に羞恥心が限界を突破してオレは叫んだ。

「こっち見るな!着替え!とりあえず着替えを用意して!。」

「着替えならそこの衣装棚にひとつ残らず保管してございます。では、私は少し席をはずしましょう。着替えがおすみになりましたらおよび下さい」

紳士が部屋を退出して一人取り残されると、なんとか落ち着いて思考する余裕が出来る。

とはいえ、自分のハダカながら、女性のハダカは精神衛生上はなはだよろしくない。とりあえずは着替えて・・・。衣装棚を開けたオレの思考は再びそこで停止した。

見渡す限りのフリル、白と黒、光と影のコントラスト、いわゆるそれは・・・・ゴスロリ。

「こ、これをオレに着ろというのかあああ!!。」

いくら探してみてもゴスロリ以外の着替えはなかった。ああ・・涙流すのなんて何年ぶりかなあ・・・・。

着替えが終わりオレはあらためて姿見で自分の変わり果てた肢体を眺めていた。

年のころは１０代の後半といったところだろうか。やや幼い顔立ちだが、整った鼻梁と艶やかな唇がなんともいえない色気を醸し出している。

髪は豪奢な金髪だ。腰まで伸びたクセのない髪はまるで精巧な金細工を思わせる。

すらりと伸びた肢体は小柄ながら優美な曲線を描き出し、肌はまる

で磁器のように白くそれでいて、みずみずしさに満ちていた。
つくづく思う。これがオレでさえなかったら、このすばらしい芸術をこころゆくまで堪能できたであろうに。

「まことにお似合いでございますぞ。主様。」

いつのまにか背後にいた紳士に声をかけられてオレは飛び上がった。
い、いつ入ってきたんだ？
「呼んだ覚えはないのだがな。」
「いささか時間がかかりすぎておりましたので。」
ううっ服選びにやたらと時間をとられたからなあ・・・。
「すまないが、オレはあなたの言う主ではない・・・・と、思う。こんなことを聞くのは恐縮だが、ここはどこで、オレは何故ここにいるんだろうか？」
紳士は口元に笑みを浮かべながら首を振った。
「私のことはカリウスとおよび下さい。今回のことは当方の想定の範囲内でございます。あなたが主であることは間違いございません。」
「するとカリウスさんは事情がわかっているのですね。」
「カリウスで結構でございます。主様。ご説明いたしますと主様が入られている身体は世に言う亜神エノクの身体でございます。」
「あ、亜神エノク～？？」
今日は何回脳が揺さぶられるのだろう。星が・・・星が見える・・・。
「ちょっと待って！エノクが女性ってなんの冗談ですか！」
「冗談ではありません。エノク様は真実女性でございました。ただ、ごく限られた人のほかには幻術で男になりすましておられましたが・・・・。」
「誰も気づかなかったのですか？」
「エノク様の魔術を破れる魔術師など、過去にも現在にもおりはし

ませんよ。」
流石亜神、レベルが違う。
「とはいえ、エノク様も人の身ではございましたので年齢による衰えは隠せませんでした。亜神となって現世を捨て去るには王国はあまりに危険な状態でした。そこでエノク様は現世での仮の宿りとして魔術身体と魂の転送装置を開発したのでございます。」
「それが第三法術・・・・。」
「さようでございます。その身体には、エノク様が１０００年統治を果たした時の強大な魔力と卓越した身体能力、それに不老不死の力が備わっ
ています。もともとその身体はエノク様の実験の失敗や、重大な欠損があったときのためのスペアだったのですが・・・。」
「たまたまオレが乗り移ってしまったと。」
「いえ、たまたまではございません。故に私はあなたを主とお呼びするのです。」
考えても答えは得られそうにない。オレはカリウスに先を促した。
「エノク様は亜神に登られるとき一旦はこの技術を消去しようとなさいました。しかし、それを思いとどまりある条件をお付けになったのです。」
「条件？」
「わが子孫が魔術を志し、この力を求めるなら、という条件でございます。」
「オレがエノクの子孫だって？！。」
「何故工房のオペレーターがあなたをマスターと認めたのか不思議に思いませんでしたか？。オペレーターはエノク様の遺伝子を継承し、かつ優れた魔術師とあなたを認めたからこそ、マスターと認識したのです。」
なるほど、それで辻褄は合う。よくもまあそんな奇跡的な偶然で生きのびられたものだ。あれ、？なんか忘れてるような・・・。
「新たな主を得られましたのは私にとっても僥倖でございました。

この２５００年、工房の管理以外にすることもなくヒマを持て余しておりました
のでね。もうじきここも消去が始まりますし・・・いったん外界に出て主様にふさわしい食事をご用意するといたしましょう。そういえば・・・」
カリウスの次に言った一言が、オレに忘れていた悪夢を思いおこさせた。

「主様の新しいお名前をご用意せねばなりませんなあ。よろしければこのカリウス、主様の愛らしさに負けぬ名前を粉骨してお考えいたしますが・・・・。」

「あれ？もしかして・・・戻れない・・・の・・・か？ハハハハ・・・それはまずいよね。だってオレ男だし、エノクくらいの魔術師なら、子孫が男だったときのことくらい考えてるよ・・・ね？。」
このときくらい神に祈ったことはないだろう。冒険者は神に祈らない。しかし、ひとりの成人男子エルロイ・アーケイル・ノルガードとして、今だけは神の恩寵にすがらせてほしい。

「ご心配には及びませんぞ主様。魂は器に引きずられるものとエノク様もおっしゃっておられました。主様がどこにだしても恥ずかしくないレディーになられるまで、このカリウス全身全霊を尽くす所存。」

「いえ・・・・あのそういうことではなくてですね。・・・・もとの男の身体の戻れないかなあ・・・と思ってみたり・・・・。」

「なんと！これは異なことを申される。エノク様のお身体では不足と申されますのか？！」

「そ、そういうわけではなく・・・男の身体が恋しいというか・・・技術的にそういうことができるかなと思ってみたりとか・・・。」

「ふむ・・・いまひとつ納得はいきませぬが・・この工房の情報は私もある程度把握しておりますゆえ、この魔術知識をもって工房を再構築すれば可能性は・・・どちらにしろ主様のもとの身体が必要となりますが・・・。」

全身から力が抜けた。そう、オレの・・・オレの身体はもう死んでるんだ。
そんなことを考えながら、どこかで仕方ないと納得している自分がいる。これが魂は器に引きずられるってことなのだろうか。
天国のお父さんお母さん、ごめんなさい。オレは・・・私は・・・・女の子になってしまいました。

第四話

「お目覚めでございますか、主様。」
カリウスの言葉に半覚醒状態だった意識が現実に引き戻される。一晩寝たら夢だった、なんて安直なオチは許されなかったようだ。
「おはよう、カリウス。」
だが、今朝は甘い夢を破られただけではすまなかった。
「主様、昨晩よりこのカリウス、寝ずに考えぬいた渾身の名をお聞きください。」
「はっ??」

「エルファシア様とお呼びしてもよろしいか!?」

神様、オレはあなたに恨まれるような真似をしたでしょうか。

「・・・・お気に召されぬのか・・・・。」
だからそんなに肩を落とすなよ。エノクの練り上げた使い魔がいいのかそんなで。
「エルロイ様の名を取り入れ、かつ主様にふさわしく高貴で美しい名前だと思ったのに・・・・・。」
「い、いや。気に入らないわけではないですよ。ちょっとビックリしただけで・・・・。」
「では採用していただけるのですか??」
「・・・・好きにしてください・・・・・。」
またひとつ、男の象徴がはがれて落ちた・・・後戻りが出来ぬなら、せめてゆっくり心の準備をして、というのは贅沢な願いなのでしょ

うか？

カリウスのいた工房はエステトラス連邦共和国からはずれたカリード山脈の中腹にあった。
入り口に迷彩魔術を施してあったため、これまで発見されずにすんでいたらしい。
とりあえずオレたちはフリギュア王国に戻り・・・仲間の安否を確かめ、サリエルとガングールに報復を行うため西にむかっていた。
レーヴェもセイリアも無事に逃げ出せていればワルキアあたりで合流できるだろう。どちらにしろ情報を集めるにはエステトラスは遠すぎる
だが、オレが直面している危機はそんなことではない。オレは今、生涯最大の危機を迎えていた。

「エルファシア様、お背中をお流しいたします。」

セクハラに悩む世の女性にオレは声を大にして言いたい。あなたたちの気持ち、今ならわかる、と。
旅籠のなかでは珍しい個人用の風呂で、しばしの命の洗濯としゃれ込んだのもつかの間、頬を赤く染めた中年使い魔が入ってきたとき、オレは迷わず石鹸を投げつけていた。
「痛いではありませぬか。」
「痛いなら痛そうな顔をしろ！というか女の入浴中に堂々と入ってくるんじゃない！とっとと出て行けー！。」
「これはしたり、私は使い魔ゆえこの姿は仮のもの。まして主様に対して邪な存念など毛頭ございませんぞ！主様にお尽くし申し上げるのが執事の本懐。さあ、いざ！。」
「いざ、じゃねえええええ！。女風呂に男が入ってくるのがそもそもの間違いだ～！！。」
「なるほど、私としたことが配慮がたりませんでしたな。」

ボン

光の粒子が一瞬のうちに拡散と収縮と遂げたかと思うと・・・そこには見慣れた４０近い渋めのナイスミドルではなく・・・艶かしい肉感に溢れた妙齢の女性がいた。

「カーチャと申します。以後お見知りおきくださいませ。」

「おまえの血は何色だあああああ！！！」

「使い魔に血など流れておりませんわ。」

「いや、そういう意味じゃないし！」

「ふふふふ・・・・主様の玉の肌を磨くのは使い魔に課せられた役得・・もとい義務ですわ。さあ、お背中といわず、身体の隅々まで洗って差し上げます。うふふふふふふふ・・・・」

「いやあああああああああっっっ！！！」

もはやなすすべも無くカーチャに身体の隅々まで洗われてしまい、髪の洗い方から肌の手入れまでレクチャーを受けてしまった。

ひとこと言わせてもらうなら、オレの男としての尊厳は終わった。

「それにしてもエルファシア様のお肌、本当にお美しいですわ。それに御髪も・・これから毎日わたくしがお手入れして差し上げますから！

本当、楽しみですわ～！。」

「カーチャさんがお手入れするのは確定ですか。」

「もちろん必須事項でございます。この崇高なる使命はたとえ神といえども邪魔はさせませんわ。」

「主の意思でもダメですか？」

「無理ですわ！」

エノクさん、あなたは使い魔の作り方を間違えています。

「私はカリウスと違って主様のためならば、主様のご意思に背くこともいといません。まあ、あの男も自分の趣味に走ると見境をなくしますが。」

「カーチャさんとカリウスさんはどういう関係なんです？まさか・・・二重人格とか。」

「もともと私たちは世界樹の若枝から創られた使い魔です。ですから性別はございません。それでは面白くないとエノク様が意識野を分割してカリウスと私を生み出しました。そういう意味では二重人格というのも間違いではありませんね。」

カーチャはその豊満な裸身を惜しげもなくさらして立ち上がると、オレの身体を舐めるように一瞥して言った。

「エルファシア様、美しいものには美しいものの義務というのがございます。まず手始めに下着のつけ方からご教授いたしますわ。」

だが、オレはカーチャの台詞を最後まで聞き取ることはできなかった。

「エルファシアさま？エルファシア様！お気を確かに！」

オレの目の前にさらされたカーチャの淡い繁みは、オレの意識を暗闇の彼方にひきずっていった。

天国のお父さんお母さん、私は汚れてしまいました。

第五話

エステトラス連邦共和国から西へ向かうこと3日、ようやくお隣のロイホーデン帝国に到着した。
国境の都市プレシアはなかなかの大都市で、街は活気に満ちている。
しかし。

「よう、綺麗な嬢ちゃん。あんたにお似合いの髪飾りがあるよ。」
「お嬢ちゃん、迷子かい？」
「あああ、あの、お兄さんと2人でとっても楽しいことしてみないかい・・・。」

「お前らまとめてぬっ殺す！！！」

このお子ちゃま扱いはどうにもガマンがならない。

ドゴッ！

「いけませんね、エルファシア様。私があれほど高貴な人としての言葉使いをお教えしたのに・・・。」

「私をお子様扱いしないでくださるかしら・・・・。」
「結構ですわ。」
・・・・・使い魔の主に対する扱いはもっと忍耐が必要だった・・・。

「確か、ここだったはずなんだけど・・・・。」
「ずいぶんさびれてますのね。」

私たちが訪ねたのは街はずれの酒屋だった。定番だが、冒険者の情報屋をかねている。
しかしこの間来たときはこんなにさびれてはいなかったはずなんだけどなあ・・・・。
「邪魔するよ。」

ゴキッ

「お邪魔いたしますわ・・・・。」
「こりゃまた珍しいお客がきたもんだ！悪いが嬢ちゃんの口にあうものは出せないぜ。」
「オレは！・・・私は嬢ちゃんなんかではございませんわ！。それに今日は食事に参ったのではありません。」
顔見知りのはずの店主だが、まさか素性を話すわけにはいかない。というか、知られたら恥ずかしすぎて悶え死ぬ。
「知りたいのは・・・氷炎の魔女と暴風レーヴェの居所ですわ・・・・。」
「誰だい、それは?。」
親父の顔色が変わるのがわかった。こちらを警戒する様子がありありと窺える。
「ずいぶん素直な方ですのね。」
「まあ、腹芸のできるほうではないね。」
「嬢ちゃんたち、そういう感想は本人のいないところでするもんだぜ。」
　あきれたように親父が言った。もうさきほどの刺々しさはない。まあ、仮にオレが店主であったとしても美女と美少女を相手に険悪さを保つのは難しいだろう。
「ホントに悪いんだが、その2人の行方はオレも知らない。たまに尋ねてくる人間はいるんだがね。」
親父の顔が曇るのをオレは見逃さなかった。特にたまに尋ねてくる・

・・・のあたりだった。
「質問を変えますわ。あの2人は今、どんな立場になっているのです？。」
この質問には親父も驚いたようだった。
「あんたらそんなことも知らねえで2人を探してたのか！・・・どんな理由があるのか知らねえが、関わり合いにならねえほうが身のためだぜ。」
「あの2人は親しい友人で・・・命の恩人でもあります。いまさら関わりあいをやめるのは不可能ですわ。」
やれやれ・・・といった表情で親父は肩をすくめた。
「・・・あの2人は賞金首だ。1人あたま金３００タラント。今、大陸中で賞金稼ぎが血眼になって探してる。返り討ちにあうのが関の山だろうがな。」
確かに、あの2人とやりあう気なら、よく訓練された戦士が１００人は必要だ。
「こりゃ大陸中が知ってることだが・・・冒険者ギルドの一部がエノクの遺物を利用してフリギュア王国を支配しようとする事件が発生した。
幸い陰謀を察知したサリエルの通報で出動した王国騎士団の活躍で、首謀者のエルロイ・ノルガードは討ち取られたが、幹部の数名はいまだ逃亡中。レーヴェとセイリアの2人はエノクの遺物を所持している可能性がある。」
そりゃ血眼になって探すわな。それにしてもオレの身体・・・やっぱり死んでたか。
「オレが教えられるのはこのくらいだぜ。」
「なるほど、あなたに教えられるのはそのくらいなのかもしれません。」
だが、オレはしっている。
「では、改めて聞きましょう。」
それはこの親父の裏の顔。

「壁抜けのボリス、あの２人の居所はどこです？」

第六話

そこにはもう陽気な酒場の親父の姿はなかった。
　かつて大陸中に名をはせた情報屋、壁抜けのボリスその人がいた。
「ボリスの店は深夜営業でな、１０時過ぎにもう1度きな。」
「期待させていただきますわ。」
苦笑いを浮かべながら、ふと優しい表情になると、親父は声をひそめて言った。
「一言忠告しとくが、自分が踏み込んだヤマのヤバさは自覚しといたほうがいいぜ。」
ヤバい？悪いがヤバくなるのはオレのほうじゃない。
思わず口元がほころぶ。

「確かに自覚したほうがいいかもしれませんわね・・・・・・・・・・・・・・奴らが。」

酒場を出て宿を探しに街に戻ると、あきらかに怪しい風体の男たちがあとをつけてきていた。さっそく忠告の効果があらわれたらしい。
「きたならしい連中ですわね。」
「そうだね・・・多分あいつらはオトリだよ。」
「それらしい気配はありませんけど・・・・。」
「必ずしも現場にいる必要はないさ。」
これみよがしのオトリをおいて行き場を限定して目的地に誘導する。
狩りの基本だ。
「狩られるのはどちらか教えてやる。」

ゲシッ

「狩られる立場を教育してさしあげますわ・・・・」
「油断大敵ですよ？うふふふ・・・・・・。」
いや、カーチャさん、こんなときぐらい高揚した気分にひたらせていて欲しかったんだけど・・・・。
目抜きとおりを裏路地に曲がる。案の定数人の傭兵くずれが道を塞いでいた。
振り返ればやはりあとをつけていた人間が退路を塞いでいる。６・７・・８人、ずいぶん甘く見られたものだ。
「姉ちゃんたち、なにやら賞金首の情報を探ってるらしいじゃねえか・・・オレたちならあんな腰抜けボリスより確かな情報を教えられるぜ。」
「具体的には？」
「ここじゃ話せねえなあ・・・。」
あごをしゃくる。ついてこい、ということらしい。
「では、案内させてさしあげますわ。」
赤ら顔の巨躯の男が私の肩に手をかける。私の言い様が気に入らないようだ。
「おい、嬢ちゃん、立場ってもんをわきまえねえと身体に直接・・・・」
男は最後まで言い切ることができなかった。

ブシュッ

男の右手が弧を描いて宙を舞った。
「断っておきますが、許可なくエルファシア様に触れるものは私が許しません。・・・・次は殺しますので。」
「てめえ！」
背後のならずものが短剣を振り上げて襲いかかってくる。まったく、

怖いもの知らずだねえ・・・・。

「冥縛」

「何？」

「ど、どういうことだ？」

「た、助けてくれ！」

「いやです（ニッコリ）」

どんどん地中に飲み込まれていく男たち。あと数分もすれば、地中に奴らのオブジェが出来上がるだろう。

「ま、魔術師だなんて聞いてねえぞ！」

予想外の事態にすっかり逃げ腰になっている男にむかってカーチャは優雅に微笑んでみせた。

「では、私たちに有益な情報を教えていただけるところまで案内していただきましょうか。私たちを失望させぬ素晴らしい情報なのでしょうね

ええ、きっと。」

男はカーチャと断末魔の悲鳴をあげる仲間との間で忙しく視線を往復させていたが、がっくりと肩を落とすと。

「こちらでございます・・・・。」

殊勝に案内をはじめた。甘いねえ、そんなに肩を落としたらこの先の仲間じゃオレたちに勝てないと言ってるようなもんだよ。

男は卑屈に頭を下げながら、寂れ果てた旧市街の洋館を指さして言った。

「ここでリーダーが待っております。暴風のレーヴェとは関わりが深いそうで、はい。」

「そう、それじゃお邪魔しましょうか。」

洋館の扉を開けさせると見知った男がそこにいた。
名をクルトといっただろうか。レーヴェと同じワルキア公国出身の冒険者だったはずだ。
「あんたらか、レーヴェとセイリアのことを探ってたってのは。」
ニヤリといやらしい笑みを浮かべ、カーチャの胸や腰のあたりにネットリとした視線を送っている。楽しい妄想に浸っているんだろうが、現実は厳しいのだよ。
「レーヴェとセイリアは今どこにいますの？」
「その前に聞かせてもらおうか。あんたたちはあの2人とどういうかかわりだ？。レーヴェの野郎がロリコンだって話はきかねえんだがな。」
本人は気の利いた冗談を言ったつもりらしい。乾いた笑い声をあげている。
こいつ、死刑。
「早く質問に答えなさい。私はあまり我慢強いほうではありませんよ？」

「動くな。」

今まで追従笑いを浮かべていた傭兵くずれの男が、一瞬の間に私の首筋に短剣を突きつけていた。こいつ、暗殺者あがりか。
「そっちの怖い姉ちゃんも、ご主人様が大事だったら妙な動きはするな。一言でも口をきいたらこの女を刺す。」
「よくやったぞ、ラング。」
ラングというのがこの暗殺者あがりの傭兵の名らしい。すっかり勝ち誇った様子でクルトが声をあげた。
「さあ、命だけは助けてやるからレーヴェたちとの関係を話せ。話によっては女郎部屋に売り飛ばされずに済むかもしれんぞ・・・？」
本人としては抜き差しならぬ事態に私たちを追い込んだつもりらしい。

「レーヴェとセイリアは私の親友だ。救い出さなくてはならない。御託を並べずに2人の居場所を話せ。」
クルトとラングの2人は怪訝な表情を浮かべていたが、一方的に命令されたのがわかると憤然となって顔を赤く染めた。
「ラング！その身の程知らずの服を破り捨ててしまえ！。」
「おうっ！」
欲情を隠そうともせず、ラングの短剣が私の服にむかって振り下ろされる。

カキンッ

・・・・短剣は服に触れることもできずに弾き飛ばされていた。ラングの手に痛いほどの痺れを残して。
「ぐ、具現防護結界だとおおおお！」
物理的な衝撃から術者を守る魔術術式であるが、クルト程度の冒険者レベルでは見たこともないのは当然だろう。
「2人はどこ・・・？。」
ようやく、クルトの表情に恐怖の色が浮かんだ。遅ればせながら圧倒的な力の差がわかったのだ。
「・・・し、知らねえ・・・！オレも実のところは知らねえんだ。た、頼むから助けてくれ！。」

「炎影」

気配を殺して逃走をはかったラングが炎に包まれ一握の炭と化した。この世に黒々とした己の影だけを残して。
「あああ、あいつらはワルキアを根城にして仲間を集めてまた反乱をやらかそうとしてやがるんだ！ギルドの腕利きがワルキアに集まってきてるから間違いねえ。
だだだからもう、あいつらの首をあげるには人質をとるか内通者

を送り込むかしかねえ、とオレはそう思って・・・・・。」
「誰と誰が集まっている？。」
「オレの知る限りでは豪腕のロバートと道化のフリッガくらいだ。あとは知らねえ・・・。」
どちらもオレが任命したギルドの幹部だ。無事だったか。
しかし・・・・
「その程度は賞金稼ぎなら誰でも知っていることだろう。・・・・・これ以上なにもないなら殺すよ。」
「うううう・・・噂じゃ裏切り者が潜入したって話だ！。だからオレはあせって・・・・！」
「それは誰・・・・・・？」
「剣士の男ってことぐらいしかわからねえ。ほ、本当だ。」
「その情報を誰に聞いた・・・？」
「さ、サリエルギルド長だ。」
サリエル
憎悪で目が眩む。レーヴェとセイリアもきっとこんな思いで報復の計画を練っているのだろう。あの2人まで失うようなことがあってはいけない。決して。
私は目の前の哀れな男を見る。
今は恐怖ですくんでいるが、解放されれば私たちの情報をサリエルに売るだろう。口止めが信用できる男ではない。
「・・・・ごめん。」
空中に出現した光の槍が、クルトの心臓を音もなく刺し貫いた。

「思ったより時間がなさそうだ。レーヴェたちは私の無事を知らないしね。」
・・・・仲間が裏切るとは考えたくないが・・・・
「どうやらボリスに聞くことが増えそうだな・・・・。」

ボスッ

「痛いですカーチャさん・・・・・。」

「レディーはいついかなるときも気を抜いてはいけません。」

ボリスとの刻限まではだいぶ時間が余っている。

「一度街に参りましょうか。」

カーチャに勧められて、私たちは街へと足をむけた。

第七話

カーチャの誘いにのって街で時間つぶしをすることになったのだが、わずか１０分にしてオレは死ぬほど後悔するハメになった。

「エルファシア様にはやっぱり黒がよく映えますわ～！ここで寄せてあげて・・・・まだまだ成長期ですからブラのサイズはこまめにチェックいたしませんと・・・。」

下着売り場で着せ替え人形と化していました。私はこうして汚れていくのですね。

「ん・・・？ちょっと待って。この身体って成長するの・・・？」

たしか不老不死の身体じゃなかったか？

カーチャさんは苦笑しながら声をひそめて耳打ちしてくれた。

「身体の細胞が成長しきるまでですから、あと何年かは成長するんじゃないですか？不老不死といっても新陳代謝のバランスが崩れないというだけですから

致命傷を負えば死にますし、手入れを怠ればお肌も荒れます。」

「あと何年かの間は普通の人とあんまり変わらないわね。」

「そうですね。生理もきますし、子供だって生めますわ。」

イマナントイイマシタカ？

「ふふふ・・・・エルファシア様のお子様ならさぞ可愛らしいでしょうに・・・・こんなときばかりは自分が男でないのが恨めしいですわ・・・。」

アナタハアルジニナニヲシヨウトシテイルノデスカ？

「何って・・・・ナニ？」

「そんな親父ギャグを聞きたいんじゃありません！というか、人の心を読まないでください！。」

「だってエルファシア様すぐ顔にでるんですもの～。」

確かに女になってから喜怒哀楽がはっきりしてきている気がする。いかん、クールになれ。・・・なんかとんでもないこと言ってたはずだ。

そう。

「・・・・・生理・・・くるんですか・・・・。」

「あら、心配ですか？大丈夫、漏れの多い日でも安心なトルネドラ製のショーツを取り寄せておきましたわ！。」

い、いつの間に・・・・というか問題はそこじゃなくて！

「しかも・・こどもが生めるって・・・・・・。」

「女ですもの、あたりまえじゃありませんか。」

・・・・・女。

エノクの身体だということで、他人事のように思えていた現実を突きつけられたような気分だった。

自分の遺伝子を残したいという欲求は私にもある。

しかしそれは私が男に抱かれ、子宮に子供を身ごもるということ・・・・男に抱かれる？私が？どうやって？

刹那、レーヴェの軽薄な微笑みが脳裏に浮かんで・・・・私は沸騰した。

今のなし、なしというかありえないから！こここここれは、たまたま救出しようとしている身近な男を思い出してしまっただけであって。

だいたいオレは無口で無表情なセイリアに笑ってもらいたいとほのかな好意を寄せていたはずであって！ああっ！何私はレーヴェの手とか思い出してんの！違う、違うの！ちがうんだってばーっ！

「エルファシア様・・・。」
「はい？」
「全部口にだしてます。」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・うそ。」
・・・さようなら、清らかな私。
「どうやらそのレーヴェという男は調査する必要がありそうですわね・・・・。」
「それ違うから！お願い！信じて！」
「・・・・・でも今はそんなことより・・・・・。」

ギュムッ

抱きしめられてしまった。
「エルファシア様ったら、なんて可愛いんですか！もう～食べてしまいたい！いえ、食べてしまうべきなのかしら、エルファシア様が男なんかに穢されてしまうまえに・・・。」
「カ、カーチャさん！落ち着いて！お願いだから！」
エノクならいざしらず、今の私ではカーチャさんを止める力はない。
「・・・・・これもエルファシア様が可愛いすぎるのがいけないのです・・・・・。」

「ひゃうぅぅん！！」

乳房の敏感な部分を刺激されて私は思わず声をあげた。

カプリ・・・

耳たぶをかじられる。
もうそれだけで、
男であった自分には想像もつかぬ快楽に
私は指先ひとつ自由に動かせなくなっていた。
「ふふふふ・・・感じてらっしゃるのね・・・素敵ですわ・・・・・。」
ああ・・・このまま快楽に堕ちて・・・・・・
ってそんなの認められるかーっ!!!!
「やめなさい!やめないと・・・本当に怒りますよ!」
「ああ・・・怒った顔も可愛いです・・・・。」

「カリウス!なんとかしろ!」

カーチャさんの驚いた顔を置き去りに光は拡散と収縮をとげ・・・・・
「カーチャがご迷惑をおかけしました。エルファシア様。」
そこには長身の執事がいた。
「・・・・間に合った・・・・・・。」
危なかった、それはもうとてつもなく。
ふと、カリウスの胸に顔をうずめるような自分の体勢に気づいたが、
腰にまとわりついた甘い痺れに動くことができない。
不本意だ、本当に不本意なのだが。
「カリウス、私を宿まで運びなさい。」

「かしこまりました。」

フワリ・・・・と、

体重を感じさせぬ軽やかさで私は抱き上げられ・・・・

街中の視線を釘付けにしながら宿への帰途についたのだった。

お姫様だっこで！

天国のお父さんお母さん・・・・もう私は・・・男には戻れません。

親不孝な息子を許してください・・・・。

第八話

街の灯りもすっかり消えた深夜、オレとカリウスは再びボリスの酒場を訪れていた。
「しかしずいぶん寂しい酒場だな・・・・。」
人っ子一人いない。
「ま、情報屋は廃業してたし、サリエル派の人間相手に商売する気もなかったからな・・・・それはそうと・・・・。」
「お姫様だっこで街中を練り歩いたそうじゃないか！」

「忘れて！頼むから！」

・・・・・もう2度と思い出したくもない。というかそんなことはなかった！なかったんだってば！
「落ち着いてください。エルファシア様。レディーがそのように取り乱してはなりません。」
「そ、そうね・・・・・。」
なんだか女の身体になってから、情緒不安定になってる気がする。
でもカーチャさんと違って体罰がなくて助かるわ。
「・・・・・帰ったらレディーについての臨時講義を行いますので。」
今度はそっちですか！？

「・・・・・そっちの男は初顔だな。」
「執事のカリウスと申します。以後お見知りおきを・・・・・。」
「カリウス・・・・ねえ・・本当面白えよ、お前ら。オレの情報網にも一切ひっかかりやがらねえし。お前らほどの魔術師が無名でいられるわけはないんだがな・・・・。」
昼間の戦闘の内容がもう知れてるらしい。
「今回の報酬はお前らの正体ってことにしようか・・・・。」

「お願い、それだけはやめて！！」

それだけは・・・それだけは勘弁してください。もし真実が知れ渡ったら・・・・生きていけないかも。
「・・・主が嫌がっておりますのでそれはご勘弁願えますかな。報酬は言い値でお支払いしますので。」
えらいぞ、カリウス！
「まあ・・・とりあえずそれは置いておこうか。レーヴェとセイリアの味方だってんなら悪いようにはしねえよ。」
「ボリスさん・・・・。」
今少しだけ、オレの知ってる陽気な親父に戻った気がする。
「ここもな、少しまえまではこんなに寂れちゃいなかった。いや、むしろ繁盛してたぜ？ククルカン遺跡にも近いし、東部からフリギュアの新遺跡に行く冒険者の中継点でもあったしな。」
　ボリスが皮肉気に笑った。
「だが、ギルド本部で反乱があったって話になってな。ギルドはいつの間にかフリギュアの紐付きでサリエルがしきるって話になってた。それをとめられるような幹部はみんな賞金首になっちまってたしな・・・。」
ボリスの顔にいらだち、そして憤懣と絶望がかわるがわる浮かんでは消えるのが見て取れた。

そしてゆっくりとグラスのラム酒を呷って一息つく。
「それから、ボンクラどもが嬉々として賞金首になったかつての仲間の情報をオレに聞きにきてな。1人じゃ面倒見切れねえ2流3流の奴らほどよろこんでサリエルに付き従うようになったみてえだ。・・フリギュアの後ろ盾もあるしな。くだらねえ、冒険者ってのはそんなもんじゃねえんだ。」
そのとおり。自ら以外の主をもったら、それはもう冒険者ではない。
「だからオレは言ってやったのさ。てめえらみたいなボンクラに売る情報はねえってな。」
そりゃあ寂れるわけだわ。
「じゃあ、私たちはボンクラじゃないって認めてもらえたのね。」
「冥縛なんて闇呪を使えるやつがボンクラなら世の中の魔術師はほとんどボンクラってことになるぜ。」
ニヤリとボリスの親父が笑った。腕利きの情報屋らしい、ふてぶてしい笑いだった。
「レーヴェとセイリアだが、ワルキアの森のなかを移動してるらしくてな、くわしい場所はわからんが首都レイガルドの踊る三日月って店で繋ぎをとれば会えるはずだ。」
「繋ぎをとるには？」
「レーヴェが死ぬほど嫌いなものを注文してやりゃいいのさ。」
「・・・・ってなめくじかよ！客が引かんか？それ。」
ガハハハ・・・・と豪快に笑いながらボリスはおもむろにカクテルを作りだした。
「まあ、飲め。」
マリンブルーの透き通った青と、サンセットイエローのグラデーションが鮮やかなボリスのオリジナルカクテル。
「珊瑚の夢か。それじゃ遠慮なく・・・・」
オホンッ・・・とカリウスが咳払いをする。まさか未成年は酒を飲むな・・・とか？
「ボリス殿、エルファシア様はこういった駆け引きには慣れており

ませんので・・・それくらいにしておいて頂きたい。」
「別に疑ってたわけじゃねえんだぜ？オレもそれくらいはわかるからな。ほんのお遊びのつもりだったんだが・・・・まさかとは思うが・・・そのお嬢さんエルロイの娘か？」

ブーーーーーッ！！！

オレは思わずカクテルを噴き出した。
「何歳のときの子供だ！何歳の！」
・・・・・・ちくしょう、嵌められた。
レーヴェの苦手なものを知ってるのはギルドのなかでもオレのほか数名に限られている。そして、その数名のなかで、ボリスのオリジナルカクテルを知るのはオレだけだ。
「ととと・・・とにかく！もうひとつ聞きたいことがある！」
「ああ、・・・ほかの幹部の消息か？」
「いや、・・・・・・内通者についての情報だ。」
ボリスの顔が固くこわばった。
「どこからの情報だ？。」
「今日殺したクルト・・・・大本の情報はサリエルだ。内通者は剣士だ・・・・ということらしい。」
「剣士・・・・剣士だとっ！？」
ボリスの額に玉のような汗が浮かんでいく。・・・・どうも雲行きがおかしい。
「・・・・・・やばいのか・・・？」
「サリエルの情報が嘘か真実かはオレにはなんとも言えん。」
ボリスの震える声が事態の容易ならぬことを告げている。
「ただ、先日から・・・ボスコニアの剣聖オイゲンがレーヴェと行動をともにしている・・・・。」
剣聖オイゲン・・・パティスをめぐる回廊の戦いで、たった一人で

１００人以上を斬り捨てたという伝説級の人斬り。
その戦闘力はレーヴェに勝るとも劣らない。
もしそんな猛者がサリエルに内通しているとするなら・・・・・
「レーヴェたちが危ない。」
味方だと思って油断しているなら、いつ殺されてしまってもおかしくない。懐に入った剣士はそれほどに危険だ。
「おやっさん。そのオイゲンの情報をもっと探ってくれ。サリエルが裏で糸を引いてるのならやつ自身にもきっとなんらかの動きがあるはずだ。
情報はわかりしだい踊る三日月亭に届けてくれればいい。このヤマが片付くまで、追加情報も頼む。」
「へっ、まかせておけ！久々に血が騒ぐぜ！それにしても・・・その口調といい、珊瑚の夢を知ってたことといい、まるでエルロイの野郎と話してるみたいだぜ・・・。」

はうっ！

「あはっ！あはははは・・・・まあ、エルロイと私は一心同体みたいなもんだしね！あはははは！！」

はあ、とボリスの親父はため息をついて致命的な言葉を発した。

「あいつ・・・虫も殺さねえような優男だったくせに・・・・ロリだったのか・・・・・。」

天国のお父さんお母さん・・・あなたの息子は反乱の首謀者にされたばかりか・・・・ロリコンにまでされてしまいました・・・。
少し泣いてもいいですか・・・？

第九話

ワルキア公国は１００年ほど前にブルームハルト帝国から独立を果たした新興国である。
国民は進取の気風に満ち、街並みは活気に溢れている。
また、尚武を良しとする武断の国でもあり、ワルキア公国騎士団は大陸でも有数の精鋭として知られていた。
そして毎年今の時期になると、騎士団の入隊試験が行われるため大陸中からわれこそはと思う武芸者たちが大挙しておしよせてくる。
公国騎士団が竜の紋章を象っていることから、人々はこれを竜の実りとよんで、臨時収入を求めてむらがるのだった。

「・・・・もう水無月になるんだなあ・・・・。」
目的地であった踊る三日月亭もまた、武芸者たちで賑わいを見せていた。
「騎士団の選抜に武闘会をもちいるとは面白い趣向ですな。実力のほどはいささか不安ですが。」
カリウスがまわりを見渡して言う。
「まあ、ほとんどは腕試しってくらいで自分が騎士になれるなんて思っちゃいないよ。ただ、ここの武闘会は知名度が高いからね、名前を売ろうとする連中にはもってこいなのさ。」

「今晩も臨時講義が必要ですか？」

「許してください。私が悪うございました。」
ある意味カーチャさんよりきついです。

「・・・・それでもまあ、今年は不作そうですけどね・・・・・。」
率直にいって質が悪い。
この踊る三日月亭の客だけではなく、レイガルドに入ってから腕の立ちそうな武芸者を見たのは数えるほどだった。それに・・・・
「冒険者の参加者が多いのが気になるわね。」
「お知り合いですか？」
「・・・・まさか！冒険者なんて名乗るのもおこがましい、殺し屋のほうがよっぽど似合う奴らよ。仮に優勝したって間違っても騎士になんてなれないわ。」

「・・・・あんたら、さっきから好きなこと言ってくれてんなあ・・・・」

背後にいた傭兵風の男が立ち上がった。食事中の会話は聞き耳を立てないのがマナーなんだがなあ・・・・。
「事実でしょ、というかあなた誰？」
ニタニタといやらしそうな笑みを浮かべていた男はわずかに口元をひきつらせた。おお、怒ってる怒ってる。
「へっへっへっ・・・魔獣殺しのヤザンといえばわかるかい？」
いたな、そういえばそんな奴。
「魔獣っていったってホブゴブリンじゃないの。せめて魔獣殺しを名乗るならマンティコアかサイクロプスを倒してからにしなさいよ。」
瞬殺されるでしょうけど。
言外にこめた私の意思を察したらしい。
「こ、このアマ・・・・・・っ！！」

「あの～・・・・・。」

場違いに間延びした声が割り込んできた。

見れば給仕の女の子が所在なさげにメニューを片手にこちらを窺っている。
「ご注文がお決まりでしたらお伺いしたいのですが～。」
・・・・この状況でおびえの欠片も感じさせぬこの態度・・・・・・できる！。
よく見ればヤザンのほうも振り上げた拳のやりどころに困っている。うやむやのうちに1件が収まりかけたその時、予想しえぬ一撃は味方からもたらされた。

「ナメクジをお願いしたい。」

「「「はあああっ？？？」」」

言うか？今ここでそれを言うのか？！
「あの～・・・それは塩をかけると溶けて消えちゃうあの可哀相なナメクジですか～？」
「その可哀相なナメクジです。」
「少々お待ちください・・・・。」
パタパタと音をたてて給仕の娘が厨房へときえ、店内は静寂に包まれた。
誰もが次の展開が予測できず、固唾を呑んでこちらをうかがっているのがわかる。
汚された・・・・また汚されちゃったよお父さんお母さん・・・・。

「お待たせしました～。」

パタパタパタ・・・・靴音を響かせて給仕の娘が戻ってきた。意外にすばやい。

ゴクリッ

店内に緊張が走る。

「本日のナメクジはカタルーニャ風香草焼きになります～。」

「「「「「はあああああああ？？？？」」」」」

あるのか、ナメクジ料理！というか繋ぎは？レーヴェとの繋ぎの話はどうなったの？
もしかしてガセ？ガセなの？ガセネタなの？生涯消えない烙印を私におして・・・・・もしそうならボリス！あんたのち〇こをぶっちぎる！！
　頭の中でボリスに対する復讐を約２０通りほど妄想していた私を、ヤザンの哄笑がとめた。

「あーはっはっは！聞いたかよ！ナメクジだってよ！小便くさいガキは食うモンもちがうってかあ？」

ブチッ

「ふふふふふ・・・・そう、それじゃ小便くさいガキより弱いあんたは何？ああ・・ちょうどいい名前があったわね。塩で溶けちゃうナメクジにちなんで
ナメクジヤザンって改名したら？。」
「なんだとおおおおっ！てめえ、ガキでも許さん！表にでろーっ！」

「うしろのこ汚い連中もまとめてかかってきなよ。自分の分際ってもんを教えてあげるからさ。」
「くっ、一時とはいえ、カーチャにエルファシア様を預けたばっかりに・・・どこまでも愛らしく世界一おしとやかな我が主が・・・。」
「うるさい、だまれ。」

ドガッ

ワインのボトルに後頭部を直撃され、カリウスは声もなく悶絶した。
「・・・・へっ・・・へへへへ・・いいのかよ。たった一人のお仲間にそんな真似してよう・・・。」
「声が震えてるわよ。」

通りにはまだ人の姿があるが、とりあえずこれだけスペースがあれば十分だ。

「大丈夫、命の心配はしなくていから。ただちょっぴり死ぬほど苦しくてお願いだから死にたい、でも死ねないって気分を味わってもらうだけ。」

「で、でかい口を・・・・！」

「天鎖、地緩捕」

虚空に現れた光の鎖に両手をふさがれ、泥沼と化した地面に膝まで埋まってヤザンたちはようやく己の過ちに気づいた。

「私が悪うございましたー！後生だから許してーっ！！」

「世の中にはとりかえしのつかないことってあるんだよ。それをあなたたちにも教えてあげる。」
だって私だけそんな目にあうのって不公平じゃない？

「いやあああああああ！！！！！」

魂切る絶叫がレイガルドの夜空にこだました。

天国のお父さんお母さん。私は悪くないよね？悪いのは世の中だよね？？

第十話

「本当にごめんなさいです～！」
結果から言えばボリスは正しかった。
ただ、踊る三日月亭の面々も、まさか金髪ゴスロリお嬢様とその執事が、レーヴェに会いに来た仲間とは思わなかったのだ。
余談だが、ナメクジ料理は本物だった。味のほうは・・・・ごめんなさい、許して。
「せっかく来てくださったのに申し訳ないんですが、ここ数日繋ぎがとれてないんですよ～・・・。」
相変わらずの間延びした口調のこの子はファンリーというそうだ。踊る三日月亭の主人の娘で、主人はかつてレーヴェと行動をともにした冒険者であったらしい。だからこそ・・・
「最近見張りの目が厳しいのです・・・・。」
マークされてるというわけだ。もしかすると、あの柄の悪い武芸者連中も監視員のうちなのかもしれないな。

「ところで貴女はレーヴェさんとどういうご関係ですか？」
好奇心に目を輝かせながらファンリーが詰め寄ってきた。そんな期待に満ちた目で見られても困るんだけど・・・。
「わ、悪いけど、ファンリーが期待するような関係じゃないと思うよ・・・。」
「じゃあ、エルファシアさんの片思いですか！？」
「・・・・どこをどうしたらそういう結論になるのかしら・・・・。」

「ま、まさかレーヴェさんの片思いなんですか！！」
「ち、違うったら・・・。」
この娘ったら・・・妄想癖でもあるのかしら。

「そんなまさか・・・！カリウスさんの片思いだなんて！！」

「いい加減片思いから離れなさい！！！」

あ、カリウスの口から魂が抜けてる。・・・やるわね、この子。
「・・・・私はレーヴェの関係者ではないわ。エルロイの・・・母違いの妹よ。」
「それは・・・・・。」
宿の面々の空気が重くなる。たしか・・・・オレの死体は磔にされてるとか言ってたしな。
「兄の仇は私が討つわ。でも、それ以上に兄の仲間を助けなくてはいけない。きっと兄もそれを望んでいるはずです。」
「エルロイギルド長の人柄をよくわかっておいでだ。・・・・レーヴェたちにかわってお悔やみ申し上げる。」
そういって頭をさげてくれたのは宿の主人だった。
「・・・・・ありがとうございます。」
しかし、自分のお悔やみを聞くってのは妙な気分だな。
「正直なところ情報が足りません。私たちはエステトラスからやってきましたので・・・おおまかなことしか知らないのです。
レーヴェやセイリアたちの現状をお話願えますか？。」
主人は顔を曇らせて、ひとつひとつ言葉を搾り出すように話し出した。

「どこからご説明すればよいか・・・・・あなたにはつらい話になるでしょうが・・・・。」

「これは、世情に流布している今回の件の顛末ですが、ことの発端はサリエルという魔術師が迷宮内においてエノクの工房と思われる部屋
を発見したことでした。遺物の独占をはかったギルド長はサリエルに発見の口外を禁じますが、ひそかにガングール大公とサリエルが連絡
を取り合ったためにギルド長の企みは露見します。それでも遺物の独占をあきらめきれないギルド長は冒険者の同士たちを密かに集め、王国にたいして反乱を企てようとしました。・・・・別にギルドは王国の臣下でもないので反乱という表現はおかしいのですがね。」
それに遺跡の場所だって王国の領土ではない。あの場所は・・・冒険者たちが切り開いた公界だ。
「いちはやくそれを察知した王国は機先を制して騎士団を派遣。ギルド内の大半を討ち取ることに成功します。この功により、サリエルは宮廷魔術師としての復帰を許されました。」
・・・・・そういえば、あいつ元宮廷魔術師だったか。なにか不祥事をやらかしたとかいってたっけ・・・。
「しかしサリエルは王宮への出仕を辞退して、瓦解したギルドの再建に乗り出します。もちろん、再建とは名ばかりでまず奴がギルド長となって
したことは、冒険者ギルドのフリギュア王国出先機関化のための再編。その核は他国にいて難を逃れたギルド幹部に懸賞金をかけること
でし
た。冒険者の大半・・・つまり2流3流の冒険者は賞金額の高さに目が眩み、あっさりとサリエルに尻尾をふりました。」
主人の声がわずかに震える。冒険者仲間の変節が悔しいのだろう。昔はいい冒険者だったんだろうな。

「今、冒険者ギルドは各国に支部を展開しています。名目は旧ギルド長派の冒険者に遺物を悪用されないよう管理するためだそうです。先日エステトラスにも支部が出来たはずですが・・・入れ違いでしたか？」

・・・・・・・・この違和感はなんだろう。この肌があわ立つ悪寒は・・・・・。

「レーヴェとセイリアの2人はエノクの古代遺物の情報を持ち出したとして、最優先で捕獲命令が出ています。正直なところ・・・・レイガルドにきている大半の冒険者は武闘会に参加するためではなく2人を捕らえにきているのです。」

・・・・・・まずい。オレの冒険者としての勘が鈍っていなければ最上級にヤバい事態だ。一刻も早くレーヴェたちに合流して力を合わせなければ坂道を転がるように事態は悪化していくだろう。

・・・・エステトラスに遺跡などない。いや、実際にはあるが存在を知られてはいなかった。

レーヴェとセイリアを生かして捕らえる理由もない。2人は今回の事件の生き証人であり、是が非でも口を封じなければならない相手だ。

そして、王宮への出仕を断り、今回の件を利用してギルドを世界展開して遺物を事実上支配下におこうとする絵はサリエルには描けない。

・・・・・サリエルもガングールも意のままに操る黒幕がいる。本人たちに操られていると感じさせることもなく。

「・・・・・カリウス、私の目覚めた場所の掃除は万全だな？」

「もちろんでございます。」
「ほかに掃除が必要な場所はあるか？」

宿の面々が不思議そうに私たちの会話を見つめている。
主人だけは、私たちが隠語を用いて話しているのに気づいているようだが。

「人の力の及ぶ土地では一箇所だけ・・・・。」

私の考えは甘かった。
この巨大な絵の、私が見たのはごく一部にすぎなかったことを、カリウスの一言が告げた。

「ここ、レイガルド王城の地下でございます。」

第十一話

・・・・・自分の見通しの甘さに暗澹たる思いだった。
おそらく、ワルキアとフリギュアの国境紛争も最初から仕組まれていたに違いない。
フリギュア近くの遺跡は妖魔の勢力圏にあった。エステトラスの遺跡は発見されていなかった。レイガルドの遺跡だけが、最初から知られた遺跡だったのだ。だとすると・・・・・何か手をうっているはずだ、オレの予想を超える何かを。
・・・・・だめだ、いくつか予想はできるがただの想像にしかならない。
「レーヴェに話を聞きたいな・・・・どうやって繋ぎをとってるんだ？」
「注文が入るんですよ。ん？・・・・どうやらきたようです。」
縁なし帽をかぶった１０歳前後の少年がなにやらメモを片手に店に入ってくるのが見える。
「あの～その先でおじさんに頼まれたんだけど・・・・明日リンメイの実を届けてほしいんだって！伝えてくれればわかるからって！」
主人はニコリと笑って少年に銅貨を数枚握らせた。
「ありがとう、たしかに聞いたよ。」
少年はうれしそうに笑って手を振りながら去っていった。
「・・・・・なるほど、注文、ね。」
リンメイの実は稀少種だ。採れる場所は限られている。
「こういった山野草の類は自分しか知らないポイントというのがありましてね。」
主人しか知らない採集のポイントが落ち合う場所というわけだ。
「・・・・しかし監視の目が厳しくなってきてますからね・・・・
今回はファンリーに案内をさせましょう。私は奴らの目をひきつけ

ておきますので。」
主人はニヤリと笑って、見当違いの山中をかけずりまわしてやる、と言ってくれた。本当に良い腕の冒険者だったんだな。

そんな私の感慨はファンリーのひとことで崩れ去った。
「それじゃ、お風呂のほうにご案内しますね。うふふ～私がお背中お流ししますので～。」

「あ、いえ、その・・・・私はもう少したってからにしますから・・・・。」

旅の間中、お金は高くても個室の風呂がある旅籠に泊まり、それがかなわぬときは深夜を狙って一人で入浴していた。
だって入ったら絶対に何かが終わってしまうから！

「もうじき火を落とさなきゃいけないですし～・・・もしかしてお姉さま、私と入るのが嫌なんですか～？」

そ、そんなに捨てられた子犬みたいな目で私を見ないで！　っていうかお姉さまって何！？

「それでは不肖このカリウスが、エルファシアさまの玉の肌を光り輝かんばかりに磨き上げ・・！」

バキッ！

「さあいきましょう！ファンリーちゃん！」

それでも男と入浴するのはもっと耐えられない。
認めたくないけど・・・・男としての羞恥心より女としての羞恥心のほうが強くなってきている。
反射的に裏拳をかましたカリウスを置き去りに、私はファンリーに手を引かれ女湯へと向かった。

ファンリーのほうを見ないように気をつけながら服を脱いでいく。
まだまだ発展の余地がありそうな胸にも、肌理の細かな肌にもようやく慣れてドキドキすることもなくなった。
「うわ～・・・・お姉さま妖精みたいです～。」
不意に凹凸に欠けたファンリーの肢体が目に入ってきて、私は慌てて目をそむけた。
うう・・・・なんか性犯罪者にでもなったような罪悪感が・・・・・
「・・・・ありがとう。それじゃ入りましょうか。」
「はいです～。」

ガラリ

「うふふふふ・・・お待ちしておりましたわ！」
「なんでカーチャさんがここにいるんですか！！」
なぜか湯船には豊かな胸をプカリと浮かべて、すっかりくつろいだカーチャさんがいた。
「だってカリウスじゃあエルファシアさまといっしょにお風呂に入れないじゃないですか。」
「そういう問題じゃありません。！。」
「あんまりつれないこと言うと・・・・・。」

カーチャさんは紅く形のいい唇をペロリと舐めると上目遣いに私を見た。

「・・・・・襲うわよ。」

「ごめんなさい、もう言いません。」

正直、今度やられたら堕ちない自信はない。

「お姉さまのお知り合いですか～？」

「ええ、エルファシアさまのもうひとりの従者で、カーチャというの。よろしくね。」

「そうなんですか～カーチャさんも素敵です～私もうドキドキなのですよ～！」

カーチャの豊乳をまじまじと見つめながらファンリーはご機嫌である。この娘、将来大丈夫かしら？

「あら、可愛い娘ね。あなたも素材は悪くないわよ。」

「えへへ～うれしいです～・・・・。でも～お姉さまにはかなわないのですよ～。」

ピトッ

「きゃぅうんっ！」

背中に頬を押し当てられただけなのに、こそばゆい痒みが走る。

「こ～んなスベスベでしっとりで白い肌見たことないのです～。」

純真そうな瞳を潤ませて、ファンリーは気持ちよさそうに抱きついてきた。

まだふくらみかけの固い蕾が、私の背中にあたる。

ファンリーを傷つけないようにそっと引き離すと私はファンリーに向き直った。

「・・・ファンリー、あなたもそろそろ年頃なのだから、他人と肌を接してはいけません。はしたないですし、軽い女だと思われてしまいますよ。」
私の軽い拒絶を感じたのだろう。ファンリーはしゅんとなって顔をうつむかせた。
「・・・・・お姉さまも、はしたないと思いました・・・・・？」
「いいえ、・・・・でもあまり女性同士で肌を合わせていると困った趣味の人と誤解されるから気をつけないと・・・・」
「ええ～っ！私困った趣味の人なんかじゃないです！ひどいのですよ～！」

ニヤリ

「そうね！確かに年頃の娘が肌をあわせるのは、はしたないし困った趣味の人と誤解されるかもしれない。」
うんうん、カーチャさんもわかってくれたか。

「でも、美を愛でる行為は決してはしたなくなんかない、むしろ美神に与えられた崇高なる義務！」
なんですかそのトンデモ理論は！
「やっぱりそうですよね！！！」
「さあ、思う存分に愛でましょう！この世にたったひとつの美神も及ばぬ完璧な裸身を！」
「はいっ！！」
「お願いだから冷静になって！正気に戻ってーっ！！」

ああ、天国のお父さんお母さん、この後2人に何をされたかは・・・・・・・黙秘させてください。

第十二話

レイガルドの北はダリムの森とラナート山脈によってブルームハルト帝国と、東はカヴェリー河によってフリギュア王国と分かたれている。
そのダリムの森の奥深くに私たちはいた。
「・・・・本当にこっちでいいんでしょうね・・・・。」
「はうっ！信じてくれないんですか～お姉さま～！」
「だってもうお昼よ・・・・。」
「こ、今度こそ本当です！あとちょっとですから！」
そのセリフ何回聞いたかな・・・・。

ぶっちゃけ迷ってました。

「しかしこれ以上ラナート山脈に近づきますと、妖魔も出てきかねませんぞ・・・・。」
今日はカーチャさんからカリウスに変わっている。宿の主人に説明するのが面倒くさかったのもあるが、森のような見通しの悪い地形では
魔術師であるカーチャより剣士のカリウスのほうが戦闘能力が高いからだ。
・・・・・別にカーチャさんに襲われるのが怖かったからじゃないですヨ？
「レーヴェたちならそのへんの妖魔は恐れるに足りないわ。追われる身であることを考えれば山脈に近い場所にいるのが正しいんじゃないかしら
。」
「なるほど、そうですな・・・すると目的地は遠くはない・・とい

うことですかな。」
「だといいけど。」
「お姉さま～きっとあの木の向こうですよ～。」
ファンリーがひときわ大きなブナの樹を指差して言った。
そのブナの樹に目をやった瞬間、私はファンリーを小脇にかかえて抜刀していた。
根拠はない。長年の冒険に鍛えられた直感のなせる技だった。
「・・・・・ほう、オレの気配に気づくとは、なかなかやる。」
ブナの前には堂々たる体躯に皮鎧を纏った剣士が佇んでいる。
・・・・隠行とはな・・・凄腕だ。
「ここで会ったのも何かの縁、一戦相手していただこうか！。」
やる気まんまんだな、この身体でどこまでやれるか試してみるのもいいか。
「相手にとって不足なし！お相手仕る！」

・・・・・・・・・・・・ん？

男は呆れたように首を振り、払うように手を振った。

「誰がお前のようなガキを相手にするか！オレが言ったのは隣の見るからにできそうな剣士のほうだ！。ガキはとっとと家に帰って人形でも抱いていろ。まったくこれだからガキは！！」

ブチッ

「・・・・・レディーに対する礼儀がなってませんわね・・・・・。」
オレはファンリーをカリウスに預けると、男に向き直った。
「カリウス、ファンリーを連れて少し離れていろ。少々派手にやるぞ！。」

そういうと、オレはカリウスたちを顧みることもなく、男に向かって突っ込んでいった。

「閃地」

空間縮小術で一瞬にして距離をつぶす。男の驚愕に歪む顔が心地いい。

だが、オレの打ち込みは男の小刀によって寸前で防がれていた。しまった！二刀使いかよ！

「魔術剣士か！筋は悪くないな。」

この期に及んでまだ子ども扱いするか！

だが今度はこちらが守勢に立つ番だった。嵐のような斬撃をかろうじて受け流すが・・・

・・・・・ジリジリと圧されていく。そらしそこねた分は具現結界でさばいているが・・・畜生、男のころの身体だったらなあ・・・。

「エルファシアさま、ご自分の身体をもっと信じてくださいませ。その身体は主様の身体なのですぞ。」

カリウスの言葉に私はこの身体がエノクの身体であるという事実を思い出す。

か弱そうな外見と、女性化してきた意識が知らず知らずのうちに枷を嵌めていたことに気づいて私は嘲笑った。

・・・・・・そう、この身は亜神エノクが残した魔術身体！

ガキ・・・・・・・ンッ！

今度こそ男の目が驚愕に見開かれた。

私の剣が男の剣を正面から受け止めている。それどころか逆に押し返していた。

「ば、馬鹿な！！」
自分の半分の自重すらない少女に膂力で負けているという現実が我慢ならないらしい。
男はムキになって野太刀に力を込めていく。・・・・相当プライド高いな、こいつ。
悪いがいつまでも力比べをしているつもりはない。
「剛鉄、炎気」
一気に男の剣をはじき返す。
突き放された右手を捨て、左手の小刀で薙ぎにくる男に・・・・・。
「転。」
剣を取ってその勢いのままに地面に叩きつける。オレの得意技だ。
「私の勝ちだ。」
剣を突きつけ、勝利を宣言するオレの頬を衝撃波が吹きぬけた。これ・・・遠当てかよ！
「嬢ちゃん、そこまでだ、次は当てるぜ。」
そこには、見慣れた軽薄な笑みを浮かべる親友と・・・・・。
ドゴッ！！
「・・・・げふっ・・・・・・。」
「あんな可愛い娘の顔に傷でもついたらどうするの・・・・自分がどれだけ罪深いことをしたかわかってる・・・？レーヴェ。」

なぜかその親友を殴りつけるセイリアがいた。というかセイリアさん、キャラ変わってませんか？。

「・・・・・セイリア、その可愛いもの好きもいい加減にしろ・・・大丈夫か？オイゲン。」

オイゲンデスト・・・・・？

「世界は広いものよな、まさかかような小娘に転が使えるとは・・・・な。」

「まあな、オレも見てたぜ。エルロイだってああも見事にあんたから転を決めるのは難しいだろう。」

いや、どっちもオレなんですけど・・・・

「あーっレーヴェさん！ようやく会えましたですよ～！」

突如始まった戦闘に目を白黒させていたファンリーの意識がようやく回復したようだ。

「ファンリー、待ち合わせの時間になってもこないから心配したぞ！」

「えへへへへ・・・・・すいません、迷ってました～。」

「ま、無事ならいいさ。それで？そこの可愛らしい嬢ちゃんと、なかなかできそうなおっさんはいったい誰だい？」

「エルロイさんのご兄妹なのですよ～。」

レーヴェは驚いたようにカリウスを見た。

「あいつの血族らしからぬ上品さだな・・・・するってえとこの娘はエルロイの姪か？」

「私がエルロイの妹だ！！！」

「「なにいいいいいいい！！！！！」」

セ、セイリアまで・・・ううっいいさ、どうせオレはよごれさ・・・・。

第十三話

「・・・・どうも信じられん。だいたいあいつに妹がいるなんて聞いたこともないぞ！」
レーヴェがうさんくさそうに私を見つめる。
「・・・しかしエルロイ殿も良く転を使ったと聞く。もしそうなら、この娘が転を使うのも納得がいくではないか。」
そう助け舟を出してくれたのはオイゲンだった。剣を交わしてわかったが、一本気な武人らしい気質の持ち主だ。
裏切りの剣士うんぬんはガセネタかもしれん。
「・・・・・納得いかねえ・・・・そうだ！もしあいつの妹ならあいつの想い人ぐらい知ってんだろ？言ってみろ！」
「え・・・・・・・・？」
ふと、セイリアと目が合う。
氷炎の魔女。エウメネスの鉄面と言われるほど表情に乏しい彼女が、驚くほど優しい眼差しで私に微笑んでいた。
首まで真っ赤に染まっているのが自分でもわかる。セイリアさん、その表情は反則です・・・・。

「って・・・・・・・そんなのこんな場所でいえるかーっ！！！」

本人の前で言えるようならオレだって苦労せんわ！

「・・・・どうやら知ってたようだな。」
「うむ・・・・・。」

わかっても口にはださないのが人としての仁義ではないでしょうか？
いかん・・・・なんだか泣きそう・・・・・。

「おいおい、そんな泣きそうな顔するなよ。大丈夫、お前の兄貴の想い人は本人も知ってたことだから。」

「はあああああ？？？」

セイリア・・・・まさか・・・知ってた・・・・の？

オレの視線にコックリと頷くセイリア。神様、それはあんまりです。

「というか、あいつ以外全員知ってたから。デートに誘ったりプレゼント贈ったり、ちゃんとやることやっといて気づかれないとでも思ってたのか？」

それをお前たちに気づかれないように必死で隠してたオレの努力は・・・・おのれ、男の純情をもてあそびやがって～！！

「しっかし驚いたな・・・・いっちゃ悪いが欠片も似てねえぞ、お前ら兄妹。」

どうやらオレの素の反応を見て信じることにしたらしい。まあ確かに他人がとるリアクションではないだろう。

「・・・・・母がエステトラスの旧貴族でした。父とは革命のなかで偶然知り合ったそうです。」

革命・・・・エステトラス共和国は王制を廃止するにあたって一時内乱状態にあった。そのなかで貴族身分を取り上げられた者を旧貴族という。

「道理で・・・・あいつエステトラスに行く度にオレたちに内緒でどこか行ってやがると思ったぜ。」

・・・・・それはお前らをオレの師匠に合わせたくなかっただけなんだが・・・・いたぶられるネタを提供するようなもんだからな。なにしろ、あの師匠ときたら・・・・・・・やめよう、心臓に悪い。

「先日、母も亡くなりまして・・・・・本当は兄に頼んで私も冒険者にしてもらうつもりでした・・・・・。」

・・・・・・・・・痛いほどの沈黙が訪れた。
セイリアはうつむき、レーヴェは歯を食いしばっている。
罪悪感に耐えかねてオレが他人の目も気にせず真実を話す誘惑にかられたその時・・・・

「すまん。」

レーヴェがオレの前に土下座していた。
自分の見ているものが信じられない。大陸中に武勇を知られ、口調こそ軽いが、プライドは高い男だ。
オレがエルロイであったときだって、こんなレーヴェの姿は見たことがない。

「オレはお前の兄を見殺しにした。」

・・・・違う、それを望んだのはオレなんだ。

「エルロイならなんとかしてくれるような気が抜けなかった。殴り倒してでも一緒に連れて行くべきだった。」

それをしたら遺物が奴らの手に渡るか、あるいは3人とも殺されていただろう。
なんとかなる・・・・そう思っていたのはオレも同じだ。

「オレの血と名と魂に誓ってあいつの仇は討つ。」

親友の誓いに胸が震える。
やっぱり、いいやつだよ、おまえ。
感動に目頭が熱くなり、我知らず頬が紅潮して胸が高鳴る。

「・・・・・そう見つめられると悪い気はしないが、お前はオレの守備範囲外だ。」

前言撤回、最低だ、おまえ。

ホッ・・・・・・・・・

ん・・・・・・？なんか安堵の息をついたやつがいたような・・・・・・。

「・・・・・やはりエルファシアさまに男女交際は早すぎますな。・・・・・・・・よかったよかった.」

おまえか、バカ執事！・・・・・でも、確かもう一人いた気が・・・・・

ムギュッ

・・・・・・・セイリアに抱きしめられてしまいました。

「・・・・・これから私のこと、姉さんと呼んでいいのよ。」

「「「はあああ？？？」」」

「・・・・・・お姉ちゃまでもいいわ・・・・・・。」

「いや、意味わかんないし！！」

そんな傷ついた顔されても困るよ～・・・・あのクールなセイリアさんはどこにいったっていうんだ？

「セイリア、お前なんだかんだいって・・・エルロイに惚れてたのか・・・・？だったらそうと言ってやらんとこの娘も混乱して・・・・」

「いや、それはない！！」

・・・・・・・・もう・・・どうにでもして・・・・・・・・神様は私のことが嫌いなんだよ、きっとそうだよ。

「エルロイは同じ仲間のリーダーとして信頼していた。でもそれとは関係なく、私を姉と思って頼ってほしいの。」

レーヴェが頭を掻きながら苦笑して言った。

「すまんな嬢ちゃん、こいつ小動物とか子供とか、可愛いもんに目がなくてな。」

・・・・・・・・ここ数年一緒に旅してたのに気づかなかったぞ、そんなこと！

「エルちゃんは特別・・・・別格・・・・・規格外。」

ってもうエルちゃんですか！

「姉だと思えないならそれ以上の関係になってくれてもかまわないわ・・・・・・いえむしろそのほうが好都合かしら・・・・。」

レ〇ですか？セイリアさんもしかしてあなたは〇ズなんですかあああ！！

ポン、とレーヴェが私の肩に手を置いた。

「なんというか・・・・・その・・・・とりあえず貞操は守れ。」

「失礼ね、そんな乱暴なことしないわ。もちろん、エルちゃんが望めば別だけど。うふふふふふふ！。」

神様こんなのってあんまりですううううううううう！！！

第十四話

セイリアの暴走を抑えるためにセイリア姉さんと呼ぶことでその場はひとまず落ち着いた。
あくまでひとまずでしかなかったが。・・・・・・なんだか女性に虐待される傾向があるのは仕様ですか？

「改めて紹介しよう。左から豪腕のロバート、剣聖オイゲン、道化のフリッガ、魅了のアルラウネ、雷神ギョーム、氷炎の魔女セイリア、
そしてオレ、暴風のレーヴェだ。」
大陸に二つ名をもって知られる超1流どころばかりだ。壮観だが・・・・・。

「思ったよりも少ないですわね。」

そう、少なすぎる。フリギュアの紐付きギルドに反対する冒険者はもっと多いとふんでいたのだが・・・・。

「まあ、オレたちに味方してくれる人間は結構多いとは思うぜ？でも、今のオレたちは賞金首だ。自分の身も守れねえ味方はいらねえ。・・・・・・裏切る恐れのある味方もな・・・・。」
レーヴェに言われてみればもっともな話だった。この妖魔の領域に近いラナート山脈のふもとで、金に目が眩んだ賞金稼ぎから逃げ回る毎日。それにサリエルのような裏切り者が潜り込む可能性を考えれば・・・・・・。
「・・・・それに今は、飛影のレインが偵察に出ているから・・・・・心配しなくてもエルちゃんには指一本触れさせないわ。」

ゾクゾクッ

「・・・・・すいません、セイリア姉さん。太股を撫で回しながら話しかけるのはやめていただたいんですけど・・・・。」

「親愛の表現なのに・・・・・。」

「そんな目でにらんでもダメです！」

それに一度許したらすぐにエスカレートするに決まっている！

「あ～！セイリアさんばっかりずるいです～！！」

ファンリーがセイリアに対抗するように抱きついてきた。私の胸に顔を埋めてチラリ、とセイリアに流し目を送っている。

変な対抗意識持つんじゃない！あ！こら！そんな風に顔をグリグリされたら・・・・・！

「いい加減話を進めていいか・・・・？」

「・・・・・ごめんなさい・・・。」

・・・・・・・これって私が謝るとこなのかしら・・・・？

「まあ、確かに1国を相手にケンカを売ろうとするには少なすぎると思うだろうけどな。当面の目標はサリエルとガングールの命だ。戦力としては十分さ。」

「・・・・だがそのサリエルの行方が一向につかめんのだ。」

重々しく引き継いだのはオイゲンだった。

「ギルドにいたときのような情報網は使えぬにしても、サリエルの所在の影すら掴めんとはどうにも合点がゆかことだがな。」

「レインもレンジャーだというだけで、本職の情報屋じゃないからね・・・・。」

かばうように言ったのはアルラウネだ。たしかレインとは恋人同士

だったはず・・・・・。いじらしいな・・・・・。
「そんなわけで、正直煮詰まってる。オレとしては嬢ちゃんの情報に期待したいとこなんだがな。」
・・・・思ったより情報が少ないな。とりあえず無闇に行動に移されなかっただけましか。

「ここから私が言うことは推測が混じってる。だから、知っていることや反対の考えがあるときは遠慮なく言って欲しい。」
全員が私を見てうなづいた。

「まず、サリエルだけど・・・・・案外近くにいると思う。」
「・・・・どういうことだ？」
豪腕のロバートがジロリと私をにらんだ。相変わらず凶悪な人相だな、おまえ。
「別にこちらの情報が漏れてるってわけじゃないわ。あいつの欲しいものがこのワルキアにあるというだけ。」
「欲しいものとは・・・・？」
「遺物よ。」
「・・・・・ってまさかレイガルド王城地下遺跡かあ？冗談だろ？」
大陸最強級のワルキア近衛騎士団の守る王城だ。普通はそう思うわな。
「・・・・そもそも今回の1件は全てある遺物を目標に計画されているの。」
「その遺物は・・・・・？」
「わかってるでしょう？亜神エノクよ。」
「エノクの遺物がレイガルドに眠ってるなんて話は聞いたことがないぜ。」
「確かにそうね。でも、レーヴェならどんな遺物が眠ってるか噂には聞いたことがあるはずよ。なんたって地元民なんだから。」
右手に顎を乗せてレーヴェは考えに沈んだ。

「・・・・・悪いがオレがここで暮らしたのはガキのころだからな・・・・。知ってるのは王家秘伝の継承が遺跡で行われるってことくらいだ。」
「そう。」
カリウスから聞いたあの遺跡の真実。
「レイガルド王家では代々初代公王の記憶の一部が承継される。」
「なんだと？・・・・・できるのか、そんなこと。」
「・・・・・でも、それは遺跡の力のほんの一部。」
ゴクリ、と誰かが生唾を飲む音が聞こえる。もはや誰もが固唾をのんで私の次のセリフを待っていた。
「あの遺跡の本当の機能は記憶の保存と再生。そしておそらく・・・・・亜神エノクの記憶もそこにある。」

・・・・長い、長い沈黙が訪れた。

レーヴェが畏れを含んだ目で私を見つめる。
「・・・・つまりフリギュアは本気でこのワルキアに戦争を仕掛けようというんだな。」
「そうよ。」
「そして全てはエノクの力を得るためだと。」
「そのとおり。」
「・・・・それを知るお前はナンだ？」

私は嗤った。
「・・・・ナンといわれても・・・・そうね、さしずめ復讐の魔女といったところかしら。」

番外編一話

私のふるさとはエウメネス王国の辺境に位置している。
閉鎖的で故国の者すらほとんど知らないイザァローン村・・・・そこが私の生まれ育った故郷だった。

もちろん知られないには知られないなりの理由が存在する。
私の村は妖精王アガペーの子孫を自認していて、非常に特殊な体質をしていたので一種の閉鎖社会を形成していたのだ。
その特殊な体質とは・・・・・・

思春期の１２～１４才くらいまでの間、私たちは無性で生まれてくるというものだった。
男でも女でもない無性な状態が、妖精の血が流れる証らしい。
そして自然発生的な心の有り様によって体はいずれかの性を選び成人となるのである。

私の初恋は１０歳のときだった。
幼馴染のアンフィトルテ・・・・私はある日突然、アンが実は滅茶苦茶綺麗である、ということを自覚した。
流れる金髪、細い指先、丸く大きな碧眼、どれも同年代の幼馴染にはない愛らしい魅力に満ちていた。
・・・・私も綺麗、可愛いと形容されることが多かったがアンにとうてい及ぶとは思われなかった。惚れた贔屓目であったかもしれないけれど。
それから2年の涙ぐましい努力によって、私はアンの心を射止めることに成功した。
伴侶を得たことにより性の分化が促され・・・・私は薔薇色の未来

の訪れに胸を高鳴らせた。

・・・・・絶望の未来が待っているとも知らずに。

アンは男性に、私は女性に分化していた。
思わず神を呪いたくなる。
私の計画では私が男性に、アンが女性になるはずだったのに！
困ったことにアンはというと・・・・ご満悦だった。アンは女の私に惹かれていたらしい。
アプローチの戦略が間違っていたと気づいたときには遅かった。
私の胸が膨らみ、腰周りが女性らしい優美な曲線を描くようになっていくのとは逆に・・・・
アンの華奢だった腕に筋肉がつき、黄金に輝いていた髪は短く刈り上げられ、身長は見上げるばかりに高くなった。
・・・・・もうそこにあの可愛いアンの面影はなかった。

もうアンを恋愛の対象として見ることはできなかったけれど、私たちの付き合いは続いていた。あの日、アンに押し倒されるまでは・・・・。

「セイリア・・・・ごめん・・・・・・！」
なにがごめんなのだろう。謝れば失った信頼は取り戻せるのとでも思っているのだろうか？
無我夢中のアンに荒々しく胸を揉みしだかれた時、私は自分の運命を知った。
私はこの野獣のような目を
この節くれだってゴツゴツとした指を
生臭い発情した雄の吐息を
・・・・・・男という生き物を愛することはできない。
「・・・・・・・火車。」

こんがりとローストされて気絶したアンを置いて私は村を後にした。
血を中に入れない、血を外に出さない、を掟にしている村に雇われたであろう暗殺者を返り討ちにしているうちに、私はいつしか氷炎の魔女の
2つ名を持つようになっていた。
そして私の人生設計上絶対に必要なものを手に入れるため、私は冒険者になった。

冒険者のいごこちは決して良いものとは言えなかったが、腕力にものをいわせそうな輩は一度ローストしてやるとすぐにおとなしくなった。
いいよる男も掃いて捨てるほどいたが、私の心を揺らすような男は一人としていなかった。
・・・・・・・・いや、例外を挙げるとするなら・・・・・・。

エルロイ・アーケイル・ノルガード

風渡る者という2つ名に相応しく、彼は風のように涼やかだった。
好意を見せはしたが押し付けようとはせず、欲望もあるのだろうがそれを制御する術を知っていた。
いつも飄々とした笑みを浮かべて自らの理想を追いかける彼は、私にとって初めて嫌悪感を抱かぬ男性だった。・・・・・・恋愛感情までは抱けなかったが。
・・・・・・しかし、長い年月の先には私を変ええたかもしれない彼は死んだ。

命懸けで仇を獲ろうと思える程度には好意を抱いていたのだと、彼が死んだあとに気づいた。

そして今日、私は運命に出会った。

オイゲンと戦う一人の少女。
エルロイと同じ魔術剣士で変幻自在の剣を振るう。
その佇まいはあくまでも涼やかで、生まれ持った身体能力と厳しい訓練の賜物であろう技のバランスは芸術的ですらあった。
そして不殺の極みともいえる秘技、転(まろばし)。
「私の勝ちだ。」
不敵な、それでいて少女の子供っぽさが抜け切らない微笑ましい笑み。
あの剣聖オイゲンを倒したとは思えない少女の伸びやかな肢体、汗ひとつかいていない磁器のような肌、そして天使に見まごう美貌に、私は2度めの恋に落ちたことを知った。

そんな私の感慨をよそに、少女にむかって遠当てを放つ無粋な男が一人。
・・・・・レーヴェ、あんた後でロースト。

驚いたことに、少女はエルロイの妹だそうだ。
レーヴェのバカは似てない似てないと連呼しているけど、容姿は別として佇まいは良く似ている。
自分の意思を押し付けない、それでいて自分の信念を貫き通す静かな強さ。
何もしなくても人を惹きつけてしまうカリスマ性。
・・・・・・・欲しい
・・・・・・・彼女が
・・・・・・・どうしても。

「・・・・・これから私のこと、姉さんと呼んでいいのよ。」
なんですかそれは？
思わず自分に突っ込みをいれてしまう。そんなことが言いたいんじゃなくて・・・・・・！
「・・・・・・お姉ちゃまでもいいわ・・・・・・・。」
・・・・すごい頭の悪そうなセリフしか出てこない。
こういうのも色ボケっていうのかしら・・・・？
「・・・・すいません、セイリア姉さん、太股撫で回しながら話かけるのやめて欲しいんですけど・・・・・。」
ちっ、ガード固いわね。こうしてスキンシップに慣れさせていけば堕としやすいと思ったのに・・・・！
でも、時間の問題よね！なんせ冒険の間に
女性の快感を１０倍にする秘薬とか
性フェロモンを１０倍分泌させる香水とか
残念ながら男になる秘術はまだ見つけてないけど女性を妊娠させる秘術も手に入れたことだし！
これでもう、女性同士の交際は不毛なんて言わせないわ。
ようやく冒険者としてやってきた苦労が報われる日がきたんだわ・・・・！
このミッションに失敗は許されない。まずは姉としてエルちゃんの

信頼を勝ち取るわ！うふふふふふふふ！！

「・・・・・セイリア姉さん、顔は無表情なのにすごく黒いオーラが出てるんですけど・・・・・・コワイですぅ・・・・・。」

あら、黒くなんかないわ。ピンク色のオーラは出てるかもしれないけど。

めくるめく桃色の世界に、きっとエルちゃんを案内して見せるわ！楽しみに待っててね！

ニヤリ・・・・・

「ひぃぃぃぃぃぃぃっ！！！！」

番外編二話

ものごころについた時にはもうオレのまわりに敵はいなかった。
それでももっと強くなりたいという欲求はやまず、ワルキア公国でも著名な槍匠リュースネルグの門下に入ったオレはたちまちのうちに道場の首座の地位を得た。
流石に師匠の力量は半端なものではなかったが、3年の後には師匠越えを果たしたオレの名はワルキアでもそれなりに知られたものとなっていた。

公国騎士団への誘いもあったが、宮仕えをするつもりはさらさらなかった。
まだ、挫折を知らぬあのころのオレは・・・・自分の強さに酔っていたのだ。

国を出たオレは冒険者として生計を立てだした。
好きなときに好きな任務を受ける。
冒険者の生活はオレの性にあっていたといってよい。
受ける任務はもっぱら妖魔の討滅任務だった。妖魔なら手加減なしで戦って殺してしまっても誰も文句は言わないからだ。
・・・・・・それが自分が殺されても誰も文句をいわないのと同義であるとは、当時のオレは考えなかった。

数年がたち、オレが二十歳を超えたころ、神聖ベルドラン教国で竜退治の冒険者を募っていると聞いたオレは迷わず名乗りを挙げた。
ベルドランの総大主教が崩御したことに伴い、後継レースの主導権を握るため竜殺しの名が必要ということらしい。
ベルドランの経典には悪竜退治の記述があるのだ。

しかし、妖魔や幻獣のなかでも最強クラスの竜に挑もうなどという酔狂な輩は存外少ないもので、集ったメンバーは任務の困難さとは裏腹に非常に少ないものとなった。
大司教マクスウェルと僧兵が1個小隊。防護魔術師が2名とレンジャーが1人、オレの他には魔術剣士のガキが1人。
まだ18になったばかりのそのガキは、名をエルロイ・アーケイル・ノルガードという、童顔な優男でしかなかった。
「死に急ぐのはどうかと思うぜ、ぼうや。」
「・・・・お気遣いありがとうございます。でも、多分逃げるだけなら私が一番助かる確率が高いですから。」
そのときは妙な返答だとしか思わなかったが、まさしくその通りだということはその後の竜との戦いが証明した。

竜・・・・ほぼ完全に魔術を無効化し、鉄より固い鱗に覆われた幻獣のなかでも最強の存在。
しかしそんなことはオレには関係がない。
鉄の鎧を豆腐にように貫くオレの槍にかかれば倒せぬ存在はいない。
オレの傲慢なまでの自信と誇りは、・・・・・・・・今、完膚なきまでに打ちのめされていた。

・・・・畜生、甘かった。
防護魔術師の結界は、竜のブレスの半分も防げず、あっさりと僧兵たちは香ばしく焼きあがってしまった。
大司教はこれまたあっさり転移魔術で戦線離脱。
オレはなんとか致命傷は防いでいるが、劣勢は隠せない。
竜の鱗がここまで硬いとは。
右から爪が、左から尻尾がオレを狙う。かわすのはそれほど難しくはない、が・・・・・
明らかに逃げやすそうな上に逃れればブレスが待っている。身軽さが身上のレンジャーがついさっきこれで消し炭になったところだ。

体勢が崩れるのを承知で、地面を転がってよける。
刹那、竜とオレの目と目があった。
・・・・・・・・読まれていた。
竜の巨大な足がオレを踏み潰そうと振り下ろされる。
初めて感じる死の予感に身体がこわばり、転がるスピードはイライラするほどゆっくりとして・・・・・・・
オレは自分の矮小さに歯噛みをしながら、逃れられぬ死を待った。

「閃地」

一瞬、目の前の風景から遠近感が消えたかと思うと・・・
竜の足はわずかにオレの身体を逸れ、オレはまったく意識から除外していた1人の少年に手を引かれていた。

「レーヴェさんが注意をひいてくれたんで助かりましたよ。もう目的は果たしましたしとっとと逃げましょう。」
素人に毛が生えた程度のガキと思っていた少年、エルロイだった。
「・・・・・・お前・・・・・死んでなかったのか・・・・それに目的を果たしたって・・・・・・？」
「まずはここを離れますよ！・・・・・・空を紡ぎて空を織る、穿空！」

エルロイの操る術式は転移系のものだった。
瞬きする間に竜の攻撃圏内から離脱する。
ブレスが時折放たれるが、基本的に竜は巣を離れることはない。視界の外まで逃げ出すことに成功したオレは、息も絶え絶えに大地に身を投げだした。

「・・・・・すいませんね、治癒術式は適性が無くて。」
エルロイが手際よく応急手当を処理していく。よく見れば全身ボロボロ、特に左腕は骨折していてあらぬ方向を向いている。
「・・・・・・・助けられたな・・・・・。」
こいつがいなければ、間違いなくオレは死んでいた。
考えもしなかった。自分が死ぬということ、負けるということが、死に直結するのだと、今になるまで気がつかずにいた。
「・・・・・レーヴェさんは強かったですよ。そのおかげで竜の鱗が手に入ったようなものですし。」
「鱗だと・・・・・？」
エルロイは頭を掻きながら苦い笑みを浮かべた。
「あの大司教はこの戦力で竜が退治できるとは流石に思えなかったんですね。だから、退治したという証拠・・・・竜の鱗を手に入れたらすぐ逃げ出すつもりだったんですよ。
結局そんな余裕もなく逃げ出しましたけどね。多分、ガチンコで竜を倒そうとしていたのは・・・・レーヴェさんだけです。」
「・・・・・・そうか・・・・・・。」

疑いもなく竜を倒せると信じていた自信
初めて感じた死の恐怖
そして初めて味わう挫折・・・・・・・

「オレは・・・・・負けたのか・・・・・。」

正直、心が折れかけていた。
もう一度、オレはあの竜に挑めるだろうか。
オレはまだ、強くなることは出来るだろう。しかし、勝てるかどうかわからない戦いに挑めるかどうかはわからなかった。

「勝てますよ。」

ポツリと聞こえた声に振り向けば、エルロイが優しい目でオレを見つめていた。
・・・・・・・ふと、胸が苦しくなる。
「どうしてそう言える？」
「レーヴェさんが勝てなかったのは単純に武器が竜に通じなかったからです。」
そしてふところから大きな竜の鱗を取り出して見せる。
「1枚余分に鱗を手に入れておきました。竜の鱗を加工してできた武器は魔術耐性を持つ上に竜の鱗を貫く威力があると聞きます。」
人なつこそうな目が笑う中、言葉だけが真剣だった。

「だから、今度こそ本当に竜を倒しましょう。」

まったく、そんなことを言われたら・・・・・
「・・・・・・・・・・もちろんだ。」

オレはそのとき、戦う勇気が戻ってきたのを、確かに感じた。

・・・・・・竜を倒したあと、エルロイは大量の財宝を軍資金にやりたいことがあるから、とベルドランを去っていった。
そしてオレは、再び戦いを求めての冒険の旅に戻っていった。

・・・・・・何かが足りない。
強敵と渡り合い、勝利を手に入れてもなお、オレはかつてのような充足感を得られずにいた。
ある国では勇者の称号を受けた。
ある国では絶世の美姫から求愛を受けた。
浴びるほどに酒を飲み、
夜が明けるまで女を抱いた。

それでもオレの渇きが癒されることはなかった。

そんなある日、久しぶりにワルキアへ戻ったオレは1枚の立て看板を目にした。

妖魔の森から、冒険者のための楽園を勝ち取ろう！

あいつらしい、夢物語のような挑戦だった。
同時にオレはあの渇きが急速に強まるのを感じていた。
そうか。
そうだったのか。
足りなかったのはエルロイだったんだ。

自覚したあとは早かった。
エルロイとともに妖魔たちと戦いを繰り広げ、ギルドを結成するやその体制作りに奔走した。
そしてギルド本部を拠点として寝食をともにする仲となった。
この充足感ときたらもう！！！
どうやらエルロイの奴はあの魔女に惚れているらしいが、脈がないのは先刻承知だ。
女なんか放っておけよ、愛情より男同士の友情さ！！

ともに行動するようになってわかったことだが、エルロイの奴は世話女房タイプだった。
朝はオレを起こし、朝食を用意してくれ、あまつさえ服まで整えてくれる。
まるで新婚夫婦のようだと言ったら殴られた。・・・・・ふっふっふっ照れてるのはオレも一緒さ。
流石のオレも男に性欲は感じないが、もうエルロイなしの生活は考えられない。

残念だ。エルロイの奴が女でさえあったなら！！
誰にはばかることなく愛していると言えるのに！

ゾクリ・・・・・

「・・・・・・・・カリウス、なにかしら？物凄い悪寒を感じたのだけれど・・・・・・。」
「それは啓示というやつですな・・・・エルファシアさまの身になにかよくないことが起きようとしているのかもしれません・・・・」

番外編三話

「まったくバカにつける薬はないとはよく言ったものだ、そうは思わんか？カリウス。」
ここ最近の主様はご機嫌斜めだ。
しかしそれも無理からぬこと、今の王国は腐敗しきっている。
不老不死の大宰相がいるせいで、政権の頂点に立てないと考えた浅はかな連中から襲撃を受けたことも一度や二度ではない。
・・・・・・もちろん生まれてきたことを後悔するほどに報復させてもらったが。

「魔術は万能ではない。まして、魔術を使えることが高貴の証にはなりえない。たったそれだけのことが理解できぬとはな・・・・。」

主様が体系化した魔術理論がアリアントス王国の成立に多大な恩恵を与えたのは確かだろう。
その巨大な力ゆえに王国は魔術の独占を図り、その知識の他国への持ち出しを厳禁した。
それだけならともかく、２００年を過ぎたあたりからは魔術を使えることが王国貴族の特権化し、余りにも幼稚な選民思想が蔓延している。
魔術を使えぬものは虫けらのように扱われ・・・・虫けらにも人間の尊厳と意気地があるとなれば破綻は必至だ。

「・・・・・・カリウス、悪いが薬を頼む・・・・・・。」

そのような連中の跳梁を許した理由がこれだ。
主様はこの千年の間、亜神化を拒絶している。

亜神となってしまえば現世に留まることは許されない。
まだ成立間もない王国を見捨てることができず、主様は現世に留まる決心をした。
そのために魔力容量の多い魔術身体を用意して不老不死の身となったのだが・・・・・・
亜神化の拒絶とはその実、神の力と戦うに等しい。主様は全魔力の実に九割以上を亜神化拒絶のために使用しているのだ。
それでも主様は世界最高の魔術師だが、その力は人の域を超えるものではない。
しかも、長期にわたる自然の流れに反した精神抵抗は過度なストレスとなって、主様の内臓にまで深刻なダメージを与えていた。

「予備身体に移る準備をされたほうがよろしいのでは・・・？」

術式の施されたハーブ茶を差し出しつつ、私は言った。
念のため主様には複数の予備身体が用意されている。つかの間ではあろうが、新しい身体に乗り移ればストレスの痛みは薄れるだろう。

「いらぬ・・・・妾の力をもってしても亜神となるのは・・・・・そう遠い先のことではない故な。いささか心残りではあるが・・・・。」
「１０００年の長きにわたって王国の繁栄を維持してきたのです。もはや王国も・・・・十分過ぎるほどに生きました。」
「・・・・・・そうやもしれんな・・・・・天命に逆らうことなど妾とてできぬこと・・・・・・だが・・・・・・・・。」

主様は微笑った。
その眼差しの優しさと形作られた微笑の美しさに、私は主様の想いの深さを見て・・・・・・胸を衝かれた。

「王国の親として、子に最後の教えくらい残してやらねばな。」
その声音のあまりに優しい響きに・・・・なぜか私は悲劇を幻視した。

「・・・・・・宰相閣下には失望しました。」
それは拒絶
「魔術の創始者ともあろう人が、下賤な愚民どもにまで魔術を解放なさろうとは・・・・。」
それは傲慢
「もはや時勢を読めぬ者に政を担わせるは王国の損失と言わねばなりますまい・・・・。」
それは嫉妬
「・・・・・・魔術がそれほどに大事か？」
「魔術こそ我らが選ばれた高貴なる貴族たる証。この力を持ってすれば閣下の危惧する蛮族など鎧袖一触に撃退してさしあげる。」
「貴様程度の矮小な力で何を誇る？」
主様の嘲笑が男に与えた影響は激甚だった。
「矮小だと？この筆頭公爵家ワールゼン・パトラス・フリグ・デ・アルカナたるこの私に対して矮小だと！老人と思って甘くしておれば・・・・

よかろう、もはや老人の出る幕ではないことを教えてやる！」
憎悪の眼差しに狂気を孕ませて男は呪言を紡いだ。

「天冥縛鎖」

主様の顔が苦痛に歪む。
男は口では大きなことを言ってはいたが流石に身の程を知っていたらしい。
主様を政治の舞台から引き摺り下ろすために相当以前から準備をしていたのだろう。
呪言で起動した術式はおそらく百人以上の魔術師を動員した儀式魔術・・・・・それも魔法陣まで使用した大規模結界魔術だった。

「・・・・・・・カリウス・・・・・・」
「はい・・・・」
「あとのことは手筈どおりに頼む。」

この程度の結界、主様にとっては薄紙を破るにも等しい児戯にしかならないだろうが・・・・・

「カーチャはしばらくなだめておけ。暴れだしたら事だからな。」

主様が魔力を消費すれば、もはや亜神化の進行を止めることはできない。

「承知しました。」

「では奴らに最後の教育をしてやるとしよう。できれば公衆の面前でお尻を叩いてやりたかったがな。」

主様は薄く笑った。
この期に及んでなお、いたずらっこにお仕置きする母のような優しい目だった。
・・・・・・・・主様の最後の教えは彼らに自分達の力の矮小さを見せ付けることですか。

「・・・・ふむ、気が変わった。カリウス、工房は消去せずに残しておけ。妾の子孫が妾の域にまでたどり着くなら手助けしてやるがよい。
子孫が男であったなら身体のほうは手直ししてやれ、男の身に妾の身体はつらかろう・・・・・。」
「かしこまりました。」

「ではさらばだ、カリウス。さて、高貴な貴族とやらに魔術のなんたるかを教育してやるとしようか！」

人から神へ。
現世に殻を脱ぎ捨てた巨大な力が光の柱となって王城の一隅を押しつぶした。

・・
・・・・
・・・・・
「２５００年ぶりになりましょうかな？主様」
「いや、人違いじゃないですか？オレはエルロイといいまして、というかここはどこ・・・・・。」
ふむ、男性でしたか・・・・・しかし慌てている主様というのもなかなか新鮮な魅力がありますな・・・・

「うわぁぁぁぁぁ！こっち見るな！着替え！着替え用意して！」
顔を真っ赤にして恥らう主様・・・・想像以上です。これ以上は私の理性がっ・・・・・・
「着替えならそこの衣装棚にひとつ残らず保管してございます。では、私は少し席をはずしましょう。着替えがおすみになりましたらおよび下さい」

・・・・・・楽しみですな・・・・主様は堅苦しい衣装がどうしても気に入らぬお方だったので・・・・私の趣味でお姿に相応しいものを取り揃え

させていただきましたが・・・・・今風に言うとゴスロリとか申すそうですが・・・・さぞお似合いになるでしょう。もう着替え終わったでしょうか？

「まことにお似合いですぞ、主様。」

素晴らしい。実に素晴らしい美しさです。
というかそのヘッドドレスはもはや犯罪ですな。エルロイ殿なかなかいいお仕事をしておられますぞ。
これはもうその姿のままでいろという神の啓示としか思えませぬ！
いや、むしろ絶対に男になんかしてやりませんぞ！！

「あれ？もしかして・・・戻れない・・・の・・・か？ハハハハ・・・
それはまずいよね。だってオレ男だし、エノクくらいの魔術師なら、子孫が男だった
ときのことくらい考えてるよ・・・ね？。」

「ふむ・・・いまひとつ納得はいきませぬが・・この工房の情報は私もある程度把握しておりますゆえ、この魔術知識をもって工房を再構築
すれば可能性は・・・どちらにしろ主様のもとの身体が必要となりますが・・・。」

・・・・・・申し訳ありませぬ、エルロイ殿。

全てはあなたの可愛さがいけないのです。

エノクさま。

あなたのご子孫はこんなにも可愛く成長されましたぞぉぉぉぉぉ！！（涙）

・・・・・・・・バカ？

世界の片隅でそんな声が聞こえたとか聞こえないとか・・・・・

番外編四話

使い魔として生まれた以上創造主であるエノク様に対する忠誠心はありますわ。
でもね、おバカのカリウスと違って私はどうも尊敬というか・・・・・崇拝・・・・みたいな感情がもてないでいるのですわ・・・・。
どうしてかって？
それはね。

ヘタレだからですわ！

「聞いてくれ！聞いてくれカーチャ！」
「どうしたのです、エノク様。」
「今日はケインの奴に釣鐘の花をもらったんだ。ここではなかなか手に入らないものなんだけど、妾に似合うからって！」
確かに王都あたりでは珍しいものでしょうけど・・・・・最上級貴族の貴方がそれを言いますか？
「妾の金髪に釣鐘の白が映えてまるで宝石細工のようだと。頬を染めながら賞賛してくれたのだ！その・・・・なんというか・・・いじらしくて
可愛らしくてとにかくすごくうれしかったのだ・・・・なのに・・・・・。」
あら？今日はお惚気だけじゃありませんのね・・・・
「なのにケインときたらこともあろうにジルベール男爵家の令嬢にも釣鐘の花を贈りおったのだ！ひどいと思わんか！？」
「・・・・・ケイン様は商売人ですから贔屓の客にサービスするの

は当たり前です。だから、いつも言ってるでしょう！焼き餅を焼くなら
せめて告白くらいしてからになさい、と。」
「・・・・・・・うぐぅ・・・・・。」

・・・・この会話、何度繰り返したかしら・・・・・

「だ、だが妾は実年齢３５０歳のしかも表向きには爺いに化けた王国大宰相なのだぞ？そ、そんな者に告白されたら迷惑するだけではないか・・・」
「じゃあ、ケイン様がどんな女に引っかかろうとあきらめるのですね。」

「うわぁぁぁぁぁん！カーチャのバカァァァ！！」

・・・・・今どき幼児でもそんな捨て台詞はいいませんわ・・・・・
とはいえこのままでは埒があきませんわね・・・・・ちょっとそのケインさんとやらに会ってみましょうか。

「いらっしゃいませ！何をお探しですか？」
純真な笑みを浮かべて出迎えてくれる少年・・・・はぁ？少年？？
「ケインさん・・・・でいらっしゃるかしら？」
「はい？。」
小首をかしげて愛想笑いを浮かべる様は・・・・まるで天使の肖像のようなピュアさだ。
というかエノク様！私はショタを主にもった覚えはありませんわ！
「・・・・・・ひとつ貴方にお伺いしたいことがありますの・・・・

。」
「なんでございましょう？」
「最近ここにエノ・・・・え～とその・・・金髪の大変愛らしい方がいらしてますわね？」

ボムッ

炸裂音が鳴り響きそうな勢いで真っ赤に染まる少年。
・・・・・いけませんわね・・・・凄く楽しくなって参りましたわ。

「あの・・・・えっと・・・・エレーナ様ですよね・・・・・／／／」
そう、エレーナと名乗っているのですか・・・まあ確かにエノクとは名乗れませんわよね。
「そう、そのエレーナ様ですわ、ケインさん」
「はい・・・・・。」
「貴方・・・・・エレーナ様が好きでしょう？」

「えええええええ！そ、そんな！僕なんかがそんな恐れ多い！確かに女神のようにお綺麗な方ですけど！」

うろたえて何やらやたらと手を振り回す少年・・・・・フフフ・・・・小動物的でイケナイ趣味に目覚めてしまいそうですわ・・・・
「うふふ・・・隠さなくてもいいのよ。私は貴方の恋の応援に参ったのですから・・・・。」
「そんな・・・・僕なんかがそんな身の程知らずな想いを抱くなんて・・・・・許されません！」

・・・・・・この二人似たもの同士ですわね・・・・・

「ケインさん、恋には身分も身の程もありませんの。あるのは・・・・・・。」

ガシッ！！

力任せにケインの頬を両手で押さえる。接吻せんばかりに近づいてケインの瞳を覗き込むと私は言った。

「男なら、好きか嫌いか！告白するかしないか！あるのはそれだけですわ！！」

「・・・・・・・・はいっ！！」

お子様はのせやすくていいですわね・・・・・・でもそんなとこも可愛らしくていいですわ・・・・

私は人差し指でケインの顎を上向かせると、そっと頬に口付けした。

「・・・・・自信をお持ちなさい・・・・貴方なかなかいい男よ・・・・・。」

「・・・・・・・・・はうっ・・・・・・・／／／」

ケインは頭から湯気を発していたかと思うと、バッタリ仰向けに倒れてしまった。

・・・・・・やりすぎましたかしら・・・？

ニヤリと笑って私はケインの店を後にした。もちろん私たちを見つめていた誰かさんの視線には気づいていた。

ほくほく顔にエノクが城にもどってきたのはそれから3時間ほどた

ってからだった・・・・・
「どうやらうまくいったようですわね・・・・・。」
「むっ！？カーチャ、貴様・・・・・。」
ホクホク顔から一転してジト目の嫉妬視線に変わるエノク様
「ケインさんとの恋がうまくいったのは私のおかげですのよ。感謝してほしいくらいですわ！」
「ううっ・・・・もしやそうではとは思っておったが・・・・・だだ、だがケインに口付けしたのは許せんのじゃ！」
「頬にキスくらいなんですか、エノク様はもうそれ以上のことをヤっていらしたのでしょう？」
「ななななな・・・・・・・・・・はうっ・・・・・／／／」
お風呂でのぼせたかのようにクタリ、と崩れ落ちるエノク様・・・・・・本当に似たもの同士ですわね・・・・・
エノク様が目を覚ましたらどうイジリ倒してさしあげようかしら・・・・
気がつきませんでしたわ・・・・人をイジるのがこんなに楽しいことだったなんて！！

「ファンリー逃がしちゃ駄目よ！捕まえて！」
「うわぁぁぁ！ファンリー見逃してぇぇ！」
「お姉さま～捕まえたです～！」
「でかしたわ！ウフフフ・・・・・さあ、エルファシア様・・・どこから愛でてあげましょうか・・・？やはり女性のシンボルからに

いたします？」
「お願いだから・・・・許して～！！」

第十五話

「ええ～と・・・・も、もう少しわかりやすく説明して欲しいかな？」
間のびした声でフリッガが手を挙げた。
私とレーヴェの間に流れていた緊張が途切れる。これはフリッガに助けられたかな。
「フリギュアはエノクの遺物を狙っていて、その遺物がレイガルドの王城にある。ここまではいい？」
「どうしてフリギュアがそれを狙ってるってわかるのかな・・・？」
「・・・・フリギュアがワルキアと争ってなんの得があると思う？フリギュアのような中級国家にとってワルキア公国のようなブルームハルト帝国との緩衝役を果たしてくれる小国はむしろありがたい存在なのよ。実際、紛争の種になってるククルカン城塞はフリギュアが過去にブルームハルトに負けて移譲したものなわけだし。」
「確かに、フリギュアと軍事的に対立して以来ワルキアの政治姿勢もブルームハルトよりになっているしな。」
豪腕のロバートがうなづいてる。そういえば、ロバートはブルームハルトの出身だったか。
「それに対ブルームハルトで同盟関係にあるエステトラスやコルドバとも対立を免れないわ。ワルキアの民は自立自尊の伝統が強いから占領政策だって恐ろしく手間がかかるだろうし・・・・ようするに真っ当な頭の持ち主ならワルキアと争って利益がでるとは思わない
わ。」
ゆっくりと全員を見渡す。・・・・・・どうやら全員納得してくれたようだ。

「・・・・ここから話が前後するんだけど・・・・、もともとフリギュアはワルキアの遺跡を占領するつもりで何年もまえから準備を進めていたの。
ここ数年の平民下士官の教練とかね。だから・・・・妖魔の領域にエノクの遺物が眠る新遺跡が見つかるとは想定していなかったのよ・・・。」
「おいおい、ギルドを襲ったほうが想定外だっていうのかよ！」
「そもそもあの遺跡を見つけたのはわた・・・兄さんがマールベリの殺戮魔を追っている途中で偶然もいいとこだったわ。でも、別に関係ない
と思っていたから最初のうちは見逃していたの。」
「・・・・・その根拠は？」
「最初からエノクの遺物があるとわかっていたらギルドの管理下におくなんて許可するわけがないわ。・・・・・だからあの時点では本当に気づ
いていなかったのよ。」
迷惑な話だ。気づいていたなら・・・あの殺戮はなかったのだから。
「・・・・そんななか宮廷でやたらと慌しくしている小物が一人・・・・。」
「それってまさか・・・・・・」
「サリエルよ。」
レーヴェたちの表情が苦虫を噛み潰したようなものに変わる。
「・・・・・先祖から伝わる古文書で遺跡の場所を知ったサリエルは古文書の解読に躍起になっていた。そんな時、ふと、禁書の情報を吹き込ん
だ人間がいた。サリエルは夢中で禁書を盗み出し、古文書の謎を解いた。そして禁書の封を解いた罪で宮廷魔術師を追放された・・・。」
「見てきたように言うんだな・・・・・。」
「違ってるかしら・・・・・？」

「いや、・・・・・・オレもそう思うぜ。」
レーヴェは吐き捨てるように言った。
「・・・・サリエルにギルドをまとめる器量はねえ。ずっとそれが気にかかっていた。」
「そう、サリエルを躍らせた人間は別にいる。」
「それは誰だ？」
「・・・・・流石にそこまでは言い切れないわね。候補は3人・・・・フリギュア国王その人。王国宰相フサスラ、宮廷魔術師長クロトワといったところね。」
「骨の折れそうな相手だぜ・・・・。」
そりゃ、たしかにフリギュア一国まるごと相手するに等しいからな。ここで再びフリッガが手を挙げた。
「それじゃあ、サリエルが近くにいるっていうのはどういうこと・・・・？」
「うん、今はそっちのほうが重要かな・・・？」
それほど時間も残されていないしな。
「フリギュア王国の準備が整ったっていうことだよ。先遣隊はもう国境付近で突入準備を始めてると思う。遺物に執念を燃やすサリエルなら・・・・十中八九そこにいるだろうね。」
「・・・・・どうしてそこまでわかるのかな？」
「フリギュアが早期にレイガルドを落したいなら、それはこの武闘会・・・竜の実りの期間中以外はありえないからね。このレイガルドにいる冒険者・・・本当にレーヴェ達を追ってる人間はどれくらいかな・・？たぶん大した数じゃないと思うよ？よほどのバカか、よほどの腕利き以外は戦っても勝てないのを知ってるから。」
「それじゃあ～、たくさんいる冒険者さんたちは～武闘会に来ただけだったんですね～。」

・・・・・ファンリー、もう少し話の流れを読もうよ。
「フリギュアの侵攻と時を同じくしてレイガルドで騒乱を起こすはずよ。それで公国の近衛騎士団を足止めできれば、先手を取ったフリギュアの優位は動かないわ。」
「・・・・・・エルファシア殿と申されたか。若さに見合わぬその見識、このオイゲン感服いたした。これで、サリエルの所在が知れぬ理由が解けましたな。」
「そういえばオイゲンさんにも聞きたいことがあったわ。」
何気なさを装って私はオイゲンに聞いた。
「冒険者でないあなたがどうしてレーヴェたちの仲間になったのかしら・・・・・？」
「・・・・・・ふむ・・・・疑っておいでか。」
「疑ってはいないわ。わからないことはわからないままにしておきたくないだけ。」
オイゲンがちらりとレーヴェに視線を送る。
レーヴェが頷くのを確認すると、オイゲンは語りだした。
「・・・・・・さて、どこから話したものか・・・・・・。」
ってせっかくシリアスに盛り上がってるところ悪いんだけど・・・・・・！
今とってもご不浄にいきたいんですけど・・・・！というかリアルにピンチ！

女性の身体になってから尿意が近いのはどうも慣れない・・・・ごめんなさい、我慢するのも慣れてないんです。
誰か助けて～！！

「話が長くなりそうだから、ちょっとはずさせてもらっていいかしら。」

え・・・・・？

「いったいどこに行くって言うんだよ。」
「女性にそんなこと聞くものではないわ。」

焚き火から炎精が吹き上がり火の粉を撒き散らす。主にレーヴェに集中している模様。
「エルちゃんも・・・いくでしょ？」

もちろんですとも！！

ありがとう。セイリア！この恩は忘れないよ！

・・・・・・・ふう・・・・すっきりすっきり。
「・・・・・・エルちゃん・・・・・・」
うひぃぃぃぃぃぃ！！
「・・・セイリア姉さん気配を殺して背後にまわるのやめて下さい！」
「ちゃんとおそその周りは拭いたかしら・・・？」
「ええ、もちろん。」
私はポーチに入れたティッシュを見せる。最初男だったときの癖が抜けなくてエライ目にあったからな。

女性がティッシュを離さない理由を身をもって味わったというか・・・・いかん、また恥ずかしくなってきた。

「だめよ、エルちゃんみたいに可愛い女の子は香りにも気をつけなきゃ！。」

そういってセイリアは色鮮やかな紙を取り出した。

ふんわりと漂う蘭の香りが鼻腔をくすぐる。香紙という奴だ。確かかなり値が張ると思ったが・・・・。

なぜにセイリアさんにじり寄ってくるですか？

もしかして拭く気ですか？

「セ、セイリア姉さん、自分でできますから！」

いろいろ終わってしまった私だけど、それを許したらもっと終わってしまうというかなんというか！

「あら、女同士なんだから遠慮しないの！」

だから厳密には女同士ではないというか・・・・・

「ふふふふふ・・・・お姉さんに任せて・・・・・この香紙はね、いったん四つ折にしたほうが香りが出るのよ・・・・・。」

ああっ！なんかもう誰もこの人を止められない流れに・・・・・！！

お願いだから誰か助けてーっ！！

・・
・・・・
・・・・・・・
「・・・・・・なんか嬢ちゃん、えらく煤けてないか？」

お願いだから聞かないでください！！

第十六話

「私には・・・幼き日世話になった兄弟子がおりました・・・・。」
「シュワルツェン抜刀流・・・・だったっけ？」
「よくご存知でござるな・・・・貧乏騎士の二男に生まれた私は・・・6歳で道場に出されました。故に師匠は第二の父、弟子たちは第二の兄弟でござる。」
オイゲンの目が懐かしげに緩む。
「なかでも、私が目標とし、教えを頂いた兄弟子の名を・・・・・フーシェと申します。」
オイゲンのフーシェへの思いが、口調からも感じられた。本当に兄弟のように育ったのだろう。
しかし・・・・・・フーシェという名には聞き覚えがある。それもオイゲンの話す思い出には似つかわしくない名で。
「・・・・・思い違いならよいのですが、そのフーシェというかたは・・・・・・。」
「エルファシア殿の考えで間違いはござらん。セイグラムの狂剣士その人でござる。」
セイグラムの狂剣士・・・・ボスコニアの貴族に許婚を殺され、狂気の果てに暗殺者としてボスコニア宮廷を恐怖のドン底に陥れた剣鬼として名高い。
彼の手にかかった貴族の数は優に百人を超える。
ボスコニアの国力が減退してパティスをめぐる対イシューカ戦争の遠因にもなった。
・・・・・・ってちょっと待て。
あの狂剣士を倒したのは確か・・・・・・
私の視線を感じたのだろう。
決まり悪そうな顔でレーヴェは頷いた。

「そうだ、フーシェを殺したのはオレだ。」

もしそうならレーヴェはオイゲンの仇ということにならないか？
・・・・・やはりあの情報は・・・・・・
もはや私はオイゲンに対する疑いの目を隠せなかった。

「・・・・・お疑いになるのはごもっともでござる。実際それは真実でもありますしな。」
「・・・・・どういうこと・・・・？」
「私はレーヴェ・ブロンベルグ殿に決闘を申し込みに参ったのです。今でもその意志に変わりはありません。」

決闘・・・・・それは・・・・・

「あなたはレーヴェの命を狙ってると解釈していいのね？」
「・・・・・はい。」

「お前らいい加減にしろ！」

何故かレーヴェに怒られた。

「まったく口下手同士が話しても埒があかねえ。オイゲンは確かに決闘を申し込んできたが、サリエルたちをぶっちめるまでは待ってもらうことになってるから問題ない。それに決闘だからって命のやり取りになるとは限らねえよ。」
「・・・・レーヴェ殿が本懐を遂げるまで、決闘をするつもりはござらん。いや、むしろ全力を挙げて手助けさせていただく。私にはレーヴェ殿の

お気持ちが痛いほどよくわかるのでござる。レーヴェ殿にとっても、エルロイ殿は家族同然の存在だったのでござろう。」

う・・・・照れる・・・・・・・そんなにも思われていたなら、やはりうれしい。

「何故、嬢ちゃんが照れる・・・・・？」

「う、うるさいわね！うれしかったのよ！悪い？」

「・・・・・・あれは家族というより・・・夫婦だったけどね。」

セイリアさん、それはあんまりです。
レーヴェって、ずぼらで大雑把だからちょっと面倒みてあげてただけなのに・・・・・・

「よせやい・・・・・／／／・・・・・」

ちょっと待て、何故お前が照れる？

「・・・・・それに他人事とも思えませんでな。レーヴェ殿も私も1番大切な家族を、結局救えませんでしたゆえ・・・・。」

声にならぬ慟哭が聞こえるようだった。
オイゲンはレーヴェを憎んでなどいない。憎んでいるのは・・・・自分自身だ。
もし、レーヴェもそうであるというのなら・・・・・・・それは哀しい。
しかもエルロイ・アーケイル・ノルガードはある意味ではまだ、死んでなどいないのだ。

打ち明けたほうがいいだろうか。
オイゲンは大丈夫だろう。
彼自身のけじめとしてレーヴェと戦わずにはいられないのだろうが、裏切るような人間ではない。
もし、オイゲンがレーヴェたちを斬るとサリエルが考えていたのならとんだ勘違いだ。
ほかの仲間にしても信頼にたるものばかり・・・・・

いや、やはりいうべきじゃない。
今のオレはフリギュアが国をあげて追い求める遺物そのものだ。
不老不死の生きた遺物だということが、もし知られたら大陸中全ての国がオレを狙い、その魔手は仲間たちにも及ぶだろう。
それになにより、オレはもう、・・・・・・・・みんなと同じ時を過ごすことができない。

「ん・・・・・なんだ？新顔がいるな・・・・・・。」
「レイン・・・・おかえり。」
アルラウネが恋人の帰りに顔をほころばせる。
「収穫はあったか？」
「まあ、収穫っていうか・・・むしろおすそ分けかな？ボリスの親父にあったぜ。」
「ボリスに？どこで？？」
「国境のヘイン村だよ。サリエルもそこにいる。」
仇敵発見の報に歓声があがる。しかし今大事なのはそれじゃない。
「・・・・・兵力は何名ですか・・・？」
レインは一瞬驚愕の目で私を見た。
「２０００人ってとこだ。多分ヘイン村以外にもいるんだろうがな。
・・・・ボリスの親父が惚れこむわけだ、いい目してるぜ。」

ギュムッ

「・・・・・・・エルちゃんにハゲは似合わないと思うの。」

「セイリアさん、そういう惚れるじゃないから・・・・・。」

「話を続けていいか・・・・・・？」

「す、すいません・・・・」

たびたび思うんだけど私のせいですか??

「明後日、武闘会の最終日を期してフリギュアはワルキアに侵攻を開始する。首都レイガルドでは潜入していた工作員が騒乱を起こすことに

なっている。」

「・・・・・エルファシア殿の読み通りですな・・・・・・。」

「とすると選択肢は2つ・・・首都の騒乱を止めるか、サリエルがいる先遣隊の足止めをするか・・・・・。」

「足止めなんてケチくさいこと言ってるんじゃないわ!」

口元が緩むのを抑えることができない。

「大陸に名高い2つ名持ちと、この復讐の魔女がいるのよ。２０００人程度真正面から叩き潰してあげる。」

・・・・それにサリエルには聞かねばならないことがある。

復讐がもたらす暗い快感に、私は身を震わせた。

「・・・・・・・エルちゃん、そんな怖い顔しちゃ・・・・嫌!」

モミモミ

「や！セイリア姉さん、駄目！・・・・・ひゃぁぁぁぁぁんん！人の胸で遊ばないでぇぇぇぇん！」

「・・・・・あんまり兄貴を泣かすような趣味に走るなよ・・・・・」

今、本人が泣いとるわあああああ！！！

第十七話

「王国騎士団の精鋭相手に真正面からケンカ売るなんて・・・・・・正気か嬢ちゃん。」
「嬢ちゃん言うな。・・・・・このメンツでできないほうがおかしいと思わない？」
私はぐるりと仲間たちを一瞥して不敵に笑みを浮かべて見せた。
やや鼻白んだようにロバートが苦笑する。
「・・・・・たいした自信だが、この嬢ちゃんはどれぐらいアテにしていいんだ？」
「・・・・・オイゲンにガチで勝てるかもしれん・・・・・。」
「なんだと？？」
視線をぶつけられたオイゲンは重々しく頷いた。
「エルファシア殿の剣技は私やレーヴェのそれと比べても遜色あるものではござらん。・・・・少々納得いかぬのは膂力も遜色ない、ということでござるが・・・・。」
「オイゲンに力負けしないって・・・・どんだけだよ・・・・。」
「悪いけど、私の本領は魔術戦だからね。いっとくけど白兵に関してはカリウスの腕は私の数倍よ。」

「「「「なにいいいいい！！」」」」

・・・・・・エルロイであったときとは条件が違うからな。
この身体に宿る膨大な魔力は人の身には大きすぎる殲滅呪法を可能としている。
逆に剣術は男であったときの間合いが抜けきれずに、身体能力こそ向上したものの、今ひとつ信頼性にかける。
・・・・・・・カリウスの剣術については言うまでもない。

もともと彼はあのエノクが練り上げた使い魔だ。たまにただのボケ親父かと思うことがあるが。
あくまでその身体は見かけにすぎない。
だから、見かけとは関係なしに人外の膂力を発揮し、人には不可能な、例えば間接に関係なく身体を操る。

「それが本当ならそれほど無謀な話でもないかもね～。」
フリッガが楽しそうな声をあげた。
こいつは前からそうだった。道化の名が示すとおり危険より楽しみを優先してしまう。
もっとも体術でこいつを捕らえられる奴は大陸にいくらもいないだろうが。

「・・・・カリウス殿、エルファシア殿との一戦でうやむやになっておりましたが、是非とも一手お相手願いたい！」
「我が主の許可さえあればいつなりと。」
「2人ともことが終わったあとにしなさい。」
まったく時と場合を考えろっての。

「・・・・・エルちゃんはどの系統の魔術を使うの？」
セイリアが魔術師らしい疑問を述べる。でも手を握りながらというのはやめてほしい。
「四大は全部使えますけど、あえていうなら風ですね。」
「そう、なら・・・・・轟雷は使えるのね・・・・・・。」
「まあ、使えますけど・・・十里雷も使えますし・・・・・。」

「なんですって??」

私の言った広域殲滅呪法にセイリアは目をむいた。いつもクールな彼女らしからぬ反応でなんだか可愛い。

ガバッ

「さすがエルちゃんだわ！こんなに可愛いのにさらに魔術の天才でもあるなんて！」
「おいおい、そんな大層な呪文なのかよ。」
「下手すると、一撃で２０００人全部吹っ飛ぶかもね。」

「「「なにいいぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ！！！」」」

「・・・・・・・・・・・んぅぅん！」
セイリアさん、どさくさにまぎれてお尻を撫でないでください！！

白銀の光の下で、篝火のはぜる音と無数の鎧がひしめく音が響いていた。
魔術抑制のルーンを刻んだ漆黒の鎧は、彼らがフリギュア王国でも最精鋭の近衛騎士団であることを教えていた。
しかし、彼らはそれを隠そうともせず、また彼らに瞠目する村人もいない。
すでにヘインの村に生活した村民たちは過去の存在だった・・・・・。
「さあ、行くぞ！王国近衛騎士団の英雄諸君！この道の先に栄光が待っている！いざ往かん、レイガルドへ！！」
宮廷魔術師の青い道服を身に纏った男が大音声をはりあげる。

「・・・・・・・悪いがこの道の先に栄光はない・・・・・・。」

今、戦いの秋はきた。

第十八話

「踊れ炎よ、舞い狂え紅き精霊たちよ、地獄の業火よ、ここに顕現し愚かなる敵対者を掃滅せよ。・・・・・・覇炎。」

極大の炎が今まさに出陣しようとする騎士団のど真ん中に着弾した。

「さて、お姫様のまえに露払いといくか！」

レーヴェが、オイゲンが、ロバートが、ギョームが騎士団の先陣に吶喊する。

「・・・・・たかが４人で・・・・・・近衛騎士団を嘗めるな！」

流石は近衛だ。奇襲としてはこのうえないタイミングだったのに、もう指揮系を取り戻している。

だが、

たかが４人という考えは間違いだ。

「どおおおりゃぁぁぁ！！」

ロバートの戦斧が踊る。

豪腕ロバートとよばれた膂力は健在だった。巨大な戦斧は魔力付与されているはずの鎧をあざ笑うかのように圧潰していく。

「シュワルツェン抜刀流免許、オイゲン参る！」

オイゲンの斬撃もまた、騎士たちを圧倒していた。

本来身を守るべき盾も鎧も触れるもの全てが豆腐のように切り裂かれていく。

１００人斬りの名は伊達ではないのだ。

「むんっ！」

ギョームは重い戦槌を片手で当たるを幸いに振り回していた。

彼の槌は特別製で、雷撃呪法を纏わせているから掠っただけでもダメージを受ける。

並の剣撃より速いスピードに騎士たちはつけ込む隙を見出せずにいた。

「・・・・待たせたな、サリエルさんよ！」

レーヴェは暴風の名が虚名でないことをこれ以上ない形で証明していた。

槍の動作は、ほぼ突くことと薙ぐことに限定されるが、その動作に籠められた力と速度が尋常ではなかった。

突けばそれは槍の制空権内に全く間断のない弾幕となり、薙げば鎧を着込んだ騎士数人を一気に腰斬した。

「レーヴェか！この大事な時に邪魔をしおって・・・・・・・！」

サリエルが怨嗟の言葉を漏らすが奴にはなにもできない。

それが奴の分際なのだから。

「正面から相手をするな！防護結界を厚くしろ！第二中隊と第三中隊は背後に回れ！」

「り、りょうか・・・・ぐわあっ！」

「どうした！？」

フリッガとアルラウネ、レインが側面から指揮者を狙って襲い掛かる。

その神速の動きは騎士たちに対応する暇を与えない。

人には認知から行動までどうすることもできないタイムラグがある。

達人はそれを反射という形で克服するが、優れた兵士ではあっても
達人の域に達しているとはいえぬ騎士たちには彼らを捕捉すること
など
できぬ相談なのだ。

「そんな！そんな馬鹿な・・・・・こ、こっちは近衛騎士団の精鋭
なんだぞ！」
相変わらずわめくことしかできないサリエルを無視して、騎士団長
が叫んだ。
「全周防御！・・・・・いかな英雄でも体力は無限ではない！全力
で耐えろ！」
犠牲を厭わずこちらの疲れを待つ・・・・・騎士の誇りもあるだろ
うに現実的な判断だ。有能というべきかもしれない。
騎士たちの運動が止まった。
今まで攻撃にむけていた力の全てを防御に回し、その神経を全周に
向ける。
見事だ。よく訓練されている。

だが、

それが命取りだ。

「天に住まう風の主、アイオーンよ。
雷帝にして法の番人シルヴァよ
今こそ天河の堰を切り、
地を這うものどもに鉄槌を。
風の門の封を解き、
愚かなるものどもに雷槍を。
汝が民たる我が力を糧に

立ちはだかる者に破滅を
仇名す愚か者に絶望を
・・・・・・我らが怨敵に、冥府の裁きを与えんことを。・・・・・・・・十里雷。」

それは一瞬だった。
密集して固まった騎士たちに数百、いや、数千の雷撃が降り注いだ。
騎士たちにも何が起こったのか理解する猶予はなかったに違いない。
ただ、目も眩む閃光が走り・・・・・・・そこにはかつて騎士であった焼け焦げた何かが残された。

「・・・・・・・ば、馬鹿な！こ、こんな馬鹿な話があるか！！」

後方でわめいていた羊がにわかに身を翻す。

「・・・・・・逃がさねえよ。」

「ひぃぃぃぃっ！」

既に退路にはレーヴェとレインが回り込んでいた。
これで詰みだ。

「・・・・・お、お前たちはわかっているのか！私を殺せば、か、神の業が失われるのだぞ！私が！私だけがあの失われた法術を復活させられる
のだ！私に協力するなら・・・・・。」

「お前に禁書のありかを教えたのは誰だ？サリエル。」
サリエルは見覚えのない少女に声をかけられていぶかしげな目を向けた。

「・・・・・お前の古文書を解くのに必要だった禁書だ。」
「なぜお前がそんなことを・・・」
「質問に答えろ！」
サリエルの首筋にレーヴェの槍が突きつけられる。
「・・・・・・・・宰相閣下だ。」

「フサスラか・・・・・・。」

「狙う首がひとつ増えたってことだな。」

レーヴェが殺気を抑えることができずに槍を構えた。
オレですら言葉を交わすだけで、非常な忍耐を必要としている。
だが、まだ聞くべきことが・・・・。

「わわ、私を殺すな！ええ、エルロイの居場所を知りたくはないのか？」

こら、てめ、何を口走りやがる。

「貴様・・・・いまさら・・・・・・。」
「エルロイの精神・・・・魂と言ったほうがいいか。それはとある遺跡に転送されているのだ。厳密な意味で、奴はまだ死んではいないのだよ。」
レーヴェがサリエルの胸倉に掴みかかる。
「それはどこだ！どこにある！？」

サリエルの顔が哂う。

「・・・・・・・・ケイロンの矢」

タイミングは完璧なはずだった。
レーヴェに隠れて死角に身を置き、
魔力を一切感知させぬ遺物による矢の一斉射撃。
それも転送系の術式だから、いかに達人といえども避けきれるものではない。

それが

いつの間にか張られていた具現防護結界によって全て弾き飛ばされていた。

「悪いがその手は通じないよ、サリエル。」

「どこまでも汚い男よ。」

オイゲンの憤怒をこめた呟きにもサリエルは反応しない。
ただ、オレを見つめて大口を開けたまま震えている。

「そんなまさか・・・・・・いや、・・・・・・あの禁呪、この魔力・・・・・信じられない！」

しまった！！

「お前か！お前なのか！どこまでもオレの邪魔をしやがって・・・！
ええ？エルロイ！！」

第十九話

「にゃ、にゃにを言ってるのかしりゃ？」

「・・・・・噛み噛みでございます。エルファシアさま・・・・・」

「・・・・・可愛いわ、エルちゃん。」

ううっ・・・・・・・恥ずかしい・・・・・・・。

サリエルの発した言葉は特大の衝撃波を私たちに叩きつけていた。

・・・・・・・・ダレカタスケテ

「どういうことか説明してもらおうか・・・・・。」

レーヴェさん、目が据わってマスヨ？

サリエルは得意気に鼻をひくつかせた。

こんな状況でさえ、自慢せずにはいられない自己顕示欲には頭が下がる。

「フリギュア新遺跡で発動された法術が転送系のものであることはわかっていた。魔法陣と魔術機械が失われたのは忌々しいが、発動した

魔力の痕跡を隠すことはできないから転送先を割り出すのは難しいことではなかった。もっとも国境を越えてしまったから追尾にひどく時間が

かかってしまったがね。」

「いい、いったいそれはどこだ！。」

レーヴェの目が血走ってきてるように見えるのは気のせいか？

・・・・・・・しかし不覚だったな。エステトラスが感づかれたのは、そういうわけか。
「エステトラスで迷彩魔術を施された遺跡を発見した時にはすでにもぬけの殻だったが・・・・・・それは逆に言えばもぬけの殻にした人間がいる
ということだ。では誰だ？・・・・・・それは精神を何らかのものに転送されたエルロイではないか、というのが私の推理だった。しかも、転送された
ものとはエノクが使用した不老不死の身体である可能性が高い。レーヴェとセイリアを生け捕りにするよう指示を出したのはお前を捕らえる
機会を狙っていたからだ。まさかこんなことになるとは思いもしなかったがな・・・・どうだ？エルロイ。」
確認するようにサリエルが視線を向ける。・・・・・・これはシラを切りとおせる状況じゃないな・・・・・。

「・・・・・もし、そうなら、何故レイガルドを狙う？オレを追えばすむことのはずだろう。」

「エルロイ、あの遺跡のなかで君は言ったね？ただ不老不死になるだけならどうにでもすることができると。」

「・・・・・・・・・ああ。」

背後でレーヴェとセリアが息を呑む音が聞こえたが、ここにいたっては仕方がない。

「ならば亜神になる、というのが解答とは言えんかね？」
「・・・・レイガルドにそれがあるとも思えんがな。」
亜神になるとは精神の階梯があがるということだ。いかに古代の魔

術知識をもってしてもそれがかなうとは信じられない。
「君の言いたいことはわかる。亜神というのは存在そのもののあり方が変わるということだ。しかし、何事にも例外はある・・・・。」
例外・・・・・・・・
私はそのひとつの例外に思い当たった。
「堕ちた英雄ジェイド・・・・・・。」
英雄と呼ばれ、3人目の亜神となるのを目前にして残される妻への嫉妬から精神の均衡を失った狂える亜神。
「流石だよ、エルロイ。亜神でありながら、現世に留まることはできる。ならばあとは制御だ。」
なんてバカなことを考えるんだ。
狂人め。
人は自分に都合の良いものだけを見る・・・・・・・ああ！師匠、その通りですよ！
「その様子だとわかったようだね？精神を転送することができるのは君が生きた見本だ。ジェイドの封印を解きその精神を我が物にする。
それが我々の最終目的だ。」
・・・・・・吐き気がする。
自分で言っているではないか、存在のあり方が違うと。その違う存在に転送された生身の精神は無事にすむのか？
「・・・・・・残念だったな。こうしてワルキアへの侵攻が頓挫した以上それもご破算というわけだ。」

「頓挫？頓挫などしているものかね。侵攻ルートはここだけではない。」
「・・・・・・・強がるのもいい加減にしろ。ワルキアの騎士団はお前が妄想するほどヤワじゃない。」

サリエルが哂う。
「どんな勇猛な騎士団でも頭を失ってしまえば脆いものだよ。・・・・・そうそう、今夜で竜の実りは終わりだったね。」

のどが渇いた。
何故だろう。こんなに嫌な予感がするのは。
おれの勘はずっと警鐘を鳴らしていたのに復讐に酔って気づかずにいた、そんな気がしてしまうのは。

「・・・・・今年の優勝者は黒衣の剣士だそうだよ。君も知ってるだろう、エルロイ。」

〜噂じゃ裏切り者が潜入したって話だ〜

「優勝者は公王陛下にじきじきに表彰される。」

〜選択肢は二つ、首都の騒乱を止めるか、サリエルがいる先遣隊の足止めをするか〜

・・・・・・・そして宣告が下る。

「優勝者の名はウィンゲート。こう言ったほうが君にはわかりやすいかね？ダーダルスの黒い死神、と。」

第二十話

ダーダルスの黒い死神
かつてギルドに所属したものの、要人暗殺にからんで、オレが除名処分にした男だった。
今では闇影術という稀少な技を用いる大陸最高の暗殺者として名をはせている。

「公王を失ってもワルキアは健在だろうかね？」

・・・・・・健在のはずがなかった。
賢王として名高いファルケン王だが、正妃が子宝に恵まれず庶子の公子が2人、後継者の座を求めて勢力争いを繰り広げていた。
公王が崩御されたとあれば、第一公子と第二公子の間で下手をすれば内乱になりかねない。

「君たちではもう止められんよ。まあ、私に協力するなら悪いようには・・・・・・。」

言いたかったのは結局それか。
まったく、自分のうかつさに嫌気がさす。
オイゲンの疑いが解けた時に気を抜くべきではなかった。
こいつらが王都に冒険者くずれを潜入させた程度で満足するはずがないではないかー！

「・・・・・・・カリウス、遺跡を物理的に破壊することは可能なの・・・・・？」
「エルファシア様の魔力をもってしてもあれを破壊するのは不可能

ですな。あれの機能は物質ではなく、固定された魔術術式そのものにありますので・・・・・。」
エノクなら古代魔術の術式介入でも出来たのだろうが・・・・・私はただ、魔力が高いだけの魔術師にすぎない。

「・・・・しかし、ファルケン・ノストラム・デ・ワルキアが遺跡の管理人であったワルキア家の子孫であるなら、遺跡の発現キーだけでなく、消去キーを継承している可能性がありますな。」

「な、なんだと!?聞いてないぞ、そんな話は!」
余裕の表情で勝ち誇っていたサリエルの顔から血の気が引く。
「・・・・・レーヴェ、お前公子に面識は?」
「第一公子ベルシュタイン殿下なら、旧知だぜ。」
「・・・・たしか第一公子は立太子を済ませたばかりだったな・・・・組む相手としては悪くない。」

「なっ!やめろ!あの遺跡は他の遺跡とはわけが違うんだぞ!それに・・・・もう間に合わん!」

「・・・・・どういう意味だ?」
そういいながら私は既にサリエルの答えが予想できていた。
どこまで狡猾な奴だ・・・・いや、フサスラの指示・・・・なのか?

「フリギュアは第二公子フランゲルグ殿下に支援を与えている。王都に潜入したギルドの傭兵も同様だ。今頃は第二公子派の貴族たちに追い詰められているころだろうて。」

「たしかに追い詰められはしてるかもしれんが・・・・・」
レーヴェが不敵に笑う。自信に満ち溢れた、強者にしか持ちえぬ獰

猛な笑みが惚れ惚れするほど似合っていた。

・・・・・見とれてない・・・見とれてないぞ・・・！

それだけは認めちゃいけない。私にとって譲れないところだ。

「・・・・・・・とりあえず手もなくひねられちまうってことはないはずだぜ？なんせあそこにはエルウィンの旦那がいるからな。」

「それってもしかして・・・・・竜殺しエルウィン？」

「ああ」

「き、聞いとらんぞ！そんなこと！」

竜殺しエルウィン

レーヴェも私も竜殺しの称号は手にしているが、エルウィンが倒した古代竜は強さのケタが違う。

個人戦闘に関する限り大陸でも最強の男だ。

彼が手にする愛刀、火吹き竜の吐息レーヴァテインを携えた冒険の数々のサーガを聞いては私も胸を熱くさせたものだった。

かなり前に現役を引退したと聞いていたが・・・・・

「ガスコンって偽名を使ってるからな・・・・公子の剣術指南役してるよ。実は公子の母親は・・・エルウィンの旦那の姪なんだ。」

千人の精鋭の応援を得たに等しいな、それは。

「いい、いくら竜殺しエルウィンでも所詮1人の力などたかがしれている・・・・いや、そもそもあの遺跡の価値を考えれば敵対しようなどという気も起きぬはずなのに・・・・何を考えとるんだ！貴様らは！」

「とりあえず黙っとけ。」

レーヴェの槍の石突の一撃で、サリエルは声もなく昏倒した。
「・・・・・・公子への手土産に、今だけは生かしといてやる。」
確かに、事がことだけに生き証人は必要だ。

「それじゃあ、一刻も早く王都に戻って・・・・」

「その前にやることがあるだろう。」

レーヴェがおもむろに両手を広げる。
・・・・・・・なんだろうと思って眺めていたら・・・・・・・

ムギュッ

・・・・・・・抱きしめられていた。

「とわっ・・・・・・や・・・・・・ななな・・・・・・・なに？」
全身の血が全て顔に集まってきたような気がする。
レーヴェの胸がとてつもなく広い。
女性の身体になって男性に抱きしめられるのは初めてだ。こんなに男の胸は頼もしく感じられるものだったろうか？

「生きてたなら生きてたといいやがれ、馬鹿野郎が・・・・・！」

「・・・・・・すまん。」
搾り出すようなレーヴェの声に胸が疼く。
「・・・・・さっきも聞いたと思うが・・・・今のオレはフリギュアが狙う機密そのものだ。・・・・・いや、エノクの不老不死の身体を受け継いだ以上大陸中の亡者からこれからも狙われるハメになるだろう。これ以上・・・・みんなに迷惑をかけたくなかったんだ・

・・・・ごめん。」

「エルちゃんのことは既にサリエルにバレていたわ。・・・・・隠したところで・・・意味ないと思うの。」

振り返るとセイリアが微笑っていた。

ロバートも、フリッガも、オイゲンも、レインも、アルラウネも、ギョームも、苦笑しながら頷いている。

姿形は変わったけれど、みんなはまた私を受け入れてくれる・・・・・？

「私・・・・またみんなといて・・・・・・いいのかな？」

レーヴェの抱きしめる指先に力がこもった。

「もう・・・・二度と離すかよ・・・・！」

「・・・・レーヴェ？」

「もう、あんな後悔をするのは二度とごめんだ！エルロイ、・・・・・いや、今はエルファシアか・・・・・もうオレは自分を偽ることはしない・・・・・・

エルファシア！オレとつきあってくれ！結婚を前提として！！」

「「「「「はあああああああああ？？？」」」」」

第二十一話

「そ、そんな！だって私・・・・・・これでも元男だよ？」

もう・・・・・・レーヴェの顔が見れない。

きっとトマトより今の私は赤い顔をしているだろう。生涯最初のプロポーズの相手が・・・・・・男って・・・・・・いや、今は女だからいいのか？

「問題ない。なぜならおれはエルファシアが男のころから愛していたからな。」

「なにいいいいいいいいい！！！」

レーヴェ・・・・・お前・・・いつからそんな目でオレを見てたんだ！

何故かオイゲンが頬を染めて呟いた。

「・・・・・・・・友情がいつしか念縁となって愛情にかわる・・・・・武門の間では良くあることでござる。」

よくあるのか？？

そこで頬を染めてるロバート！お前も！お前もなのか！？

もうどこから突っ込んでいいのかわからないがただ、生存本能がレーヴェの胸を突き放させた。

「雷華」

刹那、レーヴェと私の間に特大の雷撃が落ちる。
セイリアさん、何故に私まで狙われるですか？

「・・・・・・・・ロリコンは殲滅・・・・・・・ホモも殲滅・・・・・・・。」
・・・・・・・・明らかにイっちゃった目をしたセイリアが呪文のように独語してました。

「セ、セイリアってば、落ち着いて～！！」
フリッガが後ろから羽交い絞めにセイリアを抑えた。えらいぞ、フリッガ！

「離してフリッガ。ロリコンは殲滅しても罪にはならないのよ。」
・・・・・それはないから。気分的には賛成したいとこだけど。

「こら！エルってば黄昏てないでセイリアをとめなさ～い！！」
いや、そうは言われても、私にセイリアさんを止められるとでも・・・？

「あ、あのですね、セイリア姉さん落ち着いて・・・・・・・。」
「エルちゃん・・・・・・」
「は、はひ」
いかん、怖すぎて舌が回らない。

「・・・・・・・・今でも私をほんの少しでもいい、好きでいてく

れるなら、私と付き合って頂戴。」
「え・・・・えぇ・・・。」
セイリアへの恋情は、今も変わらず胸のうちにあった。
そんなすがるような目で顔を覗き込まれたら・・・・・胸が痛い・・・・・。
ん・・・・・？セイリアさん、なんか顔が近くないですか・・・？

ブチュウゥゥゥゥゥゥ！！！

「「「「「「な！！！」」」」」」

ってちょっと待ってぇぇぇぇ！！こ、心の準備が・・・・・！
赤ん坊の肌のように柔らかいセイリアの唇からなんとか逃げようと身をよじるが・・・・・半ば強引にセイリアの舌が私の唇を割って入ってくると
・・・・・・・・全身を貫く甘い痺れに、私はあえなく陥落した。

キスってこんなに気持ちのいいものだったっけ？

「セイリア、エル危な～い！」
横合いからフリッガに突き飛ばされると、さっきまで2人がいた場所を遠当ての衝撃波が通り過ぎていく。
だからなんで私まで狙われるのよ？

「今更だぞ、セイリア！以前ならエルロイとお前は男と女だったかもしれんが、今はオレとエルファシアが男と女！惹かれあうのは男と女というの
が世の理というものだ！！というかオレのエルロイから離れろ、こ

のレ○！」

「甘いわね・・・・・エルロイは私を好いてくれたわ・・・・そして私はエルちゃんを愛してる・・・・お互いに好きあう者が結ばれることこそ世の理と
いうものよ。だいたい女同士でも妊娠する秘術を会得してるからなんの問題もないわ！」

「くっ・・・・・どうやら決着をつける必要がありそうだな・・・・・。」

「安心して・・・苦痛を感じる間もなく逝かせてあげる・・・・・。」

「お前らいい加減にしろ！！」

久しぶりにキレたぞ。色々ありすぎて脳の処理が落ち着いていかんけど。

「だいたい私の気持ちも聞かずに勝手に話を進めてるんじゃない！
レーヴェもこんな場所でプロポーズするなんてムードないよ！
セイリアも無理やりベロチューするなんてサイテーだよ！・・・・・・
でも、仲間同士で傷つけあってるのが一番サイテーだよ・・・・バカ・・・・・。」

あれ？何言ってるんだかわかんなくなってきたぞ。っていうか涙が溢れてとまんない・・・・・・・。
「・・・・二人とも大嫌い・・・・絶交だよ・・・・・・・・バカァ・・・・・。」
なんだかむしょうに泣けてきた。

泣くことで自分の気持ちと折り合いをつけているような・・・そんな気持ち。自分が男の時には感じなかった気持ち。

「・・・・・・・悪かった・・・・・・もう無理強いはしない。エルファシアの気持ちが決まるまでは。」

「・・・・・私も・・・・やりすぎたわ・・・・・・・。」

「今の私はエルロイでもあり、エルファシアでもあるんだから・・・・これ以上混乱するようなことしないで・・・・せめて当分の間は・・・・。」

「わかった・・・。」

（エルロイはまだ女になったばかりで他人には心を開けないはず・・・ここはゆっくりとオレ好みに刷り込むのも悪くはない・・・・）

「わかったわ・・・・。」

（エルちゃんに嫌われたら元も子もないわ・・・・今は頼れる姉さんとして信頼を勝ち取るのが上策・・・・）

ボン！

「もう～なんて可愛いのエルファシア様ったら！！そんな、そんな可愛い仕草されたら、私もうたまりませんわ～！」

「「な！」」

カーチャさんが胸に私を抱え込んで頬擦りをし始めた。

・・・・・・・せっかく場が収まったと思ったのに・・・・・・

一転してにわかに立ち上る嫉妬の嵐・・・・。

もう・・・・・

神様のばかぁぁぁぁぁ！！

第二十二話

パチパチ・・・・・・・
薪の爆ぜる音が暗闇のなかに響く。
街道が封鎖されている都合上、私たちは止む無くダリムの森を大きく迂回してレイガルド王城の裏手に出ようとしていた。
レイガルド王城はラナート山脈の西南の尾根の端に位置している。
俗に言う後ろ堅固の城というやつだ。
まともな兵なら近付くこともできないが、私たちはまともな兵ではない。
妖魔の徘徊するラナート山脈といえども私たちにとっては庭の散歩のようなものだ。
しかし、ここで問題が発生して今は野営の準備中である・・・・・・・。

「冷えるぞ。これでも掛けとけ。」
レーヴェが自分の外套を私の肩に優しく掛けてくれる。
・・・・・・・なんだか死ぬほど恥ずかしい・・・・・・
沸騰して湯気をあげんばかりになりながら、私はわずかに頷くことで謝意を伝える。

「エルちゃん、このハーブを飲むと少し気分が落ち着くわ。」
「・・・・・・ありがとう・・・・セイリア・・・・・。」

「エルファシア様は対魔力が大きいので・・・・・私の治癒術では効き目が弱いのが残念ですわ・・・・・。」
「・・・・・・・そんなことない・・・・・・・十分助かってるよカーチャさん・・・・・。」

・・・・・・ごめんなさい・・・・・・優しくされればされるほど恥ずかしいって、これなんの拷問ですか？

そんなわけで私は女の子の日真っ最中でした！！

いつか来るとは思ってたけど再会の当日ってどういこと！？
しかもスカートのお尻のほうまで真っ赤のなってるのをレーヴェに発見されるって、なんの羞恥プレイよ！？
・・・・・・・お腹も痛いし・・・・・・・・。

それにしてもこのお腹のなかで何かが這い回ってるような感覚は元男にはきつい・・・・・。
思わずセイリアたちを尊敬してしまう。
レインが偵察に行ってくれてるからいいようなものの、この一刻を争う時に私は何をやってるんだろう？

「眉間に皺が寄ってるわよ。」
額をセイリアにこづかれた。
「こういう日はマイナス思考になりがちだから本当は何もしないで寝てしまうのが一番なんだけど・・・・」
あう・・・・見抜かれてる・・・・・・

「そうだわ！お風呂に入ってさっぱりしたら気が晴れるかも！」

「それは素晴らしい考えだわ！」

「ってちょっとセイリアにカーチャさん、いったい何言い出すの？！」

ここ、ダリムの森だよね？
まさかこんな森の奥深くに宿があるなんて冗談は・・・・・

「この私にかかれば小川の水を沸かすくらいどうということもないわ！」
「そして私の地操術をもってすれば小川の一部を囲い込むなど造作もないこと！」
ってなんでそんなに息がぴったりなんですか貴女たち！！

「身体の芯から温まればお腹の痛みも和らぐわ。ここはひとつ女同士の交流を深めましょう！」
「セイリア・・・汚いぞ、それが狙いか！！」
「あら、レーヴェ、あなたまさかエルちゃんと一緒に入る気じゃないでしょうね？そんなセクハラ許さないわよ！」
「え・・・・・う・・・・・・・・・／／／」
不覚にもレーヴェと入浴する自分を想像してしまって、また頭から蒸気が噴きあがる。
何考えてるの私ってばーっ！！

「うふふふ・・・・・エルちゃんの背中は私が流してあげるわ・・・・・・。」
不意に後ろからセイリアに抱きすくめられる。セイリアの豊かな胸が背中に押しつけられて、また私の顔の表面温度があがった。
・・・・・この人たち本当に私の身体の具合を心配してくれてるのかしら・・・・

「私一人で入りますから！！」

「ええーっ！？」
「そんなー！」

「覗いたら轟雷を当てますからそのつもりで！」

・・・・・・多分よほど恐ろしい形相をしていたのだろう。
セイリアやカーチャさんばかりかフリッガやオイゲンまで固まってしまっていた。

・・
・・・・
・・・・・・・
「ふう・・・・・・・・・。」
セイリアの言ってたことは正解だった。
肩まで湯につかって身体が温まってくると、うそのようにお腹の痛みがひいていく。
念のため周りを見渡してみるが、視線は感じない。
一応魔力を走査する。カーチャさんあたりが遠視している可能性があるからだ。
「・・・・・どうやら大丈夫か・・・・・・・。」

ちゃぷん・・・
火照った顔をさらに口まで湯につける。

恥ずかしい・・・・・

生理になったことを知られたのが恥ずかしい
初めての生理痛にみんなが気を遣ってくれるのが恥ずかしい
・・・・セイリアとレーヴェが好意を隠そうともせず私に優しいのが死ぬほど恥ずかしい

「どうしちゃったの・・・・・私・・・・・・・／／／。」

ガサリ

「誰！？」

「・・・・・・ん？ってエルファシアじゃねえか・・・・・・ずいぶんと乙なことしてるなあ・・・・・。」
濃緑の装束に身を包んだレインがそこにいた。

「・・・・・き・・・・・」

「それじゃオレは偵察の結果報せてくるからよ。・・・・いやあ・・・眼福、眼福。」

「きゃあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

「レイン！貴様ぁー！」

「へっ？」

「エルちゃんの玉の肌をみたものは滅殺！！」

「な！」

「エルファシアさま、もう可愛いすぎます～！」

「はうっ！？」

「みぎゃあああああ！！！」

「天空より来たれ輝閃の使者。風のファロンの名の下に雲よりつどいて我が敵を撃て。轟雷！！」

ズドゴォォォォ！！

・・・・この2人に身を任せるのは私の貞操が危険すぎるわ。

・・・・・・・もう少し自分の恋愛考え直そうかしら・・・・・・・

それより・・・・・・これから敵中突破して王城に突入って・・・・・・・・・・・できるのかしら？

「え・・・エルちゃん・・・・ひどい・・・・。」

「雷華」

「うきょぉぉぉ！」

ガクッ

セイリアの失神を確認して私は着替えに手を伸ばした。

・・・・・死屍累々・・・・

身体のあちこちから煙をあげて痙攣しているのぞき魔たちのうえを冷たい夜風が吹き抜けていった・・・・。

第二十三話

はぁぁぁぁぁぁぁぁ・・・・・・・
ため息がもれる。
どうにか女性特有の痛みにも慣れてきたし、身体も動く。

そんなことを言っても2日目はつらいのですよ!

なんだか肌が敏感になっててセイリアに抱きつかれただけでも、なんだか色っぽい声がでちゃうし・・・・／／／
いけない、気を引き締めないと・・・・
なにせもう王城は目と鼻の先なのだから・・・・・

「城下に約4万ってとこだな。」
レーヴェが王城を包囲する兵士たちを一瞥して言った。
「フリギュア3万ワルキア1万ってとこか、思った以上にワルキアの兵が取り込まれてるな・・・・・レーヴェ、大丈夫か?公子様は人望が薄そう
だが・・・・・。」
「いや・・・・母親の身分が低いから貴族どもには人気がないが・・・近衛騎士団がほぼ全員味方しているってことはそれなりのものがあるって
ことさ・・・・・。ワルキアの近衛はプライドが高いからな。」

「・・・・・なるほど。」
近衛全軍が篭城しているとしてその数は五千程度・・・・・よくもっているというべきだろう。流石大陸最強を名乗るだけのことはある。
「・・・・とはいえ、情勢はよくないわよ。貴族に支持が薄いってことはこの先敵の兵力が増えることはあっても減ることはないんだから。」
フリッガが首を振る。
・・・・・・勝ち目がない戦はしないのが冒険者の鉄則だから無理もない。

「ところがそうでもないんだな。確かに第一公子は貴族に人気がないが・・・・・フリギュアはもっと人気がないのさ。もともとフリギュアは敵であって
共に戦っている今の状態のほうがおかしいんだ。貴族どもだってフリギュアの力なんか借りたくないのが本音さ。」
「・・・・・すると模様眺めしている貴族が動く確率は低い、というわけですな・・・・・。」
　重々しい口調でオイゲンが頷く。

「仲間割れを期待して持久するのは考え物だぞ。相手は手段を選んじゃくれないんだ。公王がどうやって殺されたかわかるだろう？」
もっとも竜殺しエルウィンの警護をかいくぐって公子を暗殺するのは至難の業だろうが・・・・・。
「じゃあ、どうやって勝つつもりなのよ？」
フリッガが口を尖らせて言った。
まあ正直遺跡さえ破壊できればフリギュア相手に勝つ必要はないんだが・・・・・それじゃ公子の協力が得られないからな。
「戦に一番必要なものってなんだと思う？フリッガ。」
「・・・・・腕？」

「単純でお前らしい意見だが、戦ってのはな・・・・・・・士気でやるもんさ！それを策におぼれたバカに教育してやるとしようぜ。」

「感謝しろよ。偵察のついでにこれだけ集めるのにオレがどれだけ苦労したか・・・・・。」
レインがジト目で睨んできた。・・・・・・・こいつまだ風呂のぞきのこと根に持ってやがる。

ドゴォ！！

「作戦を考えたエルちゃんのほうがえらいに決まってるでしょ！この下僕！」
「エルファシア様のお肌を覗いて命があったことにあなたこそ感謝なさい！」

「・・・・・・・ありがとうございます・・・・・・。」

賢明だよ、レイン。この女性陣には逆らうだけ無駄だとオレも思う。

「それにしても・・・・よく思いついたな、こんな作戦・・・・・・・・・。」
どうやら着替えを終えたらしいレーヴェの声に振り返って・・・・・
私は目を見張った。

神聖ベルトラン教国で竜殺しだけに下賜される儀礼服
中央に大きく竜首が描かれ、その竜首の前を大振りの騎士剣が交差している。
全体に黒と金の刺繍が施された絢爛豪華な礼装にレーヴェの男ぶりは負けるどころか、ますます磨かれていくようであった。

悔しいが格好いい。
後ろに従えた白馬ともあいまって、一幅の絵画のような印象である。

「見違えたか？エル？」

「うん・・・・・・・格好いいよ、レーヴェ・・・・・・」

言ってしまって後悔した。
何言ってるの私ーっ／／／！

「おおっ！これは遂にオレの愛を受け入れる気になってくれたのか？！エル！！」

「なるか！！」

あ、ちょっとセイリアさん。せっかくの貴重な衣装なので燃やすのは勘弁してください。

「・・・・・・・まったく、こんな格好をするのは何年ぶりだ？」
ロバートもまた正装だった。
真紅に銀糸で短剣が描かれたロバートの故郷の民族衣装であるらしいそれは、ロバートの巨体によくあっていてなんとも目立つことおびただしい。
オイゲンも目立つことにかけては負けていない。
黒と白のコントラストが特徴的なその衣装は東方大陸からシュワルツェン抜刀流に伝来した家紋つきハカマというものらしい。
こうしてみるとオイゲンの湾刀によく似合っている。
ギョームはゴラス大神殿の司祭服だ。豪奢な造りなのだが他が特異すぎるので一番まともに見えた。

「それじゃあ私たちも着替えるとしますか！」
アルラウネが嬉々とした笑みを浮かべて私の手をとった。
・・・・・・・女だなあ、アルラウネ・・・
「・・・・・・・言っておくけど覗いたら殺すから・・・・・・・・・。」
先日の惨劇を思い出したらしい。真っ青な顔をしてこくこくとうなづくレーヴェとレインがそこにいた。

「ちょっと・・・・・・」
「これって・・・・・・・」
「予想以上だわ・・・・・・・」
「エルファシア様〜」

フリッガ、アルラウネ、セイリアたち女性陣がよろめきながら現れると、どこか恍惚となっている女性陣の表情に男性陣が不審の目を向けた。
カーチャは鼻血を噴いて失神したもよう。

セイリア、フリッガ、アルラウネはそれぞれ水色、緑色、薄紅色のドレスに身を包んでおり、その健康的な肌を惜しげもなくさらしていた。
3人とも並外れた美貌を持つだけに非常に華やかで思わず嘆息したくなる光景なのだが、いかんせん3人の挙動不審さがそれを台無しにしていた。

「自分から言い出しておいてなんなんだけど・・・・・・・やめない？これ。」

「「「ダメよ!!!」」」

「うううう・・・・・・・恥ずかしいよ・・・・・・」

・・・・・・・・・・男性陣が息を呑むのがわかった。
いや、若干一名悶えてるのがいるが見なかったことにしよう。

私の衣装は純白であつらえた絹のドレスだった。
薄絹でしつらえた部分は肌の色が透けてしまうので、結果としてひどく露出の多い印象である。
身体のラインがはっきりとわかるシンプルなデザインに真紅のルビーの首飾りがアクセントを添え、ご丁寧に私の瞳の色にあわせたマリンブルーの
サークレットまで用意されていた。
・・・・・・着飾る、という経験のない私にとってこの恥ずかしさは先日入浴を覗かれたときとなんら変わるものではなかった。

・・・・・・なんだかみんな挙動不審なんだけど・・・・やっぱり変なのかな?元男の私なんかには違和感あるとか・・・・・・
比較的冷静そうなオイゲンに向かって私は尋ねてみることにした。

「・・・・・・・・ねえ・・・・・・やっぱり似合ってない・・・・・・かな?///」

「そそそ、そんなつぶらな瞳で上目づかいに見つめられたうえ、小首などかしげられたら・・・某は・・・某はーっ！！！」

何故か壊れていた。

「私たちは最終兵器を手に入れたかもしれないわ・・・・・」
「確かに・・・・今のエルちゃんに攻撃できる精神力は人間にはないわ！」
「そもそも敵対する気力自体なくなるよね・・・・・」

「・・・・なんだか似合ってないみたいだから脱ぐね。」

「「「似合ってるわ！！！」」」

「なら、なんでみんな私から視線そらすのさ」

「「「だって眩しすぎるんだもの！！！」」」

私にはみんなの考えてることがわかんないよ・・・・。
こんなんで私の考えた視覚心理戦・・・・・大丈夫かな？

第二十四話

朝焼けがまだ美しい未明の時間にその集団は現れた。
先頭を行くのは白馬にまたがった竜殺しの騎士である。
漆黒に金がきらめく竜殺しにしかまとう資格のない礼装は、この男が、あの竜をも上回る武量を持つ証であった。
青白い魔力を帯びた槍先は竜の鱗を使用した竜器であることを教えている。
その堂々たる体躯。
威風を払う瞳。
精悍でかつ意志の強そうな容貌は男なら誰もが一度は憧れる英雄のそれだった。

まだ夢の中にいるのかと目をこする兵士の前を騎馬が行く。
英雄の左右に控えるように佇むのは巨躯の黒馬と馬に負けぬほど大きな二人の戦士

人一人の上半身ほどはありそうな巨大な戦斧を肩に担いでいるのは巨躯と強力で有名なハシュガルの山岳民族の衣装を着た男で
樽ほどもありそうな戦槌を構える男は戦の神トールを祭るゴラス大神殿の司祭服を纏っていた。
いったい何人分の膂力があればあの人間離れした武器を扱えるものか・・・・兵士たちは相変わらず自分たちの目を信じられずにいた。

その後ろに三人の美女が続いている。
花をイメージしたものらしい水色、緑色、薄紅色のドレスを優雅に

着こなした様子はさながら上級貴族の舞踏会である。
たおやかな黒髪に菫色の瞳をしたガラス細工のような繊細な容貌をもった女性もいれば、短髪で生き生きとした大きな瞳が印象的な小柄でスレンダーな女性もいる。銀髪に鳶色の瞳で豊満な身体をしたひどく妖艶な女性までいた。
それぞれに咲き競う種々の大輪の華であった。
あまりに非現実的な美しさに兵士たちは、ここが戦場であることを忘れた。

しかし黄金の衝撃が甘い夢に酔う兵士たちを強制的に夢から覚まさせた。

・・・・・・3人の男を従えた光の天女が、地上に舞い降りた瞬間だった。

稜線から上がり始めた朝日が、腰まで伸びた金髪に反射してまばゆい光のプリズムを作り出していた。
純白のドレスはまだ少女と女の境界にありそうなたおやかな曲線を優美に描いている。
ゆったりとつくられた薄絹は風に揺られてたなびき、天女がまるで雲をまとっているように感じさせた。
磁器のようになめらかで白い肌は到底人間のものとは思われない。
やや薄く頬が紅潮している様子がまた、少女の可憐さをひきたててやまなかった。

だが、兵士たちの意識を覚まさせたのは少女のそんな外見的なものではない。

その身のうちから溢れる膨大な魔力
マリンブルーの瞳から放たれる犯しがたい重圧に
神々に対して人が抱く原初の畏れ・・・・・そんな畏敬に等しい感情に突き動かされた兵士たちは
本人の意思とは関係なく
ごく当たり前のような動作で、少女の前に膝を折った。

無人の野を往くように騎馬たちがいく。
４万を超えようとする兵士たちがしわぶきひとつしない。
城下にひしめいていた人垣が、自重に耐えられなかった氷のように真っ二つに割れ
ゆっくりと威風を払いながら人馬が行く。

いつしか城門の前までやってきた竜殺しの騎士は悠然と下馬すると、槍をとって石突を大地に打ち付けた。

「吾はワルキアの産にて、竜殺しの騎士にしてオスティアの英雄騎士レーヴェ・ブロンベルグ・デ・パデリアなり！
ワルキアの正統を守護し、フリギュアの不義を討たんがため、ベルシュタイン殿下にお味方申し上げる！
公国近衛騎士団の同志諸兄に告ぐ。貴殿らの敵を我が敵に。貴殿らの宝を我が宝に。貴殿らの父を我らが父に。

貴殿らの息子を我らが息子にし、今こそこの槍を捧げよう！・・・・・・いざ、開門！！」

「・・・・・いかん！敵だ！」

フリギュアの指揮官らしき男がいち早く立ち直って叫んだ。

「轟雷」

あわてて剣を手に取る兵士たちの前に、特大の雷撃が落とされる。

「汝らに告げる・・・・・・。」

まるで凍りついたかのように兵士たちの動きが止まった。

マリンブルーの瞳に呪縛されたかのように。

「妾は復讐を司る女神ネメシスの娘エルファシア・・・・・・・・汝らに告げる。ワルキア公国公王を暗殺せしはフリギュアの陰謀に有り。

速く去るがよい、兵士たちよ。正しき怒りの断罪が汝らを打ち滅ぼしてしまう前に。復讐の魔女の牙が、汝らの血を飲み干してしまう前に

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。」

重々しい低音を響かせて開いた城門の中に騎馬たちが消えていく。

誰もそれを咎めようとするものはいない。

・・・・・・・・・・・その日、伝説の幕があがった。

第二十五話

オオオオオオオオオオオオオオオッ！

レイガルドの城内に鬨の声が響き渡っている

よもやの援軍
そして神意によって自分たちの正義を認められたという高揚感
篭城を続ける兵士たちにとって、これほど士気をあげさせるものもなかったであろう。

だが、そんな奇跡を演出した肝心の勇者たちは・・・・・

「「「「「疲れた～～～！！！」」」」」

いい感じにふにゃけていた。

ひとまず馬を繋いで城内の貴賓室らしき部屋に通されると
「・・・・・・まったく便りのひとつもよこさずに何をしてるかと思えば・・・・・・無茶をしたな、レーヴェ。」
左右に護衛を従えて笑顔の青年が現れた。
やんちゃそうな大きめの瞳が好奇心に揺れている。
おそらく彼がワルキア公国第一公子ベルシュタインだろう。
竜殺しエルウィンが鍛えただけあって、引き締まった猫科の猛獣を思わせるしなやかな肢体をしている。

容姿も貴人らしい涼やかな顔立ちで、いささか童顔だが上等の部類に入るだろう。
「しかしおかしいな？オレが受けた報告では竜殺しの来訪ではなく、女神の巫女が参られたということだったの・・・・だ・・・が・・・・」
大きく見開かれた公子と視線が合う。
「あ、あの・・・・・私たちは・・・・・」
説明しようと思ったときには
「おお！ようこそおいでくださった！」
目にも止まらぬ速さで手を握られ、腰に腕を回されていた。はやっ！！

「エルファシアから手を放しやがれ！この好色一代男！」
「エルちゃんに手をだすものは誰であろうと滅殺・・・・・・！」
「貴女のような佳人にお会いできるとは・・・・このベルシュタイン、美の女神マーヴェルの恩寵に心から感謝いたしますぞ！」

「「話を聞けよ！！」」

「・・・・・・恋人同士の語らいを邪魔するのは無粋と思わんか？友よ・・・・」
「恋人じゃねえしエルファシアに手を出す奴なんか友じゃねえぇぇぇぇ！！」
「お前・・・・変わったな・・・・・・・。」
確かに変わったよね。私もそう思う。
なんというか、前より・・・・・・・・・・可愛くなった？いや、

それはちょっと・・・・・・・・／／／

「エルちゃん・・・・・　すっごく可愛いのに・・・・なんだかとってもむかつくわ・・・・・・。」

ギクッ！！

セイリアさん、私は別にレーヴェが可愛いとか、そういう可愛いとこ見せてくれるようになったのがうれしいとか思ってないですよ？・・・・・・・・・・・・・・ほ、本当デスヨ？

「美しいお嬢さん・・・・・・私がいうのもなんですが、レーヴェの奴は一昔前はそれは女癖が悪くてひどい扱いをしていたのですよ？」

ムカッ

「・・・・・・・・・・・・私には関係ないですから・・・・」

だいたい、そのころ私は男だったし・・・・・・いやいや、今は女だから許せないとかいうわけじゃなくて・・／／／

「だ、そうだぞ？レーヴェ。」

「ちがう・・・・ちがうんだ・・・・女じゃなくて、エルが特別なんであって、・・・くそ！だからこいつに会うのは嫌だったんだ・・・・。」

あ、座り込んで床をつつき始めた。

「・・・・・・なんか、レーヴェ遊ばれてない？」

「レーヴェ殿がワルキア公国騎士団に入らなかったわけがわかったような気がするでござる・・・・。」

「まあ、薄情な友をからかうのはこれくらいにしておいて・・・・・まずはみなさんにワルキア公国を代表して御礼を申し上げる。」

ベルシュタインの童顔な顔が、表情の読みずらい貴人の顔になった。
「この重囲の中をたった十人で突破した壮挙は長くこのワルキアに語り継がれることでしょう。我が将兵のすべてのものが貴方方に対して
賛辞と祝福を惜しまぬに違いありませぬ。」
だが、と言って公子は私の手を取るとそっと唇を寄せた。

「ななななな・・・・・・・・・／／／！！」

「実に可愛らしい女性ですな。・・・・・そう、私にはどうしても気にかかることがあるのですよ。なぜフリギュアがこうもなりふり構わずワルキアに
攻めてくるのか。・・・・・・・・その答えを期待しても良いのでしょうか？レディ・エルファシア。」

「「どうでもいいからその手を放せ！！」」

「本当に美しい手だ。マイスの磁器でもかほどに白く肌理も細やかな細工はできないでしょう・・・・・。」

「「だから話を聞けよ！！」」

流石に一国の指導者だけにレーヴェもセイリアもギリギリのところで自制してくれている。
でも、明らかにベルシュタインはそれを承知でからかっていた。
・・・・・思ったよりこの公子、油断ならないかも・・・・いろんな意味で・・・／／／

第二十六話

「ほお・・・ブロンベルグのひよっこが、生きておったか。」
「おやっさん・・・・そりゃねえよ・・・・・。」
公子の私室に案内された私たちを壮年の男性が出迎えた。
竜殺しエルウィン・・・・見たところ５０歳前後にしか見えないが７０歳は超えてるはずだ。
「・・・・おお！こりゃ別嬪さんじゃ！どれ、この爺に名を教えて下さらんか？」
いつの間にか手を握られていた。
・・・・・・・・・公子がどうしてああいう性格になったのかわかった気がする・・・・・・

「さて、本題に入りましょうか？」
テーブルに全員がついたタイミングで公子が私に水を向ける。
「・・・・・・・ことの始まりはフリギュアの新遺跡でエノクの異物が発見されたことでした・・・・・・。」
私はエノクの魔術身体に転送されたこと。
フリギュアの宰相フサスラが黒幕で、彼がレイガルドの地下遺跡を狙っていること。
レイガルドの地下遺跡は古代からの知識が保存されていること。
最終的に彼らは堕ちた亜神ジェイドを復活させ、その精神を我が物のしようとしていること。
その全てをベルシュタイン公子に説明した。

「なるほど・・・・・フリギュアの狙いがいったいどこにあるのか

疑問に思っていたが・・・ようやく謎が解けたよ。」
公子はしきりとうなづいていたが、ふと何かを思いついたように私を見た。
「しかし良かったのかい？レディ・エルファシア・・・・・私が地下遺跡の秘密を悪用したり、不老不死の君を捕らえて実験台にするかもしれない
とは考えなかったのかい？」
「・・・・・・どうせいつかは知れることです。・・・・・・それに・・・・・。」
「それに・・・？」
「レーヴェは殿下を友と呼んでいましたので・・・・・／／／」
別に特別なことを言ったつもりはないのに恥ずかしいのは何故だろう・・・・？

「くくくくっ・・・・・・・レーヴェ、ずいぶん見込まれたものだなあ・・・・・・。」
「・・・・・レーヴェ、ずるい・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・／／／」
どうやら本人はお空の住人になっているようだった。

「では貴重な情報を教えていただいた御礼に私もワルキア公王家に伝わる秘伝をお教えしよう。知ってのとおり、公王はその即位の儀式として
地下遺跡で初代公王の秘蹟を賜るのが習いとされている。これはエルファシアが言ったとり、初代の遺言が映像として遺跡に保存されている
からできることだ。」
やっぱり・・・カリウスの情報は正しかったか。
「エルファシアがそうであったようにここレイガルドのオペレータ

ーはワルキア王家に設定されているから、公王家の人間以外には動作させること
はできない。キーワードを知らない場合も同じだ。」
なるほど、そうすると問題なのは・・・・・・
「弟君はそのキーワードを知っておられるのか？」
・・・・・・・ということになるよな・・・・・・
「キーワードは基本的に太子のみに伝えられるものだ。・・・・・・
しかし失伝を防ぐために万が一のときは王室の廟堂の奥を開けばキーワードを
知ることができる。」
「その廟堂はどちらに・・・？」
「レイガルドの西方にある。・・・・・・反乱軍の司令部がおかれているところだ。」

・・・・・・それは最初から狙ったとしか思えないよ

「しかしキーワードを知ることができたとしても果たして敵の思うとおりになるものかどうか・・・・・・。」
「どういうことですか？」
「これは口伝でしか語られていないことだが・・・・初代公王の遺言以外の知識を引き出すことは禁じられていてね。何故だかわかるかい？」
公子の目がいたずらっぽく笑う。
ワル餓鬼がそのまま成長したようで憎めないのは人徳といったところだろうか。
「・・・・・古代魔術の知識に脳が耐えられぬからでございましょう・・・・・。」
「・・・・・正解。」
そうか、制御不能な莫大な情報量が一気に脳に流れ込んできたら・・・・・おそらくその人間の人格は崩壊してしまう。

「・・・なんだ、結局奴らの考えてることは絵に描いた餅ってことか？」
レーヴェが肩をすくめて呆れたように笑った。
「残念ながらそうとばかりも言えませぬ・・・・・。」
カリウスの言葉に公子も驚いたようだった。
「・・・・では・・・どうするというのだ？」
「知識さえ取得できれば人格を失い廃人となったとしても・・・・・そこから知識を吸い上げる外法はあります。ここまで仕組んだフリギュアの者たちが弟君の安否を気遣うとは思えますまい・・・・・・。」
むしろ喜んで生贄に差し出すだろうな・・・。
「そのようなことには・・・・させん。」
公子が拳を震わせながら立ち上がる。
「たとえこの身がどうなろうとも、フリギュアの思うとおりにだけは決してさせん。最後のときには・・・・滅びの言葉を使う。」
「滅びの言葉・・・・？」
「決して使ってはならぬキーワードだ。・・・・・このレイガルド遺跡の全術式を破壊する。」
カリウスが推理したとおり、やはり消去のキーは存在した。

第二十七話

声を微妙に震わせた公子らしからぬ強い口調には弟に寄せる想いがにじんでいた。
・・・・思ったより仲がいい兄弟だったんだな・・・・・・デキの悪い子ほど可愛いというやつかもしれないけど・・・・・・

「・・・・・・そんな深刻な面するなよ。似合ってないぜ？ベル」
レーヴェに軽くあしらわれて公子はいかにも嫌そうに眉を顰めた。
「・・・・・・たまにはお前も深刻そうな顔をしろ。この万年極楽トンボめ。」

「用は勝ちゃあいい話じゃねえか。簡単だろ？」
口の端を吊り上げて薄く笑う。
・・・・時折レーヴェが見せる不敵な笑み。
その笑みに秘められた獰猛な獣性と圧倒的なまでの矜持に、悔しいが毎回目を奪われてしまう。
かつての私が浮かべていたかもしれない男の笑み。
今は浮かべることのできない漢の笑み。

溜息をひとつ吐くと公子は笑いながらかぶりを振った。
「・・・・・・・・そうだな。せっかく勝利の女神がいてくれるのに辛気臭い顔をしていては申し訳が立たない。」

・・・・・・勝利の女神ってもしかして私ですか。
これは期待には応えるしかないな・・・・・・ほとんどはったりだけど。

「勝機は殿下の側にあります。今はフリギュアに協力しているワルキアの貴族たちにも公王の暗殺がフリギュアの手になるとわかれば協力を拒む
ものも少なからずいるでしょう。城下で息を潜める国民にも、傍観を決め込んでいる貴族たちにもベルシュタイン殿下こそが正統の後継者・・・・・・
という噂が広がるのは、もはや時間の問題です。心理的な楔はすでに打ち込みました・・・・・・あとは人的な衝撃を与えることで敵の士気は一気に
崩壊するでしょう。」
「・・・・・・人的な衝撃・・・・・・かい？」
「私たちは現ギルド長にしてフリギュアの宮廷魔術師サリエルを既に捕らえています。」

装備品の中に埋もれた大きな麻の袋を指差すと、ギクリと擬音が聞こえそうな不自然さで袋が揺れた。
自業自得とはいえ、この情景は哀れを誘うな・・・・・・。

「あはははははは！素晴らしい！まったく貴女という女性は！」
公子は豪快に笑い声をあげると・・・・・・唐突に私を抱きしめた。

・・・・・・はい？

「貴女はこのワルキアに降り立った正真正銘の勝利の女神だ！いや、勝利の女神より確実に美しい！この戦いが終わったら・・・・・・どうか我が妻に
なってはいただけませんか？レディ・・・・・・」

「ベル！てててててめぇ！それはオレんだ！！手を出すなあああああ

！！」

「・・・・違うわ！私のよ！！」

「私はまだ誰のものでもないわ！！」

レーヴェとセイリアが血相を変える様子を見て、また豪快に公子が笑う。

「やはり時には深刻そうな顔をすることも時には必要だなあ、レーヴェ？」

「やっぱりてめえなんか友じゃねえや！どちくしょおぉぉぉぉぉ！！」

からかわれた、と知って今にも血の涙を流さんばかりにレーヴェが慟哭する。

暴風レーヴェとも槍聖レーヴェとも呼ばれる二つ名持ちが形無しだった。

オイゲンが、ギョームが、ロバートが肩を震わせて笑う。

「仲間の不幸を笑うとはどういう了見だ！こんちくしょおぉぉぉぉ！！」

先ほど微笑みに思わず見惚れた男とも思われない様子に、私も声をあげて笑う。

笑いすぎて涙を拭おうとした私の顔を公子がのぞきこんで言った。

「貴女はまだ誰のものでもない・・・・・確かにそうでしょう。し

かし、それはいずれ誰かのものになる・・・・・ということでもある・・・・・・。
もしそれがあのバカなのなら・・・・・私はうれしいのですがね。
実際、まんざらでもないのでしょう？」

いたずらっぽく笑いながら、他の人間には聞こえないように呟く公子の前で
私は首筋まで赤くなりながらうつむくことしかできなかった。

「だからエルに手を出してんじゃねえええええ！！」

ガルルルル・・・・とうなり声をあげそうな勢いでレーヴェが私を公子から引き離そうと手を引く。
「え・・・・・・・・？」
軽い衝撃に顔を上げると・・・・・目の前には公子を睨みつけるレーヴェの顔が・・・・・・

「いやあああああああ！！！！／／／／（赤）」

雷鳴を纏った疾風の拳が、レーヴェの腹を打ち抜いた。

「な・・・・・なんで・・・・・？？」

プスプスと身体から煙をあげて倒れるレーヴェを公子が指を差して笑っていた。
あうぅぅ・・・・・レーヴェ・・・・・・・ごめん・・・・・・・・・・・・・・・／／／／

第二十八話

晩餐の宴が賑やかに催され、篭城中にもかかわらず酒と料理が大盤振る舞いに振舞われた。
調子にのったレーヴェはベルシュタイン公子と飲み比べをして見事に撃沈されていた。……あとで水でも持っていってやろうかしら。
もちろん酒宴の恩恵にあずかれなかったものたちもいる。
レインやフリッガといった闇を友として活動できる人間たちは噂を広めるために城外に散っていた。
兵数に雲泥の差が有る以上、彼らの働きが明日の戦いの帰趨を握っているのだ。

「我らが勝利の女神は憂い顔もお美しいですな。」
いつの間にか公子がワインを片手に私の顔を覗き込んでいた。
「……まだ飲んでいたんですか？」
驚いた。レーヴェと飲んでいた酒量はボトル5本や6本ではきかないはずなのに公子の瞳からは酒精の欠片も感じられない。
「ああ、これですか？ワインじゃありませんよ？ただの葡萄の絞り汁です。」
「もしかしてレーヴェと一緒に飲んでいたのも……」
してやったり、といった笑みを浮かべて公子が頷く。……レーヴェも哀れな。
「これは差し出がましい言い様かもしれませんが……本気で私と結婚する気はありませんか？レディ」
思いがけぬ提案に公子を見上げれば、口元はいたずらっぽく笑っていたが、目が全く笑っていない。
……本気、ということか。公子が友を裏切るとも思えないが……
「貴女の輝きは、この悪しき世界には眩すぎる。それこそフリギュ

アの馬鹿どもが身の程もわきまえず欲してやまないほどに。
いや、それどころか大陸中の男たちが貴女の微笑みを独占するためなら剣をとることも辞さないでしょう。」
……そのとおりだ。だからオレはエルロイであることをレーヴェたちにばらすつもりはなかった。
「そんな眩い輝きをいったいどうすれば争いを回避することが出来るのか。私には3つの方法しか思い浮かびませんでした。」
「伺ってもよろしいですか？」
「一つは隠すこと、もう一つは消すこと、そして最後の一つは……別の大きな輝きで相殺してしまうことです……。」
なるほど、……しかしどこまで本気かな？
最後の選択肢はワルキアという国家が私の庇護を与えるための大義名分をえるためのものだ。
逆に言うなら、公子はあたしのためにワルキアを危機にさらす覚悟をしたともいえる。
私をどこまで利用する気があるのかは微妙なところだ。公子とて男だし野心がないとは限らない。しかし……

「公子には悪いですがお受けできませんわね。公子のような王族と違って、私のような平民は好きな人以外とは結婚できませんもの！」
一瞬狐につままれたような顔をすると……今度こそ公子は本当の笑顔を見せた。
「これは私としたことが、思い至りませんでした。こんなときばかりはレーヴェが平民なのがうらやましい。」
「べべべべ…別にレーヴェと結婚すると言ったわけではありませんわよ！！　／／／／」
「私もレーヴェと貴女が結婚すると言ったわけではありませんよ？

もしそう聞こえたのなら、それは貴女の願望が……」

「それ以上言わないでください！！！」

……結局パーティーがひけるまでからかわれ続けた。公子なんか嫌いだ……！。

私にあてがわれたのは貴族の宿泊用の一室だった。
無駄に広い部屋の中央には意匠をこらした調度品に加え、軽く3人は眠れそうな大きなベッドが鎮座している。
……少々勝手がちがうとはいえ、それは想定の範囲内なのだが……
私の目はベッドの中央、ちょうど人が横たわっているかのように盛り上がったシーツに釘付けになっていた。

……とりあえずレーヴェだったら燃やそう！

物騒な独り言を呟きつつ私はゆっくりとシーツをめくる……

濡れた烏の羽のように輝く黒髪と白魚のようなスラリとした手がシーツの頭からのぞいた。

ピンク色の寝巻きは完全に肌を隠すということを放棄していて、大胆なデザインの下着が透けている。

「なな、ななななな……！？」

「あら、遅かったわねエルちゃん。」

ペロリ、とセイリアが自分の唇を舐めあげる。潤いをえた唇が妖しく輝くさまは官能的ですらあった。
なぜだかわからないが、お腹の奥がひどく熱い。
「少し私の話を聞いてくれるかしら。」
そう言ったセイリアの声が遠くかすんで聞こえた。

第二十九話

セイリアをとても正視できなくて私は首筋まで真っ赤になりながら視線をそらした。
スルリ……背後からセイリアの手が私の首にからめられるとセイリアの吐息を耳の後ろに感じる。

「セセセセ…セイリア！ちょっと離れて！」

「ふふふ……よかった」

ギュッと胸を私の背中に押し付けながらセイリアが鈴の音のような笑い声をあげた。
私とは違うボリュームと柔らかさが寝巻き越しに伝わってきて、またお腹の奥が熱くなる。

「これでなんの反応もしてくれなかったら、流石の私もあきらめるしかなかったかも」

「え……？」

「気づいてないかもしれないけど……エルちゃん、レーヴェを見てるときたまにすごく女の顔をするのよね」

そ、それって……

「レーヴェに惹かれ始めてるでしょ？エルちゃん」

ふと脳裏に浮かんだのは、くじけるということを知らない獰猛な野生味溢れる笑み
思い出したのはそんな時決まって感じる胸の甘い痛み

「そそそそんなことは……！！」

「あるわよね……？」

「……はい」

認めちゃった……女同士だからかな？なんだか胸の内を隠せなかった。
私は…レーヴェに惹かれてる。少なくとも、異性として意識しだしている。

「……知ってた？私、本当は男になりたかったの」
セイリアが突然話を変えた。
翳りのある笑みを浮かべながら。

「私の生まれた村は…妖精の血を受け継ぐ者たちの村だったから…子供は十三歳くらいまでの間は性別が決まらないのよ
初恋の相手は……アンフィトリテといったわ。本当に可愛い子だった……」

ちょっと待って！さらりとトンデモないことを言ってなかった？
妖精には性別がないわけで……妖精の血を受け継ぐとすればそれは妖精王オベロンか妖精妃エルスリードということに…

「言い伝えでは妖精王オベロンの血が流れていると言われていたわ」

…そんなに私の表情ってわかりやすいのかしら……でもセイリアの魔力の高い理由がわかったかも

「でも……アンフィトリテは男になってしまった。男としてアンフィトリテを守るために魔術を覚えた私は…何故か女になってしまったの」

セイリアの表情から笑みが消えた。

「アンフィトリテは男になっても私を好いてくれたけど……私は以前と同じ気持ちでアンフィトリテを好きでいることはできなかった……

焦らすつもりはなかったけれど……思い余った彼にレイプされそうになって…私は村を飛び出したの。１５歳のときだったわ」

肩を震わせて告白を続けるセイリアを、私は思わず抱きしめていた。

「私……エルちゃんをみたときこの人が私の運命だ！って、そう思ったの」

セイリアも私を抱きしめかえして私の首筋に顔を埋める。

「だから、どんなことをしてもエルちゃんを手に入れるつもりだった。だって村を出て…私は一人でそういう生き方をしてきたんだもの」

冒険者としては圧倒的に少ない女性で、魂は男のソレだというならセイリアの辛苦は想像を絶する。

……感情を移さない目

躊躇のない冷徹な行動

……人よんで氷炎の魔女

はじめてあったあの日のセイリアにようやく本当にたどり着いた、そんな気がした。

「でもね、今はちょっと違うの。自分でも不思議なんだけど……エルちゃんが幸せならいいかな……って」

セイリアが顔をあげて言った。
菫色の瞳が私の瞳を見つめて優しげに微笑う。
「だって私は女の子しか好きになれないけど、エルちゃんが男を好きになれるのなら、そのほうが幸せかもしれないものね……
事情がどうあれ私たちは女なんだから……」
そうか。
セイリアと私は似てるんだ。
男の心に女の身体……身体に引きづられる魂……男でも女でもあり、男でも女でもない者。
「だから…エルちゃんが本当にレーヴェを好きになったのなら……心から祝福する。エルちゃんの敵を滅ぼす剣となり、レーヴェを守る盾となる。…これは氷炎の魔女セイリアの誓い」

ポツリ……と

セイリアの菫色の瞳から涙がこぼれて私の手のひらに落ちた。

「……でも、本当は私のこと好きになって欲しい。私のこと真剣に考えてみて欲しい。そしたら私……エルちゃんのこと
だけを想ってエルちゃんのことだけを大切にする。…ほかには何も望まない……愛しているから…」

自分の目が信じられない。
あのセイリアが泣いている。まるで迷子になった幼子のように頼りなく儚げな姿で。
そして、泣かせてしまったのは私……

「私…もう一度考えてみるね。レーヴェのこともセイリアのことも……もう、変わってしまった自分に逃げないって……
約束するから……」

「うん……」

セイリアの右手が私の頬を撫でた。

「キス……しても…いい？」

「……うん…」

セイリアの息遣いを感じる。

菫色の瞳がゆっくりと閉じられて…

私も目を閉じた。

しっとりとした柔らかいものが唇に触れると、甘い痺れが背中から首筋に這い上がってくる。

「も、もういいでしょ？」

雰囲気に流されてしまいそうで、私は唇を離すと咄嗟に背を向けた。

……今更ながらに恥ずかしさがこみあげる。

ふと、気がつくと部屋の隅に置かれた三面鏡に背後のセイリアが写っていた。

ニタリ……

してやったりという表情で妖艶に微笑うセイリアがそこにいた……

……見なかったことにできないだろうか……？

第三十話

あれ……？ご主人さまがいない……

あ！いた！ご主人様～～～！

満面に笑みを浮かべて私はご主人様の胸に顔をすり寄せた。

暖かくて柔らかくてひだまりの匂いがする。大好きなご主人様。

「いい子ね、エルちゃん……」

えへへ～私いい子ですよ～ご主人様もっとほめて～もっと頭を撫でてください～！

ご主人様の手で頭を撫でられると思わずうっとりとしてしまう。

髪を優しく梳かれたかと思うとご主人様の手が頬に触れた。

「いい子にはご褒美よ……」

ご主人様の唇が近づいてくる。……セイリア様…私幸せです～……

ってセイリア！？というかご主人様って何？？

ガバッ

目が覚めるとセイリアの胸の中にいた。
夢見が悪かったのはこのせいか……
どうやらあの後そのまま二人で眠ってしまったようだ。
というかセイリアの胸に顔を埋めた今の状態は少々心臓に悪い。
セイリアのぬくもりからそっと身体を離す。
セイリアが焚き染めていたであろう薔薇の香りが自分に移っているのがわかると急に恥ずかしさがこみあげてきた。
「あやうく危ない趣味に目覚めるとこだったよ……」
「チッ……」
……今、誰か舌打ちしなかった？

両手を後ろ縛りに縛られ両脇を警護の騎士に押さえらる形で、サリエルが私たちの前に現れた。
この後に及んでもニヤニヤと浮ついた笑みを浮かべていられるのはバカなのか肝が太いのか……
「公子殿、このような扱いをされてはとても協力はできませんぞ！」
……バカのほうだったようだ。
「協力できないなら殺すまでだ。死んで父上に詫びるがよい」
あっさりと言い放った公子の言葉の影響は激甚だった。

顔を引きつらせながらサリエルは叫んだ。
「わわ、私を殺すということは遺跡を失うということに等しいのですぞ！今一度冷静に考えられよ！」
「お前が何を考えているのかしらんが……」
公子が不快気にかぶりをふった。相変わらず自分の都合でしかものを見れない男だな、サリエル。
「遺跡のことなぞどうでもいい。私がお前に求めているのは父ファルケンを死に追いやったのがフリギュアの陰謀だと証言することだけだ。
それができれば命だけは助けてやる。」
「な……！」
信じられない、といった表情でサリエルの顔が凍りついた。
「……本当にわかっているのですか公子殿下。遺跡の叡智を手に入れればこの大陸を制覇することなど造作もないのですぞ！」
「わかっていないのはお前だサリエル。我が公王家はお前のような愚か者に遺跡を悪用されない為に先祖代々遺跡を守護してきたのだ……。それに他人の業績を横取りして何を誇ることができようか。何者も頼ることなく己の力で成してこそ天地に恥じることなく誇ることができるであろうに……」
「そんな理屈は人に任せておけばよい！神だ！あの遺跡には神への道標があるのですぞ！」
「今のお前は人にも劣る存在にすぎない。味方の罪を告白して生き

ながらえるか、敵国の将として処刑されるか好きなほうを選べ」
両脇に控える騎士の槍がサリエルの首で交差され、これが最後通牒であることを告げた。
「は、は、話します！話します！」
ブンブンと音がしそうなほどに首を上下に振ってサリエルは己が生にしがみつくことを選んだ。
こんなところで死ねるものか！ひきつった顔がまだ神へといたる道をあきらめていないことを雄弁に語っている。
命だけは助けてやると公子は言ったけど、なんの罰も与えないとは言っていないよサリエル……
目と声と両手を奪って一切の魔術を行使できなくする。
たとえ神へといたる道を知っていても実行できなくしてしまう。おそらくサリエルにとって死ぬよりつらい罰になるはずだった。

「私はフリギュア宮廷魔術師サリエル・ベルナルド・ラウンデルだ……諸君らのなかにも見知ったものもあるかと思う……
昨日、復讐の魔女が諸君らに告げた言葉は事実である。宰相フサスラ様の命を受けてダーダルスの死神をファルケン王暗殺のためワルキアに招き入れたのは私だ。」
兵たちの間に動揺のどよめきがあがる。
「神は私の不義をお怒りになり私は虜囚の身となった。諸君らには

つらい現実だろうがこれを受け止め、一刻も早く撤退してもらいたい。さもなくば諸君らに復讐の鉄槌がくだるだろう。これは比喩ではない。復讐の魔女の顎は諸君らの命を刈り取るため、すでに開かれているのだ」

セイリアの覇炎が打ち出される。

「オレは死にたくない！」
「あんな宰相のせいで死んでたまるか！」

城下の各所で恐慌をきたした兵たちの悲鳴があがった。
もちろん潜入したレインやフリッガが恐慌を煽っている。

ゆっくりと城門が開いていく。
先頭には真紅の鎧に身を包んだ私。
公子から借りた宝剣を掲げて私は宣誓の声をあげた。

「復讐の時は来たれり！」

第三十一話

「「「復讐の時は来たれり！！！」」」

騎士たちが唱和する。

「吶喊！」

騎士団長の号令を合図に騎乗した騎士たちが怒涛のように城下へと進軍を開始した。

先頭を往くのは真紅の鎧を纏った金髪の美少女
両脇を固めるのは漆黒の騎士と深緑の魔術師

「何を恐れる！敵は小勢だ！押し包め！」

「神鳴」

いく筋もの光の槍がひしめく兵士たちに突き刺さっていく。
幾人もの兵士が光に串刺しにされて僚友を巻き込んで宙を舞ったかと思うと、骨すら残さず灰と化した。
理不尽なまでに圧倒的な力……
勝ち戦と思って気を緩めていた雑兵たちは一気に壊乱した。

城外へ突出した騎士の数は千人ほどであったがその衝力は並大抵のものではない。
千人のすべてが騎乗しており機動力にものを言わせて敵陣を蹂躙す

る。
大陸最強の噂が伊達でないことを、騎士たちは実力で証明した。
城下に展開していたフリギュア王国軍とワルキア公国軍が大軍なのが災いして有効な手を打てずにいた。
わけても、ワルキア公国軍の士気の低下は深刻で、開戦からわずかな時間で脱落者が激増している。

「退路を絶て！両翼から締め上げろ！」
「騎兵だ！こちらも騎兵を投入しろ！」

騎兵には騎兵で対抗するべくフリギュアの騎兵が迂回して乱戦を避けレイガルド東丘の上で隊伍を整えた。
後知恵ながら後世の歴史家は言う。
兵は拙速を尊ぶという。騎兵は逐次投入になろうとも、即座に戦線へ向けるべきであったと。なぜなら……

「爆煙塵」

騎兵たちの間を熱風と砂塵が吹き荒れる。
戦場で鍛え上げられているとはいえ、元来馬とは臆病な動物である。
砂埃と熱気を同時にたたきつけられては平静を保つことは難しかった。

「奇兵だ！隊伍を崩すな！付け入られるぞ！」

さすがに騎兵を率いるラズベルグ将軍は歴戦の宿将であり、敵の目論見を的確に見抜いた。
……少数の精鋭で騎兵隊を足止めするつもりなのだろうがそうはい

かん！

「魔術師に防護を固めさせろ！軽騎兵に敵の魔術師を捕捉させろ！急げ！」

将軍の叱声に騎士たちが平静を取り戻し速やかに索敵の騎兵を分派する様には、彼らの練度の高さが現れている。

ラズベルグは満足気に頷いてみせた。

……我が騎士団とて、ワルキア公国騎士団に遅れをとるものではない。

だが、歴戦の宿将であっても、敵将の力量を読むことには失敗した。

もっともそれは当然のことであったかもしれない。

常人が推測するには、あまりに敵は規格外な存在であった。

「炎襄」

「雷穿」

ラズベルグの周りを固めていた近習たちが轟音とともに吹き荒れた炎と雷に一握の灰と変わる。

驚いている暇はなかった。

炎と雷が切り開いた道の向こうに、二人の女性と一人の男が自分めがけて駆けてくるのが見える。

おそらく紅い鎧に身を包んだ小柄な少女が、兵たちが噂する復讐の魔女であろう。

「アリアナ、ゲイル、残りの二人を牽制しろ。オレは魔女を討つ。」

「「お任せを」」

信頼すべき年来の副将が駆け出す。

両翼で騎士たちの悲鳴があがっていた。
どうやらあの三人以外にも手練がいたか。
ラズベルグは並の騎士の倍は太そうな剛槍をしごいて愛馬をすすめた。
勝算がないわけではない。自分たちがさきほどの魔術から無事であったのは術式無効を施した鎧の効果が大きい。
魔術にさえ抵抗できれば魔術師など敵ではない。
しかしその考えが甘かったことを思い知らされるまで時間はかからなかった。

「覇炎」
「雷牙閃」

副将二人が魔術師の攻撃を受けて高く宙を舞う。
それでも幾分か術が減衰されたのかかろうじて息はあるようだ。

「あんたの相手はオレだ」

見た瞬間に並外れた武量を感じさせる美丈夫が眼前に立つ。
久しく感じなかった戦士の血を刺激されてラズベルグはのどを鳴らした。

「我が名はラズベルグ・ヨシュア・シュライン。フリギュア王国軍左将軍なり。貴殿の名を問おう。」

「レーヴェ・ブロンベルグだ。暴風レーヴェとか竜殺しとか呼ぶ奴もいるが……今はしがないエルの愛の奴隷さ。」

「……余計なこと言わないで……／／／」

後ろで少女が顔を真っ赤にしてうつむいている。

兵の話では神の化身のような神性の高い女性だということだったが……これではまるで恋する乙女だ。

「愛する者のために槍をとる。それもまた騎士の在り方のひとつ……いざ、参る！」

ラズベルグの槍が閃光とともに突き出される。体重の乗った一撃はレーヴェの胸に突き刺さるかに見えた。

ラズベルグの目はレーヴェの神技を捉えていた。

レーヴェの繰り出した槍先はラズベルグの槍先をその回転力で軌道をわずかにそらし己の槍をラズベルグの心臓に突き立てていた。

「……いい使い手だったぜ、あんた……」

「離れるわよ、レーヴェ。将軍を討った以上ここに用はないわ。」

将軍を討たれて指揮系統を失った騎兵は戦力としての機能を失った。視線を転じれば公国騎士団が遂にフリギュア王国軍の司令部を指呼の距離に捉えている。

どうやら勝てたか……

安堵の息をつく少女の瞳の片隅に戦場を天がける火球が写った。

「……いけない！！」

火球は公国騎士団の側面に容赦なく着弾し騎士を天に跳ね上げる。

「閃地」

少女は残された二人には目もくれず丘を駆け下った。

梟と蛇が向かい合った紋章を纏った集団が横一線に並びながら次々と火球を繰り出し続けている。

フリギュア王国宮廷魔術師団の来援であった。

第三十二話

「虚盾」

私の防護結界が間に合ったことで、なんとかワルキア公国騎士団は崩壊を免れた。
次々と馬首をめぐらし騎士たちが離脱を図る。
大魚を目の前にしての迅速な退却の決断と疾風の如き機動は流石は精強のワルキア公国騎士団であった。

「逃がすな！追え！」

攻守ところを変えてフリギュア王国軍がワルキア公国騎士団を追撃にかかるが、皆騎兵で構成された騎士団を捕捉するのは至難の業である。
両翼から一斉に歩兵たちが追いすがるが騎士たちは彼らには目もくれず一目散に城を目指す。
危なげなく城門の中に帰還するのを見届けて私は安堵の溜息をついた。

「おいおい、一人で突っ走るなよ。心配するだろうが。」

レーヴェとセイリアがようやく追いついてきたようだ。
私の乗っていた白馬も連れてきてくれている。

「……ごめん。まさかフリギュアが宮廷魔術師団と近衛総軍を繰り出してくるとは思わなかったから……」

私はレーヴェに渡された手綱を取って白馬にまたがると、改めて戦場を見直した。
遠征派遣軍の司令部の前面にフリギュアの宮廷魔術師団が展開しつつある。
さらに王旗を掲げた近衛総軍が印象的な白いマントをなびかせて蹴散らされた王国軍の再編に着手していた。

……これで王国軍の士気は回復してしまった……

虎の子の彼らが出てきたということはフリギュアの王国はまったくの空にしてきた、ということだ。
今の王国なら野盗にすらたやすく侵入を許してしまうだろう。

……後先を考えない総力戦に打ってでてきた。

その不退転の執念を感じて背筋を氷柱が貫いたような悪寒を感じる。
どれほどの犠牲を払おうとも、どんな手段をとろうとも、是が非にも遺跡の力が欲しいのだ。

「火震弾」

セイリアの放った一撃が、私たちを追ってきた軽騎兵を吹き飛ばした。

「そろそろ戻らないと危ないわ、エルちゃん」

私は頷いて馬首をレイガルド城へ向けた。
なかなか楽に勝たせてはもらえないらしい。

……だが、負けるわけにはいかない。私の全身全霊を賭けてお前の

野望を砕いて見せる！
私の目は司令部に新たに翻った鷲と剣を象った旗を捉えていた。
王国宰相フサスラの紋章であった。

……月が冴え冴えと輝いていた。
夜気は思ったよりも冷えていて熱くなりかけた頭を冷ますには丁度よい加減だ。
城壁の下に目を向ければ夜営の篝火に照らされてフリギュアの歩哨の姿が見える。
朝の戦いの後、フリギュア王国軍は改めて戦線を張りなおしていた。
要所に魔術師部隊を配置して歩兵と軽騎兵による二重の哨戒線を敷いている。
もう今日のような奇襲は通じないとみてよいだろう。

「ずいぶんと浮かない顔をしてるじゃないか」
ワインの杯を片手にレーヴェが現れた。
相変わらず悩みのなさそうな顔をしてるな、こいつ。
「……フリギュアの戦力はこれで出尽くした。でも、これだけの賭けに出た以上まだ何かある…そんな気がするんだ……」
……そう、悪い予感だけが私の胸を締め付ける。何か、何かあるはずなんだ！私の思いつかない何かが！
「まあ、お前も一杯やれ。根を詰めすぎても答えはでねえよ。」

そういってレーヴェは杯を私に差し出してきた。
……確かに今のままではどうどうめぐりだな。
私は差し出されたワインをありがたく口に含んだ。
ひどく甘い口当たりでいながら上品な風味が生きている。もし、思考の泥沼にはまった私のためにセレクトしてきたというなら大当たりといっていい。
そういう気遣いをこの男が本当にしていればの話だが。

「……間接キスだな」

ブフーッ！！

舌先を転がしていたワインを噴出してしまった。

「な、なにを言い出すのよ！もう！／／／」

「物足りないならいつでも本式のをしてやるが……」

「誰が物足りないと言ったか！」

……エルちゃん、レーヴェに惹かれ始めてるでしょ
夕べのセイリアの言葉が甦って頭にピンク色の靄がかかる。
今はそんなこと考えてる場合じゃないのよ！落ち着け私！

「好きにやってみればいいじゃないか」

「えっ？」

「遺跡のこともフサスラのことも……まあ、いろいろあるが…オレが最後に望むのはお前だけだ。エルがいてくれればそれでいい。お前のことはオレが守ってやるからお前はお前のできることを余計なこと考えずにやればいいのさ。」

……こいつ…なんてこと言うのよ！……

胸が苦しい。

……なのにうれしくてたまらない。

「……ありがとう……」

この戦いが終わったら、きっと名前をつけよう。

……今はまだ名のないこの気持ちに。

第三十三話

戦いは地味な篭城戦に移っていた。
フリギュア王国軍が宮廷魔術師団の援護のもとレイガルド王城の城壁を突破せんと迫る。
局地的にはセイリアやエルファシアの膨大な魔力が宮廷魔術師団の防御壁を超えてフリギュア兵を地獄の業火へと叩き込むが、
全体的には魔術戦力においてフリギュアを大きく下回るワルキア公国騎士団の不利は否めなかった。
魔術戦ばかりではない。篭城戦が防御側有利とはいえ、白兵にしても、投射武器戦にしても、数はすなわち力である。
何よりフリギュアの攻勢圧力の高さが問題だった。
損害を恐れて包囲に徹するフリギュアに対し、攻勢防御をとり、常に先手をうって敵の士気を削ぐ……
ベルシュタイン公子が描いた戦略構想は王国宰相フサスラの出現によって根底から挫折していた。

「その後の貴族たちの動向はどうだ？ベル」
先日の戦いでワルキア公国の第二公子派貴族は霧散している。
公王ファルケン暗殺がフリギュアの手になる疑いが濃い以上フリギュアに手は貸せないというわけだ。しかし……
「日和見は変わらないよ。心情的には確かに我々寄りになってはきているが……火中の栗を拾うほどではない、といったところかな。」
公子の表情にも流石に焦燥の色がにじみでていた。
フリギュアは兵数の圧倒的優位を生かして昼夜を問わず攻城戦を継続しており、ワルキア公国騎士団は睡眠をとることはおろか休憩をとることも
ままならない状態が続いていた。

このままではいつか押し切られてしまう……という懸念を抱いているのは公子だけではない。

「こちらが苦しいときは敵も苦しい。いかにフリギュアが決意を固めて攻めようともおのずと限界はある。」

重々しく呟いたのは竜殺しエルウィンだった。
実戦経験に裏打ちされた年長者の言葉はやはり重みが違う。しかし…フサスラの常識外ともいえる損害を省みぬ強攻にワルキア公国騎士団も声にならぬ悲鳴をあげているのだ。
いや、ワルキア公国騎士団だからこそ、どうにかこの劣勢をもちこたえている。

「確かにいくらフサスラが強硬でもこのまま損害が推移すれば騎士ではなく歩兵として集められた雑兵は耐えられまい。だが……」

「それまでこちらが持てばの話か……」

おそらく無理だろう、と私は考えていた。
城内を見渡してみれば負傷した騎士たちが救護室に納まりきれず回廊まで溢れている。
損耗率はおよそ4割といったところだろうか。
これが6割から7割に達したなら、いかに精強な軍隊でも士気の崩壊は免れない。

重苦しい沈黙が幕舎に満ちた。

「結局のところフサスラさえ討ち取ればすむ話なのだけれど……」
敵もさるものフサスラの紋章旗を目印に奇襲を数度企てて見たもの

のフサスラの影すら見つけられずにいた。
「ひとつ……考えついた手があるにはあるわ……」
公子をはじめとした面々の視線が私に集中するのがわかる。
この絶望的な状況でどんな手段があるというのか。
わずかな救いを求めて祈るような思いで私を見つめている。
ここで私が揺らぐわけにはいかない！
「フリギュアがこうも強攻を続けるのには理由がある。……何故だかわかる。レーヴェ？」
「……援軍を恐れているからか？」
「正解」
相棒の洞察力に微笑みつつ私は続けた。
「そもそも敵地であるワルキア国内、しかも王都レイガルドにこうも戦力を集中できているのには理由がある。ひとつにはワルキア貴族が
第二公子側についていてベルシュタイン公子を嫌っていること。もうひとつは先年に対ブルームハルト同盟を結んだエステトラス連邦共和国
やコルドバ王国の介入の可能性が低いこと。」
「まったく、貴女を宰相に任命したいくらいだ。つまり……」
「そう、全ては短期戦を想定してのこと。実際はともかく時間の経過とともに敵対勢力の介入のリスクが高まることをフリギュア王国宰相
フサスラも当然想定している。いや、フリギュア王国軍全軍が恐れ

ていると言ってもいい」

援軍が来る前にレイガルドを陥落させなければならない……そんな明確な目的意識を持ってフリギュアの指揮官は攻略を急いでいる。ならばその恐れが現実のものとなり、作戦目的が達成できなかったと知ったとき……今までどおりの戦意を保つのは至難の技だろう。

「……だが……肝心の援軍はどうする？工作員程度の小勢では役にはたたんぞ……？」

騎士団長のアンセムが　控えめな口調で疑念を呈した。

無論、それこそが問題なのだ……

「……私が選りすぐりの精鋭１００人を転移術式で西峰に送るわ。……でも、それが精一杯だからアルラウネの幻術で数を水増しする。敵の目には千人近い軍勢に見えるはずよ。」

幕舎の全員が息を呑む音が聞こえた。

百人を転送するというのはいくら私が規格外の魔術師でもやはり想像の埒外であったのだろう。

そもそも転送系の魔術自体マイナーな魔術で１ｋｍ自分を転送するだけで１流の魔術師だと思われていたし。

「この手は敵のパニックを誘発させることが作戦の要である以上１回しか使えない。しかも極限まで魔力を消費してしまうから、私は２，３日の間魔術師としては無力になるわ。今の戦況を考えれば万に一つも失敗は許されない。だから……」

私はアンセムに向かって頭を下げた。

「……どうか部隊の指揮はレーヴェに執らせてもらいたい。」

私は知っている。
レーヴェの価値はただ、強い戦闘力にあるのではない。
動物的とも言える勘で敵の弱点を見抜く目と、何より決して折れることのない心の強さと英雄だけがもつ風格が、味方の勇気を奮い立たせる
ところにこそ真価があるのだ。
これまで幾度そのおかげで危機を乗り越えてきたことか。

「……オスティアの英雄騎士の指揮を受けること、栄誉に思いこそすれ恥と感じるものは我が団員にはおりませぬぞ。」

アンセムは莞爾と笑って頷いてくれた。
乾坤一擲の戦いを自分の指揮で戦いたかったであろうに……この実力主義こそがワルキア公国騎士団が最強といわれる所以なのかもしれない。

「レーヴェも、頼んだわよ。」

「……キス……」

はああ？

「……キスしてくれたら頑張っちゃうんだけどなあ……」

何言ってやがりマスカ？このエロおやじは！？

ニヤニヤと笑いながら公子が頷いた。

「魔女殿には恐縮だが、これも勝利のため……是非勇者の望みを叶えてはもらえませぬか」

ううっ……恥ずかしすぎる……／／／

思わずセイリアに助けを求めたが無視されてしまった。自分がキスしたからレーヴェのも黙認するつもりなのだろう。

……ずるい……

「これで勝ってこなかったら許さないんだから！……」

私は爪先立ちになって軽くレーヴェと唇を触れ合わせた。

ほんの一瞬……かすめただけの唇が、ひどく熱い。

「任せておけ！」

……レーヴェの微笑みに不覚にも見とれてしまったのは不可抗力ということで許してもらいたい。

なぜなら私だけではなく、その場にいた全員が、レーヴェの発散する英雄のオーラに陶然となって言葉もなかったのだから……

第三十四話

レーヴェたちの出撃の準備中にもフリギュアの攻勢は続いていた。
剣戟の音が鳴り響くなかでオイゲンやロバートの怒声が聞こえてくる。

「良いか！援軍は必ずくる！ここで踏ん張らず後悔を生涯に残すな！」
「最強に負けの文字はない！我らの敵はただ打ち倒されるのみ！」

魔法陣の展開は終了した。
後は勝利を信じて彼らを送り届けるだけ……
なのに……

「必ず生きて帰ってきて……」

口から漏れてきたのはそんな弱気な言葉だった。
まったく何を言ってるんだ！私は……！
私がこんな有様では味方の士気が……！

「心配するな。エルの処女を頂くまでオレは死ぬ気はないからな。」

「前言撤回……いいから死んで来い！／／／」

騎士のみんながドッと笑った。
いつの間にかつられて私も笑っていた。

「みんな行くよ？」

「任せておけ」

術式が起動して白い光のなかにレーヴェたちが消えていく。
気休めだとわかっていても
なんの効力もないとわかっていても
叫ばずにはいられなかった。

「貴方たちに魔女の祝福を！」

西峰
正確にはレイガルド城の西南に位置するラナート山脈の端
山を越えればそこはワルキア貴族アプキール伯爵の領地が広がる。

「……どんぴしゃ……だ」

レイガルド城を包囲する西端……ほぼ目と鼻の先に宮廷魔術師団の
一隊が見える。
樹木に遮られてまだこちらには気づいていない……理想的な奇襲の
状況だ。

「西から東へ抜けたら半月形にフリギュアの本陣を目指す。遅れる
なよ」

ニヤリと笑ってレーヴェが駆け出す。
ワルキア騎士団の精鋭も笑いをかえしてその後に続いた。

「幻波鏡」

アルラウネの幻術が突入する騎士たちに重なる。
怒号とともに殺到する千人の兵士を前にフリギュア軍全軍が驚愕とともに凍りついた。

「アプキール伯リュークウッド義によってベルシュタイン殿下にお味方申し上げる！」
レーヴェの大音声が戦場に轟いた。

同時にレイガルド城から歓声があがる。
そして間髪おかぬ衝撃！

「て、敵はたかが千程度の小勢だ！重囲して殲滅しろ！」

真実には百人程度でしかない戦力だが、その突破衝力は並の千人の兵など遠く及ばない。
ほんの一呼吸で宮廷魔術師団の一隊が撃砕された。
高速詠唱術を装備していない一般の宮廷魔術師ではワルキアの精鋭の侵攻スピードに対応して術式を展開できない。

「セレネ、ワーレン！雑魚にかまってスピードを落とすな！」

高速の衝撃力を保ちながら眼前の敵に槍を揮いつつもレーヴェは的確に仲間を掌握し続けていた。

「……まったく、この人が敵でなくてよかったぜ……」

小隊長のデルフが呟くように言った。口元には押さえきれぬ笑みが

浮かんでいる。
デルフは武闘会で優勝して騎士団の入隊した武芸自慢の一人だったが、今のレーヴェを前にしては苦笑とともに己の幸運を感謝する以外にない。
試合ならともかく、戦場であの鬼神と槍を合わせることなど思いもよらなかった。

本来、槍は攻撃範囲の狭い武器である。
リーチは長いが密集した乱戦に巻き込まれると、途端に攻撃の手段を失う。

だが、レーヴェは乱戦にあってなお猛威を振るっていた。
槍の遠心力で重装の騎士が四・五人ほど鎧ごと宙を飛ばされ、槍の穂先の衝撃波だけで魔術師の首が舞う。
冗談のような光景だった。

レイガルド城の西方を包囲していた一軍が完全に崩れさった。

「アプキール伯の友誼に答える時は今だ！ワルキア公国近衛騎士団の血と誇りと名誉に賭けて伯を見殺しにするな！」

レーガルド城から近衛騎士団の騎馬部隊が出撃した。
先頭でアンセムが吼えている。彼もなかなかの役者なようだ。
手法もなかなかに辛らつである。
正面に向けてではなく、崩れたつ西方の軍にまぎれるようにして接近して敵に距離をとらせない。
同士討ちを恐れて魔術師が攻撃できないようにするためだ。

数の大小にかかわらず、援軍という事象が士気に与える影響は大きい。

先日のフリギュア軍が援軍を受けて立ち直ったのとは逆に、戦場の片翼に連鎖するようにしてフリギュア軍に動揺が広がっていった。

「我らのあとにはドーリア公やマウエル侯もレイガルドに向け進軍しておられる！明日を憂うるな！今日この時を勝ち抜くのだ！」

真っ赤なウソを堂々と叫んで回るのはレインだった。
さらに数人の工作員も声の限りに叫ぶ。

本来こういった乱戦は予備隊を投入して、ほんの一時でも戦線を膠着させることができれば収拾は容易い。
しかし連日の強攻は兵力が豊富であったはずのフリギュアから予備の兵力を奪い去っていた。
もはや、レーヴェたちを阻むのは時間と体力以外にはない。

「我こそはフリギュア王国右将軍サンジェスト！この先は通さん！」

白い鎧に身を包んだ大柄な男がレーヴェの前に立ち塞がった。
槍をしごく腕は丸太のように太く、胸の厚さはまるで樽のようであった。
人呼んで首狩りサンジェスト……敵対した男の首を蒐集するというサディスティックな嗜好を持つが戦闘力は確かな男だ。

「輝星」

一瞬太陽がそこに出現したかのような光が炸裂した。
そして……一瞬で十分だった。

「……押しとおらせてもらうぜ、首狩りさんよ」

レーヴェの槍がサンジェストの右腕を捉え……血しぶきとともに腕と槍が宙を舞う。

「バ、バカな！貴様……まさかっ魔術を！」

「……オレが魔術を使わないなんて誰が言ってたんだ？」

世界最高の魔術剣士と数々の冒険をともにしてきた。
そのオレが魔術に惹かれないわけがないだろう？……なあ、エル？

本来レーヴェたちを追撃すべき部隊にはアンセムたち近衛騎士団の楔が打ち込まれている。
攻囲戦部隊の分厚い壁を突破したレーヴェの前にはわずかな手勢に守られた本陣が無防備な姿をさらしていた。

「覚悟しろ！フサスラァァァァァ！！」

兵士たちの耳に死神にも等しい戦鬼の咆哮がこだました。

第三十五話

フリギュア本陣の幕舎がみるみるうちに目前に迫る。

「チッ！」

レーヴェの接近を待っていたかのように大量の火球が本陣から打ち出された。

……だが、当たらない。

騎士たちに被害が及ばぬよう突出して距離をとり、その身を弾幕のような火球にさらしつつも、ただの一発もレーヴェに傷ひとつつけることができない。

「暴風レーヴェは目を閉じていても風の動きひとつで相手の動きを見通すと聞いてはいたが……」

デルフは感心するというよりあきれ返っていた。
猫科の野生獣すら凌駕する俊敏な動き
そしておそらくは極限まで高められた五感
なにより一撃であっさり命を奪うであろう魔術を前にして微塵の恐怖も感じさせぬ勇気

全身の血が熱くなってくるのがわかる。

神に愛されたものだけが手にすることの出来るあの武量。
ワルキアが生んだ大陸最強の武芸者とともに自分は戦っているのだと思うと、自分がサーガの登場人物になったような気分だった。
レーヴェと肩を並べて戦える今がたまらなく誇らしい。

「うおおおおおおおおおっっっ！！！」

最高の士気を保ったまま、レーヴェたちはフリギュアの本陣へ突入を果たした。

「魔術師から優先して倒せ！デルフの小隊は左、ラーケンの小隊は右だ！フサスラを見つけたら鏑矢を放て！決して逃がすな！」

本陣での戦闘はワルキア騎士団が圧倒していた。
戦線の後方で勝ち戦を眺めていた部隊である。
予想だにしなかった自らの危機に右往左往するばかりで、せっかく上回っている数の利を生かすことが出来ない。

「残念だがここに宰相閣下はいない……」

突如現れた火精が幕舎を囲むように乱舞する。
尋常ではない精霊力……おそらくその力はセイリアほどのレベルに達しよう。
練り上げられて具象した火精は不死鳥の姿を形作りつつあった。

「……どこにいるか教えてくれたら命まではとらずにおいてやるぜ。宮廷魔術師長殿」

フリギュア王家宮廷魔術師長クロトワ・ジェラルド・バトン
大陸でも名の知れた魔術師である。
古代魔術への造詣が深く、現代に古代語魔術をいくつか復活させたことでもしられている。
そのひとつがこれ。
火という形でしか具象できない火精に形を与えて攻撃魔術に自立型の知性を付与するというものだ。
あの不死鳥は致死量の炎を纏った知性ある獣なのだ……。

「……もうじきわかることなのだが、私の口からそれを告げるわけにはいかんな。あの世でセト神に聞きたまえ」

「悪いがエルの花嫁衣裳を見るまでオレは死ねんのでな。かわりにお前が逝って詫びておいてくれ」

「なんのことかわからんが、それは出来ん相談だ……行け！」

不死鳥を象った火精の炎がレーヴェに向かって死の翼を羽ばたかせる。

クロトワの目におもむろに槍を振りかぶるレーヴェの姿が映った。

……愚かな……アレは鳥の姿をしてはいても火精の集まりにしかすぎん。両断されたとてなんのダメージにもならぬわ！

竜はこの世界に住まう種として最強の種であることは疑いがない。

人間など歯牙にもかけぬ体躯
空を飛ぶ翼
生あるもの全てをなぎ払わずにはおかぬブレス
そして

……魔術を全て無効化してしまう能力

古代よりさまざまな研究が続けられてきたが、竜の魔術防壁を突破するには竜が内包する以上の魔力をぶつける以外にない……
つまり人の身には不可能だということを確認する結果に終わっていた。

幾万の人のなかに極わずかだが、竜の鱗を用いて鍛えられた竜器と呼ばれる武器から、竜の力を引き出せるものが存在する。
一説には竜すらねじ伏せてしまう強力な意志の持ち主だけが竜の力を引き出すという。

クロトワはレーヴェの二つ名をもう一度思い返して見るべきだった。

暴風レーヴェ
槍聖レーヴェ
英雄騎士レーヴェ

またの名を

魔術師殺し

レーヴェが振り下ろした槍は不死鳥をあっさりと吹き散らし……

大地に深々と衝撃の亀裂を残したかと思うと……
クロトワの身体を真っ二つに分断した。

「クロトワさまが討ち取られた！」
「本陣は壊滅したようだぞ！」
「フサスラさまも行方不明と聞く……」

ベルシュタイン公子が会心の笑みとともに私の手をとった。
「魔女殿のおかげでどうやら勝てたようです！」

「私の力ではありません…レーヴェと…騎士団の方たちのおかげですわ」

「魔女殿のキスがなければレーヴェもあそこまで戦えなかったと思いますがね。」

「……知りません！／／／」

「……まだもう一波乱ありそうですぞ……」

カリウスが低く唸るように東の街道に目を向けた。

「あれは……ブルームハルト帝国の軍ですな。まったく、あれほど援軍を催促しておいたのに今ごろやってくるとは……」

公子は呆れたように言った。
「まあ、わが国の強さを見せ付けてやれたことで満足すべきなのでしょうか……」

違う

私の予感が確かならフリギュアの切り札は……！

「急いで兵を城に戻せ、坊」

エルウィンが沈鬱な声で呟く。

「あの兵気が読めぬか。……あれは敵だ」

「そんな！フリギュアとブルームハルトは歴史的な敵国ですぞ！そもそもわが国とブルームハルトには同盟が……！」

「あの兵気を読めんとは育て方を誤ったようだが……お前の抜けた目でもあの旗ぐらいは見えるじゃろ」

地を這う蛇のように軍列をレイガルドに向ける軍勢のなかにフリギュア王国宰相旗がはためいていた。

第三十六話

援軍を得て勝利を九分九厘まで掴みかけた。
その土壇場で勝利の果実をもぎ取られたことのダメージは大きい。
本来なら、街道上に長蛇の列を成しているブルームハルト軍の横面に痛撃を食らわせるとこは難しくない。
だが、レイガルド城にその余力はもはや残されてはいない……。

考えついてしかるべきだった。
ここまで形振りかまわぬフリギュアなら他国の介入を許すことぐらいなんの逡巡もなくできるであろうことくらいとうに気づくべきだったのだ。
だが、もうすべては遅すぎた。

「何故だ！何故ブルームハルトは、我々でなく長年の敵国であるフリギュアに手を貸すんだ！？」

ベルシュタイン公子が錯乱気味にかぶりをふる。

「国家に真の友人はいません。……我々より多くの報酬をフリギュアが約束した……そういうことでしょう。フリギュアにとって、遺跡さえ手に
入ればワルキア一国すべてブルームハルトに差し出してもかまわないのでしょうから……」

そう、遺跡の力はワルキア一国の力に勝る。

たとえ制御できようとできまいとにかかわらず、だ。

「……エルファシア様……」

戦闘が始まってからというもの妙に無口になっていたカリウスが重い口を開いた。

「率直に申し上げてこうなった以上勝ち目は薄いものと思われます。選択肢としては全滅するまで戦う……これは論外ですな。もうひとつは遺跡を破壊して逃げる……このためにはしばしの時間を稼ぐ必要があります。もうひとつは遺跡を差し出して降伏すること……遺跡さえ差し出せば助命は認めてもらえるでしょう。しかし主様を見逃すはずもないのでこれも論外ですな。遺跡を放棄して逃げる……というのもありますが……遺跡を手中に収めたフリギュアがどうでるのかが問題です。……がいずれにしろ」

ここでカリウスは公子に向かって深々と首を垂れた。

「我が主はもはや十分に公子殿下に貢献したものと存じます。どうかこの場で退場することをお許し願いたい。」

「な！何を言うんだカリウス！」

思いもかけぬカリウスの言葉に私は狼狽を隠せなかった。

どうしてここで去らなければいけない？だとしたら何のために私たちは戦ったんだ！？

「主様は良くも悪くもこの戦いの象徴になられてしまった。このことは敵も味方も誰もが認めることでしょう。現在主様は公子殿下に勝るとも劣らぬ標的に他なりません。敵にとっても、味方にとっても……」

「……それは我が軍に裏切る者がいるということか？」

ベルシュタイン公子が唸るような低い声でカリウスを睨みつける。

「公子殿下がお味方を信じたい気持ちはわかります。しかし勝ち目のない戦いに命を投げ出すのは常人の気概でなしうるものではありません

私がこの城に入城以来、処理させていただいた内通者は片手ではききませんぞ」

カリウスが城に入って以来戦場にも出ず何をしているのかと思ってはいたが……

内通者の存在は公子に痛烈な衝撃を与えたようだった。

目がうつろになり、敗戦濃厚な戦況と、自分が味方にも狙われる可能性に肌があわ立つのが見てとれる。

「私は逃げないよ、カリウス」

だからこそ……私はそう言わねばならない。

「私は私の大切な人を残して退くつもりはない。」

「……冒険者ギルドのお仲間には皆ともに退去していただくつもりですが」

私の大切な仲間たち……だから気持ちが通じている。
「彼らが公子を残して退くわけはない。何よりレーヴェは己の槍を捧げた相手を見捨てられるような男じゃないよ」
だから戦う。
仲間の命と居場所を守るために戦う。
たとえこの命が尽きようとも。
「おそらくそう言われるのではないかと思っておりました……私も……覚悟を決めましょうか」
カリウスの暗いまなざしに光が戻った。
考えてみれば二千五百年ぶりに出会った主が今にも負けそうな戦場にいるのだ。
カリウスが私の身を案じないわけがない。
「すまない……私は出来の悪い主だな」
「エルファシア様は私の誇りでございます。……覚悟と申し上げたのは……こちらのことでございます。」
どういうことだ？
私の疑問はブルームハルト軍の鬨の声にかき消された。
ブルームハルト軍がレイガルド城への攻撃の準備を完了したのだ。
「……私も出る」
「魔女殿」

ベルシュタイン公子の声が私の背中を叩いた。
「こんなことをお願いできる立場ではないが、地下の遺跡を抹消するまで王の間を死守していただきたい。遺跡の抹消後は全兵力をあげて敵中を突破してコルドバ王国を目指す……頼まれてくれるだろうか？」
公子の声に生気が戻っているのを確認して私は微笑んだ。
「承知し……んきゃあ！！」
お尻を撫で上げられる感触に思わず悲鳴をあげてしまう。
「嬢ちゃん一人で格好いいとこ独占させるのはかなわんでな。わしもいくぞい。」
竜殺しエルウィンがいつの間にか私と肩を並べていた。……このエロじじい……
「さあて……」
バルコニーから城下を見下ろすと不敵な笑みを浮かべながらエルウィンが腰の剣を引き抜いた。
その溢れる魔力に目を奪われる。
レーヴァテイン……伝説に詠われる火吹き竜が自らのブレスで鍛え上げたという魔剣……
「この竜殺しエルウィンの生涯最後の戦いにともに名を残したい物

好きはついて来い！」

老人とは思えぬ敏捷さでエルウィンがバルコニーを飛び降りる。

「うおおおおおおおおお！！！」

ワルキア公国騎士団が最後の気力を振り絞って雄たけびをあげエルウィンの後に続いた。

第三十七話

「ベルシュタイン・ノストラム・デ・ワルキアが古の盟約に従い汝に命じる。疾く封印の門を開け放ち我を導く光となれ……」

「遺伝子封印指定解除……術式固定……魔力コードを走査します……」

抹消術式の発動には八つの封印の解除が必要であり、解除には厳重なチェックが幾重にも施される。

「……エルファシア殿……どうか無事で……」

いまだ2つめに封印だというのに1時間近くを要している。
エルウィンが前線にたったとはいえ、ワルキア公国軍の戦力は既に限界なのはベルシュタンも気づいていた。
拮抗した戦線は一度バランスが崩れれば、ただ虐殺の舞台と化す。
攻城戦の場合は特にそうだ。

「……間に合ってくれ……」

いかにエルウィンやエルファシアが超絶の武力を誇ろうとも、集団戦においてそれは絶対的な要素ではない。

「東壁が突破されました！」

「押し返せ！ロバート！ギョーム！内宮に入れさせるな！」
「「任せておけ！！」」

もっとも戦力の集中しやすい城門前こそエルウィンと私がもたせているが、各所で決壊寸前の堤防のように戦力の穴が開きだしていた。どうやりくりしても絶対数が足りない。
体力が無限でない以上ジリ貧は確実だ。
なにより魔力切れで魔術が使えないのがもどかしい。
いつもなら仲間を助けにすぐにでも転移できたのにそれができないということは私の心に見えない重しを乗せていた。

焦りが私の対応をほんの数瞬遅らせた。
クロスボウの矢が私を目掛けて放たれ……魔術の助けなしにすべてをかわしきることはできないのがわかる。
ならば致命傷だけは防ぐ！
……数本の矢が左手に突き刺さった。肩口にも一本……それでも戦闘に支障はない。

赤い魔力に彩られた衝撃波が弓兵の一隊をなぎ払う。エルウィンのじいさんだ。

「嬢ちゃん、こいつらお前さんを目の色変えて狙っとる。気をそらしてると死ぬぞい。」

「……お恥ずかしいところをお見せしました。」

いかんな。自分が標的になるのはわかっているつもりだったんだが。

巨大な気がふくれあがる気配に私は背筋を震わせた。

……なんだ？この気は……怒り……？
怒気というにはあまりに生々しくそして凶悪な気配……いったい誰が……

「オレの女に傷をつけやがったのはお前らかあああああ！」

……レーヴェだった。
突入組は待機させていたはずなのに……まったくお前って奴は……

「……っていうか誰があなたの女なのよ！？／／／」

「オレにキスを捧げてくれた乙女…？」

「ううっ……」

私のバカ私のバカ！思い出してる場合じゃないでしょう！？

「まじめに戦わんと死ぬぞ、お前ら……」

エルウィンが呆れた声で呟きながらも、瞬く間に死体を量産していく。
だが……

「いかん……！」

莫大な魔力が一点に集束していくのが私にも感じられた。
ブルームハルトの魔術師団による集団儀式魔術だ！

「内宮に退くぞ！遅れるな！」

エルウィンがきびすを返すと城門内へと身を躍らせる。
するり、とレーヴェの手が私の腰に伸びてきて声をあげる間もなく抱きかかえられてしまった。

「まったく……エルを抱くならもっといいムードの時に抱きたかったぜ……」
「だったら降ろしなさいよ！」
「まあ、そう言わずにエルの抱き心地を堪能させてくれよ」
「……バカ……／／／」

背後で巨大な閃光と衝撃が走ったかと思うと、城門の鋼鉄の扉が跡形もなく消し飛ぶのが見えた。
紫光閃か……とりあえずこれでブルームハルトの魔術師団の半数は数日ほど使い物になるまい。

大きく口を開けて倒壊した城門から、ブルームハルト兵が突入を開始した。
軽口を叩いてはいても、私もレーヴェも気づいていた。
絶望的ではあったこの戦いの負けが確定したであろうことを。
レイガルド城に残された時間が、あとほんのわずかであろうことを。

第三十八話

城壁に囲まれた外郭陣地とは別に、レイガルド城は3つの内郭を所有している。
一の郭は議事堂を主として建てられており二の郭は外交上の祭典などを行う広間を主としている。
三の郭が王族の住居と王の執務のために建てられたレイガルド城最後の防御施設だった。

かろうじて一の郭に拠ったワルキア公国騎士団ではあるがその実態は敗軍のそれに等しい。
損耗率は7割に達しようとしている。一の郭が落ちれば二の郭にいる負傷者は一人残らず虐殺されるであろう。
騎士たるものは決して降伏しないからだ。

それほど絶望的な状況下にあって尚、戦意を喪失していないワルキア公国騎士団は確かに大陸最強の騎士団だと私は思う。
内宮の施設は一応篭城戦を考慮してあるとはいえ、基本的に居住区だ。防御力は格段に落ちる。

「負傷者を三の郭に移せ！手の空いているものはテーブルでもなんでも積みあげて防御陣地を作成しろ！急げ！」

アンセムの号令が響く。急ごしらえの即席陣地が見る間に四層にわたって構築された。

「体力に余裕のあるものはオレに続け！疲労しているものは第二線陣地で待機しろ！」

突進するブルーハルト軍を押し返さんと騎士団が駆ける。
「「我が剣は騎士団のために！騎士団は王の剣に！」」
ワルキア公国騎士団の合言葉を合図に一の郭の回廊を巡る攻防戦が始まった。

……一の郭でも攻防が始まってから3時間……
すでに私たちは三の郭の入り口付近まで退却を余儀なくされていた。
遮蔽物や魔術防御力の乏しい内宮では、投射武器のクロスボウや魔術師団の精霊魔術が絶大な威力を発揮する。
戦場となる回廊が狭く、体術をいかす余地が少ないからだ。
対するワルキアには高位の近衛騎士こそ魔術を使えるものの、専門職の魔術師はおらず、兵力は圧倒的に少ない。
敵に出血を強いる屋内ゲリラ戦を展開し、時間を稼ぐのが精一杯なのが現実だった。

もう、後がない。
ここを突破されたら負傷者でごったがえしている謁見の間と、最奥の王の間までは指呼の距離だ。
「……三の郭は術式無効の魔術結界があるのが救いだな……」

三の郭は流石に王族の居住区だけあって、強固に術式無効の結界が敷かれていた。
剣や槍の武装と違って、魔術は取上げることができないから王宮では大概同じ措置がとられている。
「ベルシュタイン殿下が地下に降りて6時間……もうそれほどの時間はかからないだろう……あと少しだ。」
もっとも問題は……その後どうやって生き延びるかなのだが。

「ワルキアの騎士たちに告ぐ」

ブルームハルトの指揮官らしき男が進み出て声を上げた。
「まずはワルキア公国騎士団の勇戦に対し敬意を表する。よくぞここまで戦い抜いたものだ。しかし既に戦いの決着はついている。我々もこれ以上の犠牲は望むところではない。貴君ら騎士団全員とベルシュタイン公子の命と自由は保証するから……」
ここでブルームハルトの指揮官の目が何かを探すように動き……私の前で静止した。
「魔女エルファシアを我が軍に差し出していただきたい。生きてさえいれば状態は問わない。」
……なるほど。奴らの目的からいけば私の確保は必要だったな……

「笑止！」

槍の石突を大地に叩きつけアンセムが吼える。

「ワルキアの誇りを解せぬ輩よ。騎士が戦友を売るなどと夢にも思わぬと知るがよい。たとえこの命果てようとも、この魂の血と名と誇りは
汚させぬ。」

「その言葉……後悔せぬな……？」

「未練を見せるな。ブルームハルトの者よ。今は戦いの秋なのだ。」

そしてまさにブルームハルト軍が突入を開始しようとしたとき、底知れぬ魔力が旋風を巻き起こし、はじけるように霧散するのを
その場にいた全てのものが感じた。

「……な、なん……だ？」

「どうやら公子が術式の抹消を完了したようだな。」

「い、今なんと言った？！」

ブルームハルトの戦列から転がり出るように初老の男が現れる。
……フサスラだった。よほど動揺しているのだろう。自分の命の危険も度外視してしまうほどに。

「……ワルキア家には遺跡を消去するキーワードが残されていたんだよ。お前が望む地下遺跡はもう跡形もなくなったのさ」

「馬鹿な……！お、お、お前たちはあの遺跡がなんであるのか本当にわかっているのか！？」

「古代からの記憶を保存しておける施設なのだろう？」

「そんなものはただの副産物にすぎない！あの遺跡の本当の役割は亜神ジェイドという巨大な意識体の封印にあるのだ！」

背中に氷柱を押し込まれたような冷気が走る。
もしそれが本当だとしたら……

そして天空からレイガルド城へ巨大な光の柱が降り立った。

第三十九話

レイガルド城を貫いた光の柱はさらに光量を増し、やがて巨大な光の球体を作り出した。
そして光の球体はゆっくりと王家の陵墓へと向かう。
ワルキア公国軍もブルームハルト帝国軍もその圧倒的な威容に言葉もない。
事情を知らない兵士たちにもわかってしまった。無意識が理解してしまったのだ。相手が神だということを。

「なんという！なんということをしてくれたのだ！」

髪を振り乱してフサスラが猛る。

「遠き日……古文書に記された亜神ジェイドの封印の記述を発見してからここまで準備するのに二十余年……どれほどの辛酸と労苦を味わってきたことか……全ては人から神へと到る究極の魔術を完成させるため……！それをあと一歩…あと一歩にして……！！」

亜神ジェイドが復活する……？

背中をじっとりと嫌な汗が濡らす。
正直、ブルームハルト軍を相手にしていたほうが気楽に感じられるほどだ。

「……フサスラ宰相殿、事情をご説明いただこうか……？」

どうやらフサスラに不審を抱いたらしい。ブルームハルトの高官らしい男がフサスラに声をかけた。

「宰相殿のお話では第二公子をワルキア公王に即位させブルームハルト・ワルキア・フリギュアの三国同盟により大陸の覇権を狙うということでしたが……どうやら私たちの知らない裏がありそうですな……」

そんなことを言っていたのか。
確かにブルームハルトは大陸中でもティルナノーグ・ヴァーネリアンと並ぶ三大国家だからフリギュアとワルキアが組めばエステトラスやコルドバあたりは戦わずして軍門に下るだろう。

「もはや、貴様ら蒙昧な輩に語る言葉はない。神たるの資格を持つのは私だけ！私だけなのだ！」

フサスラが突如詠唱を開始した。
……なんて魔力…！そうだ……こいつ…宰相になる前は宮廷魔術師長だったっけ……！

「命の源、万物の静止する沈黙の泉。アースガルドの支配者ヴォータンの叡智の名の下に我は命ずる。我が魂を汝がものに
汝が意志を我が意志に。イデアよ踊れ。我が魂は天に昇る。」

フサスラの瞳から生気が消えた。

……馬鹿な……未完成の術式で自分の魂を転送するなんて……！
自殺行為としか思えなかった。

咄嗟に光球を振り返る。
それは丁度光球が王墓へと吸い込まれていくのと同時であった。
次の瞬間……

「ルアアアアアアアアアアアアアア！」

想像を絶する怒りの波動とともに
亜神ジェイドが降臨した。

「な、なんだあの化け物は？」
「聞いてないぞ、こんなの！」
「かなうわけないだろ！あんなのに！」

ブルームハルト軍の兵士たちに目に見えて動揺が走る。
……無理もない。

全長で２０メートルには達しようという巨体
離れていてもわかる底知れない怒り……それとこれは……不快感？

「神に逆らう脆弱なものどもよ！消えうせろ！」

詠唱もなしに業火の炎が地上に顕現する。
瞬く間にブルームハルトの兵数百人が灰となって消えた。
もはや兵たちの恐慌を止めるすべはなかった。

「逃げろ！」
「退け！退くんだ！」

雪崩をうって国境にむかって敗走していくブルームハルト軍を追うように幾筋もの雷が飛ぶ。
雷に撃たれた兵士たちが肉が焦げる嫌な音とともに倒れふしていく様はまさに地獄絵図であった。

だが

私の想像があたっていれば

亜神ジェイドを葬る機会はおそらく今以外にはない。

空気が重くよどんだようにすら思える不快感
神が下した魔術の割には軽い被害
……信じがたいことだがとんだ怪我の功名もあったものだと思う。
フサスラが中途半端に魂を転送したことでジェイドの神性が汚され

ている。

説話に出てくる亜神ジェイドの半分も力を揮えずにいることは間違いない。

とはいえ相手は神

フサスラの魂がいつまで枷になってくれるかはわからない。

……今倒さなければならない。現在の魔術レベルでは再びジェイドを封印することはおそらくできない。

……だがどうやって倒せばいい？！

第四十話

「殺すなら今。今やらなければ永久にできない。」
セイリアが私と同じ結論に達して口を開いた。

「どういうことだ？」

「あくまで結果的にではあるけど、フサスラの魂の転送がジェイドの神性を汚しているの。今のジェイドは半人半神の不完全な状態にあるから、対抗策を講じられる前に倒してしまわないと、完全な亜神の力を取り戻したジェイドにはかなわない……ということね」

苦笑いを浮かべながらレーヴェが答えた。

「やるしかないってことだろ？まあ、オレに任せとけ」

……つくづくこの男の豪胆さには驚かされる。
神に立ち向かうのにまるで買い物にでかけるような気安さだ。

「……これは推測になるけど……腐ってもジェイドは亜神……肉体的な意味で彼を斬ることはできないわ。ダメージを与えられるとすれば
セイリアレベルの魔術師か竜器の使い手じゃないと、おそらくあの魔術障壁を突破できない。」

ジェイドは現世に顕現しているとはいえ、精神体だからロバートやギョームのような打撃武器ではダメージを与えられないだろう。
こちらの戦力は実際のところレーヴェとエルウィンとセイリアの三

人だけ……
悔しい。
自分の無力さが。
レーヴェとセイリアの助けになれないことが。

「それじゃオレとエルウィンがメインで攻めるからオイゲンとフリッガとレインか撹乱を頼む。アルラウネは幻術で援護、ロバートとギョームは
騎士団の連中を退避させてやってくれ。レイガルド城がまるごと更地になっちまうかもしれんからな。」

「……私は……？」

私にできることなんてないのはわかっている。それでも聞かずにはいられなかった。

「エルは魔力が回復するまで隠れて……」
「いや！」

まるで幼子が駄々をこねるかのように私はかぶりを振る。
それだけはいやだ。私の見ていないところでレーヴェとセイリアを戦わせるなんて……

「じゃあ、ここでオレたちを応援してろ」

「はあ？」

よくわからないうちにレーヴェに頭を撫でられている。思考がついていけない。

「お前が応援してくれるなら、オレは神様だってぶっ倒してやるからよ」

なんてことを言うんだこの男は／／／！

おへその奥が疼いちゃったじゃないか、バカ！

「生きて帰ってこなかったら承知しないんだから！」

「だから言ったろ？オレはエルの処女をいただくまでは死なないって！」

「火車」

「のわあああああ！セイリア！てめええ！！」

「あは……あはははは！！」

いつものじゃれ合い、いつもの光景、その何気ない愛しさに涙が溢れる。その涙を隠すように、私は笑い続けた。

でもそんな愛しい至福の時も終わりが訪れる。

「武運を」

私の言葉に頷くと同時にレーヴェとエルウィンが駆け出した。

「竜の王ベランに申し奉る。
我が血を糧に天空より来たれ
暁闇よりも昏き者よ汝の闇もて灰燼と為せ
殲滅せよ黄昏よりの使者
紅蓮華天！」

セイリアの詠唱が完成した。
炎熱系の中でも最上級の術式だ。セイリアの妖精の血を引く魔力あってこその禁呪！

天空から降り立つ一条の火線がジェイドの右手を焼く。

「徒党を組んで神に逆らうか！人間どもが！」

「てめえも元はといえば人間だろうが」

死角となったジェイドの右方からレーヴェが槍を突き上げた。
穂先がジェイドの脇腹を貫く。
更にエルウィンのレーヴァテインがジェイドの頭上から首筋にむかって斬りさげられた。
間違いなく致命傷……！

ただし、それが人であったなら……！

「神の怒りを受けるがいい、人間よ」

体内に深々と埋め込まれた槍ごとレーヴェが地上に叩きつけられた。

紙一重でジェイドの拳を回避したエルウィンも無詠唱で発動した風撃に弾き飛ばされる。
ジェイドの身体にはもはや傷の跡すら残っていない。
気がつくのが遅かった。人と同じ形はしていても、アレは意識を持つ魔力の塊に他ならないのだ！

「死ね、こしゃくな女よ」

ジェイドの腕の一振りで、今度は数十メートルはありそうな火球がセイリアへと向かう。

「無効結界重層展開……！キャアアアアアアアアアア！！」

三重に張られた結界はいともあっさりと突き崩され奔流と化した炎がセイリアを襲った。

「くっ……爆震」

咄嗟にセイリアが採った方法は自らの足元を炸裂させてその爆風を利用して逃げるというものだった。
かろうじて火球はかわしたものの、美しかった両足は見るも無惨に赤く染まっている。

「……いや……」

もはや身動きもかなわぬセイリアに必殺の追撃が放たれる。
刹那、セイリアを横抱きに駆ける影……レインだ。
しかし流石のレインも爆発の全てをかわしきることは出来なかった。

飛び散る破片をセイリアをかばってその身に受けたレインは意識を失って大地に横たわった。

「させるかよおおおおお！」

雄叫びをあげながら突進するレーヴェめがけ無数の氷の飛礫が飛ぶ。

「……いや……」

レーヴェをかばうように立ちはだかったオイゲンが飛礫を払いのけるも処理しきれなかった飛礫がオイゲンの四肢に炸裂した。
かろうじて急所は守ったようだが、オイゲンもまた意識を失う。

「……いや……」

「くたばりやがれえええええ！！」

レーヴェの精魂を込めた神速の突きがジェイドの額を正確に貫いた。
気配を殺して近づいたエルウィンもまた、心臓を一突きにえぐる。

肉体をもたぬ精神体といっても、魔力の核となるべき部位は存在する。
その代表的のものが頭部と心臓だった。
死霊や高位の妖魔がそれにあたる。

……だが

「笑止」

無造作に払われた手にレーヴェもエルウィンもあっさりと叩き落されてしまった。

血しぶきが宙を舞う。

インパクトの瞬間、レーヴェの右半身がバキバキと嫌な音をたてて歪むのが網膜に焼き付いて離れない。

「いやあああああああああああ！！！」

私は夢中で駆け出していた。

どうせ死ぬのなら、せめてみんなとともに戦いたい。

「くるんじゃねええ！！」

とうに気を失っていてもおかしくない。

全身を朱に染めたレーヴェの大喝が私の足を止めた。

「応援してろって言っただろ？惚れた相手を守るためなら、力なんていくらだって湧いてくるんだからよ」

「……そうよ……エルちゃんのためなら私は無敵になれる……！」

「レーヴェ……セイリア……」

二人とも気力だけで自分を支えている。
そして、これほど絶望的な状況で、戦うことをあきらめていない。
その心の強さを改めて誇りに思う。

ジェイドから感じる魔力が半減しているのは間違いない。
レーヴェたちの攻撃は効いている。効いているのだ。
私に……私に魔力さえあれば……！

「不快な目だな……ひとおもいには殺さんぞ……！」

ジェイドが放った光の矢がレーヴェとセイリアに吸い込まれた。
それをかわす体力は……二人には残されていない。
レーヴェとセイリアの両手両足が光の矢に縫い付けられる。

「ぐあああああああ！！」

光の矢を追うように電撃が走る。
レーヴェとセイリアが苦悶の絶叫をあげた。

「やめてえええええ！！！」

力が欲しい

二人を守れるのならこの命を差し出したってかまわない

私のなかの魔力……！この先二度と魔術が使えなくなってもいい！
どうかあの二人を助ける力を貸して……！

その時、私のなかでもうひとつの意識が呟いた。

（魔力ならここにあるではないか）

最終話　前編

（魔力ならここにあるではないか）

私のなかから聞こえるもうひとつの意識

（あなたは誰？）

念話ならわかるが、自分のなかにもうひとつの意識があるという感覚に戸惑いを隠せない。

（まあ、簡単に言えばこの身体のベースになったエノクの残留思念といったところかの）

亜神エノク！

思いがけない助けの手に私の心は歓喜に震えた。

（どこ？いったいどこに魔力があるというの？）

（わからぬか？この身体そのものが魔力なのだ。魔術身体はそもそも高密度の魔力で編まれておるからの）

（それじゃどうやって魔力に変換するんですか？教えてください！）

（これこれ、ちょっとは考えんか！）

エノクがとまどったように言う。

（今のお前は魔術身体という器に魂を容れたような状態じゃ。器がなくなれば魂は冥府に戻るしかない。それでも良いのか？）

エノクの言葉に私は改めてレーヴェたちを見た。

光の矢に貫かれながらも突き刺さった矢をそのままにゆっくりと身を起こすレーヴェ

激痛に耐えながらその身を大地に横たえたまま魔力を練るセイリア

……この二人を助けるためなら、できないことなどなにもない。

そうして覚悟を決めた瞬間、今までずっと喉につかえていた何かが飲み込めた気がした。

……ああ…そうか……愛しているんだ……

氷に心を鎧っていた……でも本当は淋しがりやなセイリア

表現は不器用だけど愁いを秘めた菫色の瞳が全身全霊で私を愛していると告げていた。

彼女の永い孤独を癒せるのは自分だということが、どれだけ誇らしくうれしかったろう。

陽気で不屈な男レーヴェ

私のなかの女が欲してやまない漢のなかの漢

そのあけすけな愛情表現にどれだけ胸を高鳴らせたことか

その屈することを知らぬ闘志にどれだけ勇気づけられたことか

愛している

愛している

愛している

今ならなんのわだかまりもなく私という存在の全てを受け入れられる気がする。
エルロイとしての私も
エルファシアとしての私も
男としての私も
女としての私も

それは私というひとつの魂

愛してくれてありがとう。
私も愛してた……本当はずっと前から愛していた。

だから……さよなら……

（……変換術式を教えてください）

（良いのか？）

（好きな人を救う手があるのにそれを使わないなんて乙女が廃りますから）

（……／／／）

……こ、これは妾の身体とも思えん可愛らしさじゃ……カリウスが男に戻せなかったのも無理はない……！

（ならば感じよ。血脈を流れる魔力を。魔力を生み出し魔力を編み出す心の臓腑を。）

次の瞬間

感じたことのない魔力の渦が私の体内に満ちた。

火山のごとく噴き上がる膨大な魔力に気づいたレーヴェが破顔した。

「魔力が戻ったのか！エル！！」

「……もう大丈夫。レーヴェ、格好よかったよ」

「惚れ直したか？」

「……うん……惚れてる」

レーヴェの顔が真っ赤に染まった。血圧があがって出血がひどくなったような気もするけど……

「エルちゃん！私は！？」

「もちろんセイリアも……愛してる」

セイリアの瞳が歓喜に潤み……間をおかずして疑惑の視線に変わった。

やっぱりセイリアは騙せなかったか……

「エルちゃん……その魔力は……何？」

無理もない。

膨れ上がる魔力の量は、かつて私が制御した魔力量を遥かに上回っているのだから。

「どういうことだ？エルの手が消えていく……！」

「まさかそんな……？術式変換？エルちゃんやめて！！」

「セイリア！説明しろ！」

「エルちゃんは自分自身の身体を魔力に変換しているのよ！このままじゃエルちゃんが消えちゃう！」

レーヴェとセイリアの顔色が変わるのがわかった。

でも、私の決心を変えることは出来ない

「やめるんだ！エル……！お前はまた……またオレたちを残して自分を殺すつもりなのか……！」

「レーヴェが助かるなら……セイリアが助かるなら…私はためらうつもりはないわ」

「お願い！エルちゃん！バカな真似はやめて！貴女が助からないのなら私はなんの為に戦ったの？貴女のいないこの世界になんの意味があるの？」

そうだねセイリア……今ならその気持ちがよくわかる……でも、私は我侭だから……

もう既に下半身が消えている。
上半身が消え果るまで、あといくらもないだろう。

「ジェイドはオレが倒すから……やめろ！やめて戻って来いエル！！」

「ダメだよレーヴェ……もう私を止めにくることもできないくせに……」

「ちくしょおおおおお！動け！このバカ足！今動かずにいつ動くってんだこのやろおおお！！」

レーヴェが走り出そうとして果たせずに倒れこむ。

いつしか空は黄昏のときを迎えていた。
昼と夜を繋ぐほんのわずかなひとときがたとえようもなく美しい。
もうすぐ私はあの黄昏の向こうへ旅立つのだ。

「レーヴェに出会えたから……私は幸せだったって言える……セイリアに出会えたから……私は人を愛せたって思える。
二人がいる世界だから……この世界が美しいって思える……この世界が愛しいって感じる……ありがとう……そして…
ごめんね……大好きだよ」

「エルゥゥゥゥゥゥゥゥゥゥ！！！！」

愛しい人の叫びとともに……私は意識ある魔力となって、ジェイドという魔力を押しつぶした。
ジェイドの意識が一片残さず磨り潰されるのを確認して……私の意識は闇へと落ちていく。

今度生まれ変わったら……素直に付き合いたいな……恋人らしいことたくさんして……いっぱい甘えて……

（強情者め。ぞんぶんに甘えるがよいわ！）

最後に、怒ったような苦笑するようなエノクの呟きが聞こえた気がした……

最終話　後編

あまりにも強大な魔力の衝突に、その衝撃は嵐となって吹き荒れる。
魔力同士がぶつかって雷を生み、衝突の余波が竜巻を呼んだ。

そして、レイガルドの大地に
二人の亜神の力がぶつかりあった巨大な痕跡を残して
亜神ジェイドとエルファシアは虚空へと消えた。

「ちくしょおおおおおお！！！」

瓦礫の荒野と化したレイガルドの大地のうえを、レーヴェの咆哮が木霊した。

「オレはまた！また同じ過ちを！あいつがオレたちのためなら簡単に命を投げ出してしまうのを知っていながら！
どうしてオレは……うおおおおおおおおおお！！」

魂すら震わす慟哭が韻々と響く。

「いや……こんなのは嫌！……エルちゃん……エルちゃん……！」

うつろな瞳を彷徨わせて、うわごとのようにセイリアが呟いた。

「いつも！いつもそうだった！あいつだけが打開の手段を知っていて……オレはその指示に従うことしかできなくて……あいつには見えることがオレには見えない……！何が英雄騎士だ！惚れた女すら守れねえ騎士なんざ……っ！」

衝動的に己の胸に槍を突きたてようとしたレーヴェを細く引き締まった男の手が止める。

「……カリウス……」

いつの間にか姿を消していたエルファシアの使い魔がそこにいた。疲労の色を面差しに色濃く残してはいるが、無傷の端正な佇まいに思わずレーヴェは激高した。

「カリウス！てめえ今までどこで何してやがった！お前が……お前がいればエルは……！！」

「わかっております」

苦渋の表情を隠そうともせずカリウスははき捨てるように答えた。

「ですが、エルファシア様にはここで死んでいただく必要がありました」

「……なんだと……？」

死ぬ必要だと……？そんなものがある人間がいてたまるか！まして使い魔のお前がそれを言うのか……！

「エルファシア様はあまりに目立ちすぎました。亜神エノクの不老不死の身体を持つ者として、そして強大な魔力とカリスマを備えた復讐の魔女として……。たとえこの戦いがエルファシア様の勝利に終わったとしても大陸中の亡者たちがエルファシア様の力を求めて猟犬を送ることになったでしょう。それはただエルファシア様にとどまらずギルドやレーヴェ様たち仲間へと及んでいくのは火を見るより明らかです。残念ながら私の手はエルファシア様だけならともかく親交あるお仲間全てをカバーできるほど広くはない……」

もはやレーヴェはカリウスへの殺意を抑えられなかった。

「だからエルを見殺しにしたというのか！」

槍を正眼に構える。

許せなかった。

エルファシアの死を正当化する理屈など認めるわけにはいかなかった。

竜器たる槍が青白く輝く……心臓目掛けて繰り出された神速の突きをカリウスは己の右手を犠牲にすることでかろうじて防いだ。

「主の死を容認する使い魔の罪、確かに万死に値しましょう。なれど転送されたエルファシア様をお迎えするまでしばしの間お待ちくだされ」

……今さらりととんでもないことを口にしやがらなかったか……？

「カリウスさん……今、エルちゃんを転送したと言ったように聞こえたのだけれど……」

「ええ。妖魔の領土の奥深くですがそこに予備身体を保管してあるのですよ。もう未盗掘の工房は妖魔の領域にしか残っておりませんので……」

レーヴェとセイリアはお互いに顔を見合わせた。

「エルちゃんの身体って……何体もあるものなの……？」

心外な！という顔をしてカリウスが答える。

「エノク様の魂の器たる魔術身体が1体しかないわけがないでしょう！だいぶ少なくなりましたがまだ3体は保存されております。もっとも転送装置はフリギュアにあったものが最後でしたので間に合わせるのに苦労しましたが……」

「それじゃレイガルド城に入ってからカリウスさんが見当たらなかったのって……」

「もちろん転送の準備をしておりましたが何か……？」

レーヴェとセイリアの声が見事に重なる。

「「そういうことは早く言えええええええ！！」」

眠い……
ずいぶん長く眠っていたような気がする。
長い夢を見ていたような……
泣きたくなるくらい哀しくて、泣きたくなるくらい幸せな夢だったような気がする……

意識は夢とうつつを行き来しながら
遠くから聞こえる喧騒を伝える……騒がしいな……私はまだ寝ていたいのに……

「エルの処女はオレがもらったあああああ！」

上級妖魔が手も足も出ずにレーヴェの槍に串刺しにされる。

「エルちゃんを最初に孕ませるのは私よおおおおおお！」

セイリアの禁呪を食らった妖魔が数千単位で声もなく塵と化した。

「お子様の名づけ親の権利は譲りませぬぞおおおおおお！」
疾風と化して駆け抜けたカリウスの周りからポロポロと妖魔の首が落ちて赤い花が咲き乱れた。
「魔王の配下四天王の城がこんなにあっさり抜かれるなんて……こいつら人間じゃねえ！」
「つ、強すぎる……！」
「「オレ（私）とエル（ちゃん）の再会を邪魔しようってえ命知らずはかかって来やがれえええ！！」」

背筋をゾッとするような悪寒が走って私は目を覚ました。
なんだろう……？なんだか激しく貞操の危機を感じたような……
目覚めて見れば暗い箱の中にいるらしいことがわかった。
前にもこれと同じことがあったような……
私の目覚めを感知したのかギギギ…と軋むような機械音とともに箱の蓋が開いていく。
「……いったいここは……」

完

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4682e/

ある魔女の受難

2010年10月10日10時34分発行